

トワイライトエクスプレス時刻表（下り①）

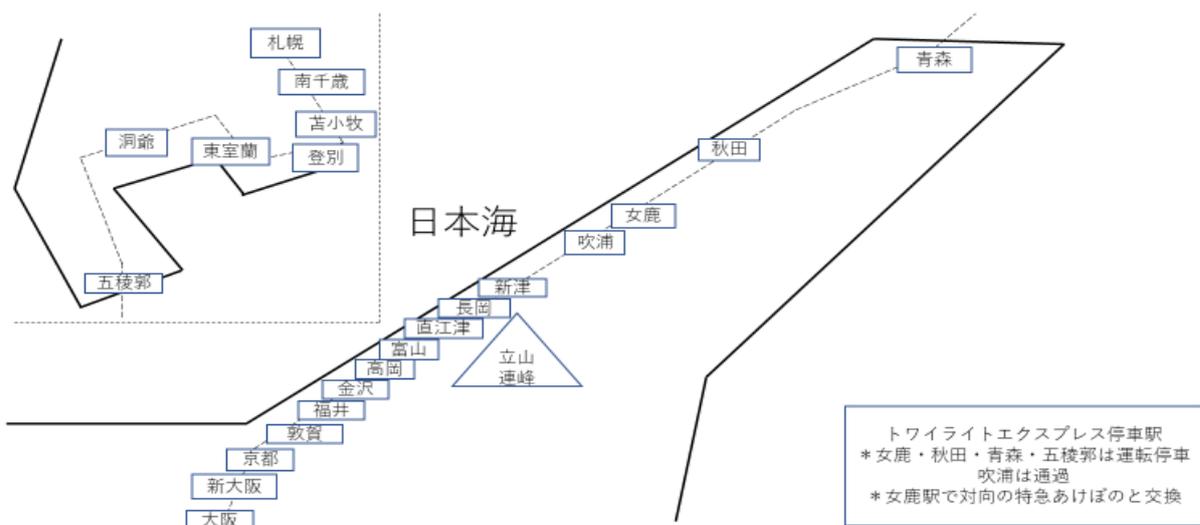
大阪	11:11	入線	11:50	始発
新大阪	11:55	着	11:56	発
京都	12:24	着	12:25	発
敦賀	13:46	着	13:48	発
福井	14:40	着	14:40	発
金沢	15:37	着	15:40	発
高岡	16:14	着	16:14	発
富山	16:30	着	16:31	発
直江津	17:57	着	17:59	発
長岡	18:56	着	18:58	発

トワイライトエクスプレス時刻表（下り②）

新津	19:37	着	19:39	発
女鹿	22:33	着	22:37	発（*）
秋田	23:51	着	23:56	発（*）
洞爺	07:18	着	07:18	発
東室蘭	07:52	着	07:54	発
登別	08:11	着	08:12	発
苫小牧	08:50	着	08:50	発
南千歳	09:10	着	09:11	発
札幌	09:52	終着		

*印：運転停車。乗客の乗降は不可。

トワイライトエクスプレス 路線図



トワイライトエクスプレス 編成図



- 1号車：A寝台個室スイート・ロイヤル・車掌室
- 2号車：A寝台個室スイート・ロイヤル
- 3号車：食堂車『ダイナープレヤデス』
- 4号車：サロンカー『サロン・デュ・ノール』
- 5・6号車：B寝台個室ツイン・シングルツイン
- 7号車：B個室寝台ツイン・シングルツイン・ミニロビー
- 8号車：B寝台コンパートメント
- 9号車：B寝台コンパートメント・車掌室

登場人物

剣 礼士…5号車3号室の乗客。秋田新幹線運転士。
 碓氷 瑞穂…1号車5号室の乗客。居酒屋『かま田』店員。
 釜田 神威…5号車3号室の乗客。居酒屋『かま田』店長。
 白雪 春江…5号車1号室の乗客。釜田の元妻。
 熊野 寛太…5号車2号室の乗客。
 浅間 早苗…5号車2号室の乗客。
 三吉 志恩…車掌。
 草津 暁男…車掌。
 川越 孝弘…厨房クルーチーフ。
 黒糸 澄佳…厨房クルーセカンド。
 朝霧 良造…厨房クルーサード。
 大和 叶…ホールクルーマネージャー。

列車概説

トワイライトエクスプレス…かつて大阪と札幌を結んでいた豪華寝台特急。ハイクオリティな料理にバラエティ豊かな車内設備、何よりも日本海に沈む美しい夕陽を売りにしていた。非常に人気が高く、切符を手に入れるのは至難の業だった。2016年3月、北海道新幹線開業を理由に定期運行を終了。翌年3月まで貸切列車として運行され、完全引退。現在、一部車両は京都鉄道博物館で展示されている。

*本作に登場する全ての図について、無断転載を固く禁じます。

大久保 幸…ホールクルーセカンド。
中村 一真…ホールクルーサード。
赤倉 翔一…大和の婚約者。
池本 陸…山形県警警部。
矢野 友久…秋田県警警部。
犬塚 麗央…秋田県警刑事。
安部 滯…秋田県警鑑識課。

第二話 黄昏に死す

プロローグ

夜。

暗い線路が、僅かに響き始める。

遠くから眩い光が夜闇を照らし、二本のレールを鋭く

浮かび上がらせる。

機関車が甲高く警笛を鳴らす。

そして、堂々と駆け抜ける。

深く艶のある緑色の車体には、喇叭を高らかに鳴らす

天使の姿が描かれている。

鉄路の王者が通り過ぎた後、そこにはただ闇と静寂が

残るばかり。

栄光の列車を目の前に、人は言う。

旅は、ここにある。

第一章

青く、高い空を行く。

私はぼんやりと窓の外を見つめていた。地上は雲に遮られて、見えない。

鉛色の雲…あの日はそんな天気だった。鉛色の下の大地を、どす黒く邪悪なうねりが覆いつくした日。

人は地面の上に暮らしを、文明を築いた。それは、辛うじて地面に苔のようにへばりついているだけのひ弱な

ものだった。それを思い知らされた。

あの日から雲が嫌いだ。海が怖い。雪が苦手だ。

「どうかしましたか、碓氷さん？ 浮かない顔をしていますか？」

隣の席の劔さんが心配そうに私を見る。

「飛行機にでも酔いましたか？」

「え？ ああ、いえ、何でもありませんよ。少し考え事をしていただけです」

私は笑みを取り繕って答える。

2013年5月4日。

全日空1654便は私達を乗せ、秋田から大阪へと向かっていった。

* * *

水の都、大阪。古くから天下の台所として繁栄し、今も日本の要となつていている。私達がその地を踏んだ時には、陽もそれなりに高く空に昇っていた。

「あくあ、着いた着いた」

私の横で釜田さんが大きく伸びをした。背骨がバキバキと鳴る音がする。

「こつちですよ、お二人さん」

劔さんは先にゆつくりと歩き出した。周囲には関西弁が飛び交う。遠いところに来た。

モノレールと阪急電車を乗り継いで梅田を目指す。阪急電車の車内ディスプレイでは天気予報が流されていた。

本州は曇り、北海道は5月にも関わらず雪の予報だ。

「劔…一応ダメ元で聞いておく。たこ焼きは？ お好み焼きは？ 吉本新喜劇は？」

釜田さんが劔さんの顔を見て言う。

「すいません、時間的に無理です」

「やっぱりなあ、せっかく来たつてのによ」

私は初めから特に期待していなかった。今後の旅程を最初から把握しているからではなく、単に過度な期待をして勝手に失望するのが面倒なだけだった。

「まあまあ、今から何か食べると後で後悔しますよ」

程なくして梅田に着いた。人込みを掻き分けつつJR大阪駅へと向かう。背が高い剣さんを目当てに歩けばいいだけなのだが、結構苦勞する。

「碓氷さん、大丈夫ですか？」

「ええ……凄い人の数ですね」

私は少し息を荒くしながら答えた。

「もうじき改札に着きます。それまで辛抱して下さい」程なくして、私達は改札口にたどり着いた。

「着きましたよ。はい、きつぷ」

私と釜田さんにきつぷを渡す。大阪に出てから札幌に行くことを少し前に聞かされたきりで、私は詳しい旅程を何も知らされていない。きつぷに印字された文字を見て改めて驚いていた。

「まさかとは思いましたが……本当にここから札幌まで列車で行くんですか!？」

「ええ。言ったでしょう、札幌旅行に行くって」

本当に列車で札幌まで行くのに、わざわざ大阪まで出てきたんだ……。

「列車で行くといっても、碓氷さんが想像しているような列車ではありませんよ。たぶん、今の碓氷さんには想像もつかないと思います。期待して下さい」

私の呆れ顔が目についたのか、剣さんは補足説明をする。あまり説明にはなっていないが、列車名を見ても、長ったらしい横文字が書かれているだけでいまいちピンとこない。本当に大丈夫なのだろうか。

「この旅行、喜んでくれるといいな、碓氷の奴。事件が

起きてからずっとふさぎ込み気味だったしな」

「大丈夫ですよ」

二人の会話が耳に届いた。

「行きますよ、碓氷さん」

剣さんの後を慌てて追う。私はきつぷを改札に通した。

* * *

大阪駅、10番ホーム。ここに来るたびに、いつもいつも誇りと重圧に押しつぶされそうになる。クルー一同はホームに一列に横並びする。

今日のクルーは私を入れて六人。多客期だが増員は無かった。かなり忙しくなりそうだ。

「大和さんは……今日が最後ですか」

「川越さん」

隣に並ぶ川越料理長が私に話しかける。

「結婚ですか。まだお祝いを言えていませんでしたね。おめでとう、末永くお幸せに」

「ええ……ありがとうございます」

翔一君の顔が浮かぶ。本当はこの職場で働き続けたかったのだけど、いかんせんハードな泊まり勤務が基本だ。結婚生活に支障が出ると難色を示されて退職を決意した。

相手の仕事をよく知らないから共働きじゃないのが少し不安だが、まあ何とかなるだろう。いざとなれば僕の会社で働けばいい、とも言ってくれたからまた当てはある。

「しかし、惜しいですね。何だかんだ言って大和さんはよく働くから。後釜も決まったには決まったそうですが……この業務はかなりきついから、どうなることやら」

「私も名残惜しいです。あ、後任の人についてはちゃんと引継ぎをしますから」

雑談はここまでにする。まもなく入線時刻だ。

お客様にご提供したいのは、最高の旅。

遠くから鋭い警笛が鳴り響く。

クルー一同に緊張が走る。

鉄路の王者は堂々と姿を現し、私達の前を通り過ぎる。

私達は深々と頭を下げる。

心の底からの敬意を込めて。

* * *

大阪駅は当たり前ながら大ターミナルだった。数多の鉄骨で支えられた巨大な斜め屋根の下を列車がひっきりなしに行き交う。ゴールデンウィークの途中と言えどもスーツ姿のサラリーマンの姿が目立つ。

でも、この10番線にだけは独特な空気が漂っていた。何だろう……強いて言葉にするなら高揚感、だろうか。

スーツ姿の客はほとんどおらず、客のほとんどは私達と同じく大荷物を手にしている。そして皆、期待に目を輝かせている。

私は改めて手にしたきつぷを再び見ようとした。しかし、それを遮るものがあった。

遠くから甲高い警笛が聞こえた。ホームにチャイムが鳴り響き、アナウンスが列車の到着を告げる。そして、……その列車は姿を現した。

列車にお辞儀をするクルー一同。

手を振る子供。

カメラを構える剣さん。

そして、圧倒される私。

時刻は11時11分。

トワイライトエクスプレスは大阪駅に入ってきた。

* * *

最後の旅が始まる。

私は、いつも通り気を引き締めた。

* * *

最後の旅が始まる。

私は、いつも通り気を引き締めた。

* * *

最後の旅が始まる。

私は、いつも通り気を引き締めた。

* * *

艶やかな深緑に黄色の線が入ったその列車は、明らかに他の列車と一線を画していた。気品、とても言えはいか。圧倒されるような、それでいてとても心地良いような何かを乗る前から肌身感じていた。

「これが……？」

私は驚きの表情をしながら列車を指差した。

「そうです。これが、トワイライトエクスプレスです」

剣さんの声にも興奮が滲み出ていた。

「写真……撮りましょうよ」

剣さんは私と釜田さんを誘い、先頭の機関車へと向かう。少し並んだら順番が回ってきた。機関車の顔をバツクに、親切な乗客がスリーショットを撮ってくれた。

機関車に取り付けられている桃色のヘッドマークには、

Twilight Expressの文字。その文字の上には高らかに喇叭を鳴らす天使の姿があった。

なるほど、天使か。この列車は。

「確氷、こっち向け」

釜田さんの声がした。

横には剣さん。

「笑え！」

釜田さんの声には満面の笑みで返した。

こんな笑顔になったのは、本当に久々だ。

* * *

確氷さんのこんな幸せそうな笑顔を、僕は初めて見た。

僕が決心したのは、この時だった。

* * *

「中村！ その空箱は置いて行け！ 邪魔だ！」

「こら、大久保！ ウェルカムドリンクの用意はどうな

ってる！」

「食器を早く出せ、黒条！」

「朝霧、どけ！ 早く銀食器を並べろ！」

舞台裏は毎度毎度こんなものだ。これが最後だなんて

感傷に浸っている暇は一切無い。私と川越さんが主軸に

なつて矢継ぎ早に指示を飛ばす。厨房クルーはランチタ

イムに備えて少しでも早く調理を開始しなければならな

い。少しでも滞りが生じたら後々厄介なことになる。

「大和さん！ このワゴン手伝って！」

「コンロ点火しました！」

発車までの時間は慌ただしく過ぎていく。

* * *

写真を撮り終わると、剣さんがじっと私を見ているこ

とに気付いた。

「お化粧、変でしたか？」

「え？ ああ、いや、少しぼーっとしてました」

剣さんはなぜか照れ笑いを浮かべた。

写真撮影もそこそこの、私はいよいよ車内へと入る。

ドア横の行先表示にも札幌と書かれていた。

きつぷを見ながら自分の部屋を探す。きつぷには1号

車5号室、A個室ロイヤルと書かれている。

それにしても瀟洒で重厚な雰囲気の内だ。床一面に

はカーペットが敷かれ、壁はダークブラウン基調の木目

調。列車と色彩を合わせたのだろう、柔らかな照明の光

を受けながら深緑色の二段寝台が整然と並んでいる。

「ここは9号車ですから……確氷さんは一番向こうまで

行かないといけませんね。案内しますよ」

私は返事をするのも忘れて剣さんの後に続いた。

途中の5号車で剣さんと釜田さんは部屋に入った。

「釜田さん、ここが今夜の部屋です。5号車3号室、B

個室ツインです」

私も部屋の中を覗いてみる。落ち着いたダークブラウンの寝台と二脚のソファが設置されていた。壁には姿見と金属製の梯子が設置されている。

「僕と相部屋です。確氷さんには一人用個室を推させてありますので。この列車でも最上級クラスの客室です」

「え、でも、私だけがそんな部屋に泊まっていいいんですか？ 特に店長の釜田さんを差し置いて」

「あほ言うな。俺だけ一人部屋で、お前ら恋仲でもねえのに相部屋なんてできるわけねえだろうが。仮にもお前は女だろ、確氷」

そりゃそうか。そんな基本的な事に思い至らなかったとは、よっぽどこの列車に圧倒されたのだろう。もしくは時が過去を癒したのか。

「しかし、こんな繁忙期によく取れたな。そんな部屋」

「こればかりは運ですよ。本当は僕や釜田さんにも良い部屋を推さえたかったですけどね」

「いやいや。個室だけでも上等だ。確氷も部屋に行つてこい。そのトランク、重いだろう」

剣さんの後に続く。通路には大荷物姿の乗客がいて、狭い通路では行き違うのに少し苦労した。4号車、3号車と通路を行く。そして、2号車、1号車。通路に面した客室ドアの数が減った。それだけ一部屋当たりが広いのだろう。さつきまでのB寝台よりも明らかにグレードが上がっている。

「ここですよ、確氷さん。1号車5号室、A個室ロイヤルです」

「ありがとうございます……」

引き戸を開けて中に入った私は、目の前の光景が信じられなかった。

てっきりベッドが一つあるくらいだと思っていた。し

かしいご部屋に入ってみると、大きめのソファに椅子、机、電気スタンド、テレビ、ドライヤー……さながら小さな書斎といった雰囲気だ。

これが、列車の中だというのか。

「すごいでしょう？」

返事をするのも忘れて中に入る。脱いだ靴を揃えることさえ忘れていた。

「僕はさっきの部屋に釜田さんといいますね。後で検札とそれとこの部屋にはウエルカムドリンクが来ますので。ウエルカムドリンクの案内で朝食の時間が聞かれるはずです。6時からのものを予約して下さい。僕と釜田さんもその時間にしますので」

ウエルカムドリンク、朝食……そんなものまであるのか。列車……よね、ここ？

「あと、これを渡し忘れないうちに。今夜のディナーの予約券です。17時半からです。いろいろあつて、僕と相席になりました。釜田さんは僕らの後の時間です」

「ディナー……」

とても列車の中の話とは思えず、言葉が見つからない。

「食堂車のランチに行くときになったら連絡しますね。」

それじゃあ、また後で」

釜さんは部屋の外に消えた。

窓の外には、手の届かない世界を前に羨望の眼差しを向ける人の姿が見える。それだけ凄いのだろう、この列車は。自分にはあまりにも釣り合っていない気がする。

頭上からオルゴールのチャイムが響き、アナウンスが流れ始めた。

『皆様、本日は寝台特急トワイライトエクスプレスにご乗車下さいまして、誠にありがとうございます。この列車は札幌に向けまして、まもなく発車致します。ドアが

閉まります。ご注意ください』

ホームに列車の発車を告げるアナウンスが響き、車掌が笛を鳴らす。ドアが閉まる。

機関車が甲高く警笛を鳴らす。時刻は11時50分。トワイライトエクスプレスはゆっくりと、札幌に向けて走り出した。

* * *

一瞬、走り出したことに気付かなかった。トワイライトエクスプレスはゆるゆるとホームを後にし、薄曇りの空の下へと出た。床下からごとごとと線路の音が響き、ポイントを通過するたびに軋みが聞こえる。何気ないはずのこんな音にさえ、感じ入るものがある気がする。

私はソファにトランクを置き、ハンガーにトレンチコートを下げる。備え付けの椅子に深々と腰かけ、テーブルの上のパンフレットを開いた。

頭上のスピーカーからピアノの旋律が始まった。これは……山口百恵『いい日旅立ち』のメロディだ。北上するから鬼束ちひろの『いい日旅立ち・西へ』の方ではないだろう。音楽をBGMに、自動放送が始まった。

『今日はトワイライトエクスプレスにご乗車下さいましてありがとうございます。皆様の夢を乗せまして、トワイライトエクスプレス、大阪駅を発車しました……』

メロディがサビの部分に差し掛かる頃、列車は白い鉄橋を渡り始めた。淀川だ。ゆったりとしたその巨大な流れは、薄雲越しの陽光に照らされて輝いている。

BGMが終わり、放送が車掌の声に変わった。

『お客様にご案内致します。本日はトワイライトエクスプレスにご乗車下さいまして誠にありがとうございます。担当車掌は三吉と草津、途中の青森まで一緒させて頂きます。ただいまより、各部屋のご案内も兼ねまして乗

車券を拝見させて頂きます。お部屋に車掌が伺いますので、皆様、ごゆっくりお寛ぎ下さいませ』

列車は淀川を渡り終え、すぐに新大阪駅に着く。少しして発車し、段々と速度を上げる。でもガンガン飛ばすわけでもなく、他の列車と並んで抜きつ抜かれつを何度か繰り返す。何の変哲もない列車の乗客と目が合う。相手は微笑み、手を振る。こっちも微笑んで手を振り返す。

ノックの音がした。返事をして、引き戸の回転錠を開ける。開錠の少し重い音がして戸を開ける。

「こんにちは。本日はトワイライトエクスプレスにご乗車下さいましてありがとうございます。きつぷの拝見に伺いました。私は車掌の三吉と申します」

さっきの放送の声の人だ。深緑色の制服に身を包んだ若い男性車掌は、私の前でお辞儀をした。どこことなく茸に似た髪型をしている彼は、穏やかな笑みを浮かべた。

「あ、えーと、これですか？」

財布から乗車券と特急券、それに寝台券をまとめて引っ張り出す。

「少々失礼……はい、札幌まででございますね。部屋もお間違いないようなので、客室設備のご案内をさせて頂きたいのですがよろしいでしょうか？」

「は、はい。お願いします」

あまりの丁重さに逆にこっちがしどろもどろになってしまふ。こういった扱いには慣れていない。

「硬くならなくても大丈夫ですよ」

三吉車掌は柔らかな笑みを浮かべ、きつぷに判子を押す。私は返されたきつぷを財布にしまった。

「では、失礼致します。こちらはA個室ロイヤル、当列車自慢の二室のひとつでございます。空調と電気はこちらのスイッチで調節可能となっております。ベッドは……」

…少々お荷物をよけさせて頂きますね」

私のトランクをソファから床に移し、壁のスイッチを押す。小さなモーター音と共にゆっくりと背もたれが倒れ、シートが敷かれたセミダブルベッドに早変わりした。「このようにスイッチを操作して頂きますと、ベッドになります」

「凄いです…」

「驚かれましたか？」

「ええ……こんなに凄い列車に乗ったのは初めてなので、きつと満足頂けず。ベッドからソファに戻す際は、反対側にスイッチを押して下さい」

試しにソファと書かれた方にスイッチを押してみる。

なるほど、あつという間にソファへと戻った。

「こちらはシャワールームとなっております、お手洗いと洗面所も兼用となっております。トイレトペーパーはこちらになります。シャワーをご利用の際は便器と洗面台をこのように畳んでご利用下さいませ」

そう言う和三吉車掌は壁の中から便器と洗面台を引張り出し、戻した。よくできてるなあ……。

「お湯は最大20分間出ます。追加はできませんのでご了承下さい。お湯はこのボタンを押すと出ます。温度調節はこのつまみをひねって下さい。こちらのメーターにはお湯の残りの利用時間が表示されます」

「あの、石鹸はどこに……？」

「ロイヤルのお客様はこちらの特製のトラベルセットをご利用になれます。使用後は記念にお持ち帰り頂けます」

三吉車掌が手で示した方を見ると、赤紫色のトラベルポーチが机の上に置いてある。まさに至れり尽くせりだ。

「では最後に部屋の鍵の説明をさせて頂きます。お手数ですが、通路にお越し頂けますか？」

言われるがままに通路に出る。

「部屋はこちらのカードキーで施錠できるようになっております。まず、こちらのボタンを押しまして、ランプが光つたのを確認してからカードキーをスライドします。するとランプが点滅し、施錠されます」

実演してくれた。ボタンを押すと緑色にランプが光る。カードキーをスライドさせるとランプが点滅し、ガチャリと重く鍵がかかる音がした。引き戸を引いてもガタガタ言うだけで全然開かない。

「開錠する際も手順は同じです。ボタンを押し、部屋番号が点灯している間にカードをスライドして下さい」

同じ手順を繰り返す。ガチャリと鍵が開いた。

「こちらがカードキーになります。よろしければ、旅の記念にお持ち帰り下さい」

そう言う和三吉車掌は私にカードキーを手渡した。深緑色のカードには列車のシンボルマーク、喇叭を吹く二人の天使の姿が描かれている。

「車掌室はこの1号車と9号車にございます。何か御用がございましたら遠慮なくお申し付け下さい。説明は以上になります、何かご不明な点はございますか？」

「いえ、大丈夫です。ご丁寧ありがとうございます」

「とんでもございません。この後、ホールスタッフがウェルカムドリンクとこの後のディナー、明日のモーニングのご案内に伺います。それでは、素敵な旅をお楽しみ下さい。本日のご乗車、誠にありがとうございます。失礼しました」

三吉車掌は部屋から去った。私は再び深々と椅子に腰かけ、感嘆のため息を漏らすしか他に無かった。

*

*

新大阪を出てしばらくした後。私は1号車5号室の戸

をノックした。

「はい」

部屋から女性の声がする。引き戸が開くと、背の高い女性客が姿を見せた。

「お寛ぎのところ失礼します。この列車のホールクルーの大和と申します。後ほどお持ち致しますウェルカムドリンクのご注文を伺いに参りました」

私は澀みなく述べる。

「ああ、え、ウェルカムドリンク？」

「はい。スイート、ロイヤル客室のお客様への限定サービスでございます」

女性客は眼鏡の中の目を瞬かせた。驚いている。珍しいことではない。

「こちらでご用意しているお飲物は赤ワイン、白ワイン、ウイスキー、コーヒ、紅茶、オレンジジュースでございます。いかがなございますか？」

「そうですね……紅茶はありますか？」

「ストレート、ミルク、レモンの三種からお選び頂けます。それぞれホットとアイスがございます」

「じゃあ……ミルクをホットでお願いします」

「かしこまりました。後ほどお持ち致します。続きまして、本日のディナーと明日のモーニングのご案内をさせて頂きます。ディナーの予約券をお持ちですか？」

「ディナー……あ、これですか？」

女性客が財布から券を出す。拝見する。

「17時30分からのディナーですね。かしこまりました。ご予約ありがとうございます。誰かお連れの方はいらっしゃいませんか？」

「お連れの方……ええ、男性が一人。5号車3号室の人です」

「かしこまりました。それでは、二人席をご用意させて頂きます。こちらのディナー券は回収させて頂きます」

予約券を鞆に仕舞う。

「では、次に、明日朝のモーニングは何時からになりますか？ 6時、6時45分、7時半、8時15分から
の四回ございます」

「6時でお願いします」

「かしこまりました。モーニングサービスのお時間はいかがなさいですか？」

「モーニングサービス？」

「お目覚めになられた後、希望されるお時間にドリンクと朝刊の提供を行っております。お部屋にお持ち致しますので、ご希望のお飲物とお時間をお申し付け下さい」

さすがに少し居心地が悪くなってきたのか、女性客は少し困り顔で目を逸らした。

「飲み物は何が……？」

「先程申し上げたウエルカムドリンクと同じ品揃えになっております」

「……じゃあ、ミルクティーをホットで8時頃にお願ひできますか？」

「承知致しました」

私は一礼し、メモを取る。

「それでは、ご予約を全て承りましたのでこれで失礼させて頂きます。ウエルカムドリンクは後ほどお部屋の方にお持ち致しますので、しばらくお待ち下さい」

「わざわざありがとうございます」

「いえいえ、とんでもございません。それでは失礼致します。ゆつくりお寛ぎ下さいませ」

私は一礼して廊下へと戻った。次の部屋に向かう。

* * *

再び私だけになった部屋を改めて見回す。木目調の壁に、落ち着いた深緑のソファベッド、さらに専用のシャワートイレまである。これが列車の中なのか。確かに乗っているのに、にわかには信じられない。さすがに食堂車の食事は全て列車の中で作れはせず冷凍物か何かだろうが、それでも驚嘆に値する。

車窓をぼんやりと眺める。頭の中に、歌の一節が自然と思ひ出される。

♪いい日旅立ち 幸せを探しに

子どもの頃に歌った 歌を道連れに……

頭上からチャイムと、それに続いてアナウンスが響く。

『まもなく、京都、京都です。京都の次は、敦賀に停まります……』

* * *

検札の車掌がやってきたのは京都を発った後だった。茸のような髪型をした若い男の車掌だ。

「本日はトワイライトエクスプレスにご乗車下さいましてありがとうございます。私は車掌の三吉、検札に伺いました」

俺と剣はめいめいにきつぷを出す。車掌は手際良く判子を押した。

「ありがとうございます。お二人とも札幌まででございますね。引き続き、車内のご案内をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ええ、お願いします」

俺はぶつちやけ要らなかつたが、剣が承諾した。まあいいか。あまり大きくない部屋のため、車掌の半身が開けっ放しのドアから通路にはみ出している。

「こちらは5号車3号室、B個室ツインとなっております。室温調整はこちらのパネルで行えます。上段のベッドはこのスイッチを押してもらいますと、電動で上下します。操作される際は頭をぶつけないようにお気を付け下さい」

車掌は壁に埋め込まれたエレベーターのボタンみたいな装置をいじった。モーター音と共に上のベッドがゆつくりと降下してくる。

「上段はこちらの梯子を使ってご利用下さい」

壁際に取り付けられた金属製の梯子を指し示す。窓際に引っ掛けてがっちり固定する器具がある。

「下段は今お座りになられているソファを倒すことでベッドになります。テーブルを畳んでからご利用下さい」

室内の説明が済み、部屋の鍵の説明に移った。ホテルそのものだ。

「お手洗いは各車両にございます。シャワーはお隣の4号車、サロン・デュ・ノールにございます。あらかじめ食堂車・ダイナープレヤダスにてお買い求めいただくか、または乗務員よりシャワーカードをお買い求めの上ご利用下さい。トラベルセットは4号車の自動販売機でお買い求め頂けます」

説明はこれで終わりのようだ。シャワーカードは後でランチタイムにでも買っておこう。確氷の個室には専用のシャワールームがあるが、まさか仕事でしか関係がない女の部屋のシャワーを借りるわけにはいかない。

「ご案内は以上となります。この後、ホールクルーがダイナーとモーニングのお時間のご案内に参ります。それでは、どうぞゆつくりとお寛ぎ下さい。本日のご乗車、誠にありがとうございます。失礼致しました」

淀みなく説明を終え、車掌は部屋から去った。その後

すぐに食堂車のクルーが来て、食事の予約確認を済ませた。剣が確氷と二人で17時半スタート、俺はその後の19時スタートだ。男性クルーは4号室の方に消えた。

俺と剣はどっかりとソファに座り込んだ。

「しかし、よく取れたな。この列車、バカみたいに人気なんだろう？ 繁忙期できつぷの競争も激しいだろうに」

「こればかりは運ですよ。必勝法なんてのもありませんし。キャンセル待ちのような裏技はありますけど。現に、確氷さんの部屋はキャンセル待ちの連絡が入ったのを即座に押さえたんです」

「こんな人気の高い列車ともなれば、きつぷを転売する輩もいるんだろうな。残念な話だが」

「転売はいけませんよ」

雑談をしているうちに少し喉が渴いてきた。

「自販機で飲み物を買ってくる。何かいるか？」

「んー……水があればお願いします」

「おう」

俺は部屋を出てサロンカーに向かおうとしたが、通路を他の客が塞いでいた。確か反対側の車両にも自販機はあったはずだ。そっちに向かう。

……ん？

他の客の声が聞こえる。……でも何だ、この不快感。

「……まさかここで会うとはね」

「……ああ、今、どうしてるんだ？」

男女の声だ。女の声には何だか聞き覚えがあるが……

どこで聞いた？ 少なくとも最近じゃねえ。

思い出せねえ。いや、何だか思い出したらまずいことになる予感がする。二人の声は二つ隣の部屋、1号室から聞こえてくるようだ。

開けっ放しのドアから女が出てくる。目が合う。

俺は息を呑んだ。

「……お前、な、何で……」

「……あなた……神威さん……!?!」

俺は、逃げるように踵を返した。

* * *

さつきとは別のクルーの人が紅茶を持ってきてくれたのは、京都を出てからしばらくしてからのことだった。ゆつたりと椅子に腰掛け、湯気が立つそれを一口啜ってみる。

「おいしい……」

紅茶はまるやかで、アールグレイの風味が豊かだった。絶対にティーバッグでは出せないものだ。どこまでも手が込んでいる。改めて自分にはこの列車がものすごく釣り合っていないような気がした。

戸を叩く音がした。飲みかけの紅茶をテーブルに置く。返事をして開けると、剣さんと釜田さんが立っていた。

「確氷さん、ちよつといいですか？」

「え？ ええ、どうぞ」

何だか様子がおかしい。剣さんはあまり変わらないが、釜田さんが取り乱した顔をしている。糸のように細い目には、はつきりと驚愕が刻まれている。

「とりあえずここにどうぞ」

戸を閉めながら二人にソファを勧める。鍵を閉める。

釜田さんはどっかりと腰を下ろすと、深いため息を吐いた。顔が両手の中に埋もれる。

「ウエルカムドリンクは紅茶にしましたか。美味しそうですね」

剣さんがテーブルの上のティーカップに目線をやる。

「ええ、アールグレイをミルクで。ティーバッグじゃないんですね。美味しくて驚きました」

少し冷めて程よい温度になった紅茶に再び口をつける。「そりや、この列車ならそうでしょうね。食堂車の料理も全部車内の厨房でちゃんと作るくらいですから」

まじか。驚いてむせた。

「大丈夫ですか？ ほら、これで口を拭いて」

「けほつ……すみません」

剣さんがポケットティッシュを取り出す。ありがたく受け取る。ティッシュに紅茶と口紅が滲んだ。

「本当に全部車内で作るんですか？」

「さすがに下準備くらいは営業センターとかでするらしいですけどね。多分食べたら分かりますよ。とても評判がいいんですよ、この列車の食堂車は」

それは楽しみな気もするが、私はまた多少疑っていた。

「それはそうと、釜田さん……一体どうしたんですか？」

「それが……飲み物を買いに7号車のミニサロンに行つて、帰つてからずつとこの調子なんです。とりあえずそろそろランチの案内があるはずなのと、僕一人ではどうしようもないので、ここまで引つ張つてきたんですけどね……」

剣さんの垂れ目が心配そうに釜田さんを見る。

頭上のスピーカーから再び放送が入った。さつき注文を取りに来たクルーの声だ。

『お客様に、食堂車・ダイナー・プレヤデスよりご案内致します。ただいま、ランチの準備が整いました。お食事やお飲物をご用意致しまして、皆様のお越しをお待ちしております』

放送が終わり、私と剣さんは揃って釜田さんを見る。

釜田さんのはのっそりと立ち上がった。

「行くか」

それだけ言つてさつきと部屋を出てしまふ。私達も慌

てて後を追った。

第二章

3号車。食堂車・ダイナープレヤデス。すばる星の名を冠したそこは、もはや食堂車の域を超えて本格フレッチレストランと言えた。紅い絨毯敷きの車内には整然とテーブル、椅子が並べられている。豪華なのにシックで落ち着いている。

すでに行列ができていたが、ランチのため比較的回転は早い。少し待った後にクルーに案内された。四人席をあてがわれ、ふかふかの椅子に座る。座る時に後ろからクルーが椅子を押してくれた。そのまましてくれるのか。車窓右手にはさつきからずと穏やかな海が見えている。いや……違う、湖だ。

「琵琶湖ですよ。反対側に見えるのは比良山地です」私の隣で剣さんが言う。琵琶湖を見るのは初めてだった。雄大な湖面には薄く陽光が煌めき、たゆたっている。反対側の車窓に映る比良山地は緑が濃かった。

「曇ってるなあ……夕焼けの時は晴れるといいけどな」剣さんが心配そうに空模様を見る。

「料理はどれにする？」厚いテーブルクロスを敷いたテーブルの向こう側から釜田さんが声をかけてきた。私は剣さんとメニューをのぞき込む。ハンバーグステーキにビーフシチュー、オムライス……昔ながらの洋食屋といった品揃えだ。

「ここはオムライスが看板メニューだそうですよ。卵もケチャップライスも全部その厨房で炒めるんです」

剣さんは前方の厨房を指差す。見てみると、料理人の白いコック帽が幾つか忙しそうに動いている。

「人が多いな……俺のとも再オープンのついでに店を拡大したから、確氷以外にも誰か雇わねえとな」

「私だけじゃ足りませんか？」
「厳しいだろうな……」

釜田さんが他に誰か雇ったら、私に後輩ができることになる。正直、あまり現実感が湧かない話だった。

「新しく雇う人にも『店長』とか『大将』とかではなくて普通に『釜田さん』って呼ばせるんですか？」

「そのつもりだ。大して偉くもねえのにそんな呼ばれ方をされると驕ちまう。そうなるからじゃ遅えからな」

釜田さんは役職で呼ばれることを嫌う。私も「釜田さん」と呼ぶように言われている。

とりあえずメニューを開いた。
「じゃあ私は、オムライスと……プレヤデスサラダ、あとは生ですかね」

こんなに陽が高いうちからお酒を飲むこと自体が、さらに非日常を演出する。

「僕もオムライスとサラダ……海老マカロニグラタンも頼もうかな。飲み物……僕も生ビールにしますか。サツポクラシックらしいですよ。釜田さんは？」

「俺も生にするか。オムライスとビーフカレー、サラダだな。それと、シーフードフライも頼まねえか？ 三人でうまく分けられるだろ」

「お、いいですね。じゃあ注文しますか」

「あ、ビーフシチューも追加で」

私は男二人に負けじと追加する。ダイナーの時間まであまり間が無いが、それ以上に食べてみたい気持ちが強かった。

剣さんは注文をするためにクルーを呼んだ。

「お待たせ致しました、ご注文をお伺い致します」

クルーは注文を聞くと、手持ちの機械から伝票を発行して厨房へと消えた。

『右側に姿を見せておりますのが、日本一の広さを誇る琵琶湖です。長さ64キロメートル、一番幅の広い所で22.8キロメートルあります。琵琶湖の回りは235

キロメートル。面積は674平方キロメートルで、滋賀県の約六分の一が琵琶湖です……』

車掌が観光アナウンスをしている。それをぼんやりと聞いていると、先に飲物が運ばれてきた。どのグラスもよく冷えていて、ほんのりと汗をかいている。

「それじゃ……乾杯しますか。皆さん、お疲れ様でした、乾杯！」

「乾杯！」

剣さんの音頭に合わせて、グラスを鳴らす。ビールを勢よく喉に流し込む。

湖面をたなびく柔らかな風が、列車を一撫でした。

* * *
「大久保さん、これを六番様に！」

「はい、只今！」

大久保さんが湯気を立てるハンバーグステーキを運んで行った。さつと道を譲る。

「オーダー頂きました！ 二番様、生中三、オム三、サラダ三、カレー、グラタン、シチュー、フライです！」

「かしこまりました！」

厨房の中はまさに戦場だった。揺れる車内で川越料理長をはじめとした料理人たちが忙しく立ち回り、次々と料理を繰り出す。それを私達ホールクルーが次から次へとお客様のテーブルにお届けする。コンロの電熱線は赤

く発光し、湯気が踊る。包丁の音、食洗機の音、揚げ物や炒め物の音に交じって線路の音が響く。

これを見られるのも最後だ。とうとう最後まで圧倒され通しだった。

「大和さん、生中三を二番様に！」

朝霧君からグラスの乗ったお盆を渡される。

「はい！」

感傷にふけっている暇は無い。グラスを二つ受け取り、テーブルに向かう。通路を歩くお客様に道を譲る。

「……本当にやるの？」

「……ああ」

カップル客の会話が少し気になった。何だか不穏な雰囲気だった。一瞬、下膨れの顔の男性客と目が合う。……でも、気にしている時間は無い。とにかく忙しいのだから。カップル客はレジに寄った後、揃ってサロンカーの方へと歩いて行った。

* * *

トワイライトエクスプレスは快調に湖西線を飛ばしていた。線路の音が軽々と響き、否応にも旅情を掻き立てる。空に浮かぶ雲の隙間からはうっすらと青空が顔を出している。予報と裏腹にこのまま晴れるのだろうか。

私達は雑談で盛り上がりながら、めいめいに料理に舌鼓を打っていた。オムライスといい、ビーフシチューといい、どれも絶品だった。決して冷凍物なんかで出せる味ではなかった。それどころか、特にオムライスなど私なんかでは逆立ちしても作れないだろう。このソースのkokはどうかやってみようか。ケチャップソースを包んでいる卵でさえ、その丁寧さに格の違いを見せつけられている感だ。

「美味しいな……こいつは列車の中じゃ俺にも作れねえ」

釜田さんにここまで言わしめるとは……恐るべし、ダイナープレヤ德斯。

「ダイナーはもつと凄いですよ」

釜田さんの言葉に否応にも期待が高まる。そして、後ろめたさも。

「あの……釜田さん」

釜田さんはおずおずと釜田さんに話しかけた。

「さつき……何かあったんですか？」

私の口の中から味が消えた。とうとう釜田さんが本題に触れた。場の空気を緊張が満たす。

釜田さんは黙って窓の外を眺めていたが、やがて私達の方を向いて座り直した。

「すまねえな、取り乱した所を見せちゃまって」

私達は黙って聞いている。釜田さんはため息を吐いた。

「確実は知らねえだろうが、昔俺は所帯を持っていた」

「所帯……釜田さん、結婚してたんですか？」

カニクリームコロッケを箸で取った私は少し驚いた顔をしていた。釜田さんも他の人に取られないうちに海老フライを確保する。

「ああ。昔の話だ。俺が鉄道学校で剣を教えていた頃にはまだ結婚していたがな」

「そんな時期もありましたね。釜田先生の授業は分かりますかったですよ」

「先生って呼ぶのはやめろ。昔の話だ。それに役職呼びは好かん……剣は最後の教え子の一人で、離婚して教員生活とおさらばした後に今の店を構えるんだが、それはまた別の話だ」

釜田さんが私のために追加で説明してくれる。そういえば、私も釜田さんの来歴は全く知らなかった。釜田さんと歳が離れている割に妙に顔なじみっぽいことや、やけ

に鉄道に詳しいのにも納得がいく。

「昔の女房とは喧嘩も多かったが、まあまあ楽しくやっていたよ。あいつが他に男を作るまではな」

「浮気ですか……それは初耳です」

釜田さんの言葉に釜田さんは顔をしかめる。それにしても話題が悪すぎる。せっかく美味しい料理なのに。

「女房はしがらない金貸しだったんだがな、……まあ、今はどこで何をやっているかは知らねえが……取引相手の男とデキてた。それで全部おしまい。子供もいなかったし、俺は離縁状を突き付けて、それっきりさ。どこで何をしているかなんて知ったこっちゃなかった……ついでさつきまではな」

釜田さんの糸のような目に疲労が滲む。

「そう、さつきまでは、だ。5号車1号室の客のようだな、絶対に人違いなんかじゃねえ。あの顔は忘れたくても忘れられん。向こうも俺に気付いて驚いていたからな、確かだ。男と一緒にいたようだが……男の顔は見えない。今の旦那が俺以外に作った男かかってとこだな」

「何か話さなかつたんですか？」

私の無神経な質問に釜田さんは暗い笑みを浮かべ、ビーフカレーを口に運ぶ。乗客が何人か食堂車を後にした。

「げっ」

釜田さんは少し叫び声を上げた。

「え？」

「……あの女だ」

私と釜田さんはそつと後ろを振り返った。茶髪の女で、そこまで派手ではない恰好をしている。というか地味だ。釜田さんもなかなか目敏い。レジで勘定を済ませ、先頭の方の通路に消えた。

「釜田さん、あんな人が好みだったんですか？」

私はあまりにも意外で思わず尋ねた。もう少し華がある人が好みだと思っていた。あの人からはつと見感じられるのは……華というよりも、癖だ。

「いや、昔とはだいぶ変わったな。なんつーか……うん、白粉のバケモンみたいになったな」

バケモンって……いくら何でも毛嫌いが過ぎる。

「向こうは話したがっていたようだがな、そんなの関係ねえよ。俺を裏切っておいて、ふん、甘ったれんじゃねえって話だよな。俺は今でこそ恨んじやいねえよ。俺にだって落ち度があったかもしれない。だが……浮気されて縁を切ったからには、もう二度と会いたくなかった」

釜田さんの顔から笑みが消えた。黙ってビールを口に運ぶ。グラスから水滴がしたり、テーブルクロスに小さな水染みを作る。

「奥さんのことを……信じていたんですね」

「……ああ、そうだな」

剣さんの言葉に釜田さんは頷く。私達のテーブルの空気はかなり重苦しくなっていた。

列車はひと揺れして停車した。敦賀駅と書いてある。

「さあさあ、釜田さん、何か追加で頼みましょうよ。ワインとか日本酒とか！」

私は無理矢理にでも空気を变えようと、釜田さんの手にメニューを押し付けた。その声は私らしくない、いっになく明るい声だった。

『敦賀駅、発車致します』

車内放送に、先の長さを実感した。列車はまた静かに走り出す。やがてホームが見えなくなり、さっきまでの軽快な走りを取り戻した。

「どうしてこうなっちゃったかねえ……」

釜田さんは静かに呟き、ぼんやりと車窓を眺める。闇

に車窓が塗り潰された。

「北陸トンネルですね」

剣さんの解説も、トンネルの内壁の反響音で聞こえづら。

* * *

戦場のようなランチタイムがようやく終了した。賄い飯の時間だ。全クルーが狭い厨房に集まる。

「5分だ！」

川越料理長が号令をかける。それくらいの時間が妥当だろう。今日はゴールデンウィーク中ということもあってほぼ満席。用意する食事の数も通常より多いことは容易に想像できる。黒条さんが冷蔵庫の片隅からおにぎりを出して配ってくれる。肉がたっぷりの爆弾おにぎりを野菜ジュースで流し込む。

「中村君、すぐに車内販売に行つて。大久保さんもサポートを」

私が食べながら指示を出す横で、川越さんも厨房クルーにばしばしと指示を出している。厨房はこれからフルコースディナーの準備に取り掛かる。最大の修羅場だ。

「解散！ 抜かるなよ！」

* * *

敦賀を過ぎ、福井を発ったトワイライトエクスプレスは北陸本線をひた走っていた。青々とした田園風景の中を駆ける。時々思い出したかのようにすれ違う列車の本数はめっきりと減り、長さも短くなった。京阪地方の都会の面影はもはや全くない。こうやって移りゆく車窓をのんびりと眺める……旅の最高の贅沢だろう。ましてや、屋根まで回り込む大きさの窓だ。

4号車、サロン・デュ・ノール。フランス語で『北のサロン』という意味らしい。北の大地を目指す列車に似

つかわしい名前だ。とにかく窓が大きく、別格の車窓を楽しめる。車内には日本海の方を向いた長ソファが何脚か、テーブルと一緒に設置されている。

車内販売のワゴンがやってきた。男性クルーも乗務しているのか。

「お土産品、軽食、お飲物などはいかがでしょうか？ 当列車限定のお土産品も多数取り揃えております」

剣さんはホットコーヒーとマドレーヌを買った。

「確水さんもひとつどうですか？ マドレーヌ」

確かに、包みを見るとマドレーヌが二つ入っている。お昼を食べてすぐ後な上、5時からディナーを控えている……少し迷ったが、ありがたく一つ貰うことにした。

「お飲物はいかがなさいますか？」

「ホットコーヒーを」

剣さんが手に持つ紙コップを横目に答える。

「お砂糖とミルクは？」

「ミルクだけお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

クルーがテキパキと準備をする。剣さんは黙ってコーヒーを啜る。ブラックだ。

「お待ちせ致しました」

「どうも」

お金を渡す。

「他にご注文はございますか？」

「私は今はいいけど……剣さん、どうしますか？」

「旅のしおりと、あとはスポーツタオルを一つずつ」

「こちらになります」

剣さんは財布を開き、お金と引き換えに小冊子をとまポータオルを受け取った。

「ごゆっくりどうぞ」

ワゴンは他の乗客のもとへと去っていった。劔さんはマドレーヌの包みを開け、中身を一つ私に手渡した。紙をはがして一口かじると、ふんわりと甘かった。

窓一杯に青々とした田んぼが広がる。そういうや、福井はコシヒカリの生まれ故郷だどこかで聞いたことがあるような気がする。

「その冊子、何ですか？」

「この列車の乗務員お手製のガイドブックですよ」

劔さんがぱらぱらと開いて私に見せてくれた。

「今、この辺ですね。ほら、九頭竜川ですよ」

轟音と共に橋を渡る。

「治水技術が発達する以前は暴れ川で、人々を困らせていたみたいですね。何でも、『崩れ川』とも揶揄されていたとか」

「へえ……」

そう言われると、川の流れもまた違って見えてくる。

「それにしても……釜田さん、災難でしたね。旅先で別れた奥さんとはつたり出会っなんて」

いつまでものんびり黙っていても良かったのだが、口を開いてしまった。

「そうですね……でも、碓氷さんも大概じゃないですか？ この間の爆破事件、結局迷宮入りしそうじゃないですか」

「あれは……劔さんや釜田さんにも申し訳ないです」

「いや、碓氷さんは何も悪くないでしょう。自分が悪くないことまで謝っていると、しんどくなりますよ。誰のためにもなりません」

「……優しいんですね」

「そうですね？ 自分は素で話しているんですけどね」

劔さんの優しさは……何だろう、きつと作り物の優し

さではないのだろう。作り物だからどうこうって話ではないのだが。

「しかし、迷宮入りですか。建物が吹っ飛ぶくらいの爆発だと、何も証拠が残ってなくても仕方ないですね」

「ええ……小麦粉をあんどこに封を開けたままで置いた記憶も無いですし、なにより掃除機の断線コードも故意のもので断定されましたから、誰かしらが仕掛けたものではあるんでしょうけど」

「頭上の食器棚に封を開けた小麦粉の袋を仕掛け、戸を開けたらそれがぶちまけられ、それを吸おうとして掃除機のコードをコンセントに差し込み、電源を入れると……断線しかけたコードから火花が散って、空気中の小麦粉に引火して粉塵爆発ですか」

「何だか出来の悪いミステリみたいですよ」

「そこまで茶化せるまで回復できましたね。にしてもよく骨折と軽い火傷だけで済みましたね、本当に良かった……こんなこと、本当にあるんですね」

この『本当に良かった』という言葉も劔さんの素の言葉なのだろう、多分。嬉しい気はしなくもないのだが、いっそあのまま死んでしまえば良かった気がする。

「犯人の心当たりは無いんですか？」

「ええ、全然」

心当たりは無いが無いのだが……あの獣は、死んだ。むせかえるような血の臭いがまざまざと思い出される。

「うまいこと次の家が見つかって良かったです。劔さんも以前と変わらずお隣さんだって聞いたときは驚きましただけだね」

過去から逃げたかった私は話題を変えた。またまた逃げています。

「ええ、僕もまさかと思いましたよ」

「店の方もうまい具合に空き家を改装して、もうすぐ再開オープンですからね。保険金が下りて良かったです」

「本当にね……」

「この旅行って、一応はその再オープンの記念ですよ？ ……釜田さんにとっては少しケチがついたかもいれませんが、残念ですけど」

「人の出会いつてのは、往々にして奇妙なものですよ」
列車は小さな駅を通過した。こんな小さな駅にさえ降りてみて、歩いてみたら全く違う出会いが待っているのかもしれない。世界は広い。

「そういうや、釜田さんは？」

「部屋で昼寝をしていますよ。疲れたみたいです。邪魔するのも悪いのでここにいます」

劔さんもゆくりとマドレーヌをかじる。黒縁眼鏡のレンズに、この時期ならではの風景が映りこむ。緑が、濃い。

ページがめくれるように移り変わる手前の景色も。ゆったりとしか動かない遠くの景色も。みんなみんな瑞々しい風に吹かれながら、若々しく濃い緑をしていた。赤黒く染まった過去を少しだけ忘れることができたような気がした。

『進行方向右側には、雪を被った白山がご覧頂きます。富士山、立山と共に日本三霊山に数えられており、古くから信仰の対象となってきました……』

アナウンスにつられて振り返る。少し目を凝らすと、雲と同化しかけた白山の姿を拝むことができた。写真を撮る他の乗客の姿もちらほら見える。

* * *

車内販売のワゴンは重たい。飲み物、軽食、そしてありとあらゆるお土産品。それを頑丈なワゴンにぎっしり

と詰め込んでいる。軽いわけがない。

「あ、大久保さん。お疲れ様」

デッキで後輩とすれ違ふ。大久保さんはその細い体でワゴンを支え、動かしていた。

「大和先輩。お疲れ様です」

「重くない？ 大丈夫？ 車内販売はあなたじゃなくて中村君のはずだけど、彼はどうしたの？」

「商品の売れ行きが予想以上に良いので、電源車の倉庫に行っています。少しの間、私が代理で車内販売を。商品を補充してもらうのに、ワゴンを丸ごと運ぶのも大変なので」

「それもそうね。彼には後で列車をもう一往復してもらうから、サポートをお願いね」

「はい」

マネージャーたるもの、他のクルーの動きはある程度は把握しておかないといけない。

天井のスピーカーから案内放送が流れた。

『ただいま渡っておりますのは手取川でございます。白山に源を発したこの川は、平家を追う木曾義仲の軍勢が急流に流されぬように手を取り合って渡ったという伝承に因んで名付けられました……』

窓の外を見る。トラス鉄橋の向こうに水面と中洲が見えた。この川を超えると、金沢駅まであと一息だ。

「仕事に戻ろうか」

「ですね、先輩」

私はそのままサロン・デュ・ノールを抜け、先頭の電源車の方に向かう。お手洗いにきたかった。

5号車の通路に出ると、変な音が聞こえた。
どすん。どん。どすん。

何か重い物が壁を叩くような鈍い音だ。どの部屋から

聞こえるのだろうか？ 歩いてみると、2号室の中から聞こえているようだ。不審に思った私は部屋をノックしてみた。

返事は無かった。

少し気にはなるが、いつまでも関わっているわけにはいかない。私は再び通路を歩き出した。

*

*

どん。どん、どすん。

「……んあ？」

俺は聞きなれない音で目を覚ました。

列車が結構大きく揺れる。

どすん。

また音だ。隣の部屋、2号室の壁を誰かが叩いているようだ。

「……つたく、せつかく寝てたのによ……」

欠伸をする。熟睡していたようだ。寝起きを変な音で迎えるなんて、あまり気分がいいもんじゃねえ。

『まもなく金沢、金沢です。金沢の次は高岡に停まります』

「……もう金沢か」

結構長い時間眠っていたようだ。俺は大きく伸びをし、サロンカーにも行ってみることにした。

*

*

列車の揺れでコーヒーを少しこぼしそうになった。

『まもなく金沢、金沢です。金沢の次は高岡に停まります』

列車はブレーキ音を響かせながら金沢駅のホームに滑り込む。建設中の新幹線の高架橋が見える。

「お、金沢ですか」

「来たことあるんですか？」

「金沢自体は通ったことしかありませんね。でも、和倉温泉には昔行ったなあ……懐かしい」

「和倉温泉？」

「ここから特急で1時間くらい行ったところにあるんですよ。能登半島の中腹辺りにあったかな、確か」

色んな所に行っている人だ。

程なくして列車は走り出した。

剣さんはマドレーヌを食べきって、私の食べ殻もまとめてゴミ箱に捨てに行った。

やる事が無くなった私はぼんやりと車窓を眺める。

薄曇りだったはずの空は、いつしか晴れ始めていた。

「楽しんでるか？」

背後から聞き覚えのあるだみ声が聞こえた。

「あ、釜田さん。起きたんですか」

「まあな。剣。横、いいか？」

「ええ、どうぞ」

剣さんは少し私のほうに詰めた。

「眠れました？」

「爆睡だ。だが隣の部屋の奴がなぜか壁をどンドン叩いてうるさくてな。それで目が覚めた。2号室の野郎だ」

私の問いに欠伸交じりで答える。

「あらま、隣室がうるさいのは災難でしたね」

「ああ、全くだ」

どっこいしょ、と釜田さんはソファに腰を下ろした。

「釜田さん、鉄道学校の教官だったんですね。全然聞いたことが無かったので驚きました」

ランチで聞いた話を持ち出す。結構気になっていた。

「ん？ ああ、まあな。昔の話だ。剣は最後の教え子の一人だった」

「僕が鉄道学校を卒業した時に退職したんですって？」

「ああ。ちょうど女房と別れた直後だ」

釜田さんの口から「女房」という言葉が出て空気が少し重たくなった。……「女房」は今頃部屋でのんびりしているのだろうか。

「誰も知らねえ土地でやり直そうと思ってな。一念発起つてやつか。どうせ齢喰つて引退したら居酒屋でもやろうと思つてたのもあるが」

「剣さんってどんな生徒だったんですか？」

「一言で言えば優等生だな。態度も真面目で飲み込みも早かった。こつちとしても教えやすかったよ」

いかに剣さんらしい。

「正直、秋田支社に転勤が決まつたつて時には嬉しかったな。まさか女を連れてくるとは思わなかったが」

「ははは……」

私と剣さんは揃つて苦笑いをした。

「雇つてやつてくれたって言われた時は正直『は？』って感じだったぞ。剣とはかつてのよしみでもあるし、人手にも少し困つていたからナイスタイミングと言えばナイスタイミングだったがな。そういや、お前らどこで知り合つたんだ？」

「僕がまだ秋田支社に来る前に碓氷さんのお世話になっていましたよ。この人が管理人をしていたアパートに入っていたんです。震災で僕も碓氷さんも働き口を無くしてしまつて。僕は秋田支社への転勤で済み、幸いにも地元に戻つて来ることができましたけど、この人は……」

剣さんが遠い目をした。私は目を伏せる。

「そうか。震災をきっかけに越してきたつてのは聞いていたが……そりゃ、難儀だったな」

釜田さんも察したのか、それ以上は深く突つ込んで聞かなかつた。

列車はいつしか山奥を走っている。うつそうと木々が

生い茂る中、突然窓の外が真つ暗になった。トンネルだ。

『ただいま通過しているのは、俱利伽羅トンネルです。石川県と富山県の県境に位置する俱利伽羅峠は、平安時代の古戦場として知られており、源義仲が牛の角に松明を付けて平家軍に放つたという逸話は特に知られております……』

「へえ……ここがなあ……。それにしても、何か聞き覚えがあるな、この声……？」

釜田さんがトンネルの暗闇を見つめる。俱利伽羅峠の戦いは日本史の授業で聞いた覚えがある。

トワイライトエクスプレスの旅は、まだ先が長い。

トワイライトエクスプレスの旅は、まだ先が長い。

第三章

富山駅を発つた列車は、まもなく右手に立山連峰を仰ぐ。頂に積もつた残雪が傾き始めた陽の光で薄桃色に染まつてきている。

『右側に見えて参りました山並みが立山連峰です。中部山岳国立公園の一部で3000mクラスの山々が連なり、富士山、白山と共に日本三名山の一つに数えられています……』

サロン・デュ・ノールのあちこちにカメラのシャッター音が響いていた。大勢のお客様が長椅子から身を乗り出して、後ろを振り返るようにその姿を仰いでいる。椅子が日本海側を向いていることの弱点が出た形だ。私はそんなお客様一人一人に声を掛けていく。

「お客様、記念撮影はいかがですか？」

多くのお客様は喜び、少し照れくさそうな表情で記念

のボードを持つ。『トワイライトエクスプレス乗車記念

2013年5月4日』と書かれたボードを持たせ、記念の制帽もかぶらせる。これが結構評判なのだ。立山連峰は良く見える上に通過するのに時間がかかることもあつて、記念撮影をして回るには好条件だ。

「はい、チーズ！」

とりあえず最後のお客様の写真を撮り終える。三人組だ。次は日本海が見えてきた頃に回ろう。

「お写真の確認をお願いします」

「ええ……はい、大丈夫です。これが西日本さんの制帽ですか……」

大柄の男性客がしきりに制帽を眺めている。

「あの、お客様……どうかなさいましたか？」

「いや、普段は東日本の制帽をかぶつているので。他社さんの制帽をかぶるのつて結構新鮮なものですな」

「あ、東日本さんの方ですか」

色んなお客様がいらつしやる。それもまた醍醐味だ。

列車はやがてヒスイ海岸に辿り着くだろう。そこから親不知を抜けたら最初のデイナータイムだ。

一度ボードを電源車の倉庫に仕舞おうと通路を急ぐ。

5号車を通つたが、2号室から聞こえてきた変な音は聞こえなかつた。

* * *

親不知。その険しい地形で有名なこの地は新潟県の南西端に位置する。トワイライトエクスプレスはその地を快走していた。

『車窓左手には、親不知がご覧頂けます。源平合戦に敗れ、越後に落ち延びた平頼盛の後を追つた池ノ尼の子供が波に攫われたという故事に因んで、親不知と名付けら

れたとのことですよ……』

車窓を眺める。高速道路の高架の向こうに日本海が見える。海の上の雲は薄くなり、うっすらと橙色の空が世界を染めている。

見とれていた。

剣さんと釜田さんも、この景色を部屋から眺めているのかもしれない。

『続いて、お客様に食堂車・ダイナープレヤデスからご案内致します。まもなく、第一回目のダイナーを開始致します。17時30分からのダイナーを予約されたお客様は、3号車の食堂車・ダイナープレヤデスまでお越し下さいませ』

頭上のスピーカーから案内放送が流れた。

私は立ち上がった。

* * *

入口で剣さんは私を待っていた。

「遅くなりました」

「いえいえ、大丈夫ですよ。行きましようか」

剣さんは優しく微笑んで、私を中へと連れられた。レジにいたホールクルーに声をかける。

「失礼します。17時半から予約していた剣と確氷です」

「剣様、確氷様、お待ちしております。こちらの席にお座り下さい」

クルーが椅子を引いて座らせてくれる。二人席だ。

「晴れてきましたね」

剣さんは目を細めながら窓の外を見る。少しまぶしそ

うだ。

「あの、釜田さんは？」

「あの人は一つ後のダイナーコースです。ダイナーの席には限りがありますから、三人揃ったの予約が取れな

ったんです。夜になったらパブタイムになりますから、そこで合流できるでしょう」

「パブタイム？」

「お酒やおつまみ、軽食などを出します。軽食と言ってもピラフやパスタのようなガッツリめの一皿料理もありますけどね」

「それもその厨房で調理しているんですか？」

「当然。と言っても、一皿料理のレパートリーはやや少なめです。ダイナーの後ということもあって、ソーセージやチーズのようなおつまみ系が多いですね。お酒を楽しむ時間です」

つくづく、凄い列車だ。

「失礼致します」

ホールクルーがやってきた。私にウェルカムドリンクを持ってきてくれた人だ。

「お待たせ致しました。本日は当列車最大の自慢、ダイナープレヤデスのダイナーにお越し下さいまして、誠にありがとうございます。お料理をお持ちする前に、まずはお飲物のご注文を承ります」

そう、ダイナータイムだ。あまり……というか、ほとんどお腹は減っていないが、結構楽しみにしていた。どこまで凄いのだろうか。

「どうしますか？ 確氷さん」

「……生でいいんじゃないですか？」

「とりあえず生を二つお願いします」

「かしこまりました」

クルーは厨房に消えた。

「良かった……だいぶ晴れましたね」

剣さんは窓の外の日本海を見た。

「黄昏時、つてやつですか？」

「それはまだですね。黄昏時自体は陽が暮れて、辺りが薄ぼんやりとしてきてからです。黄昏時そのものはトワイライト……この列車の名前の由来ですが」

「へえ……」

夕陽はまだ雲にその身を隠しているが、雲ごと世界を橙色に染め上げている。海って、こんなにきれいなものだったつけ。私の記憶に深いどす黒く邪悪な海とはえらい違いだ。

「お待たせ致しました、生ビールでございます」

コースターの上にグラスが置かれる。

剣さんがグラスを手取る。私もそれに倣う。

「では……確氷さん」

「剣さん」

「お疲れ様でした！」

私と剣さんは、グラスをカチンと合わせた。

* * *

テーブルの上にはダイナーコースのメニューが置いてある。ざっと目を通そうと思ったが、その中身に思わず目を疑った。

「……あの、本当にこれを全部その厨房で作るんですか？ 真正銘銘のフレンチフルコースじゃないですか」

「ええ。揺れる車内、それに限られたスペースと火力、昼からずっと働き通し、……まさに神業でしょうね」

他のテーブルを見ると、既に最初の料理が配られ始めている。程なくして私たちのテーブルにも配膳された。

「お待たせ致しました。こちら、前菜になります」

重厚な皿に小盛りになされた前菜が乗っかっている。

「伊勢海老、鮑、帆立貝、蛤のサラダ仕立て、フヌイユとトリュフ仕立てでございます。フヌイユとはセリの仲間植物で、その出し汁で伊勢海老、鮑、帆立貝を蒸し

焼きに致しました。蛤は白ワインとオリーブ油で二度焼きにしました。ポロ葱のソースと共にお召し上がり下さい。中央の野菜はトリュフのドレッシングとキャビア、香草で味付けを致しました」

「わあ……」
「おお……」

私と劔さんは同時に感嘆の声を上げた。

ランチタイムの時は『昔ながらの洋食屋といった品揃え』と思ったが、完全に甘く見ていた。ばりばりの本格フレンチフルコースだ。

「いただきます」

まずは帆立貝から。ふりふりとしたその身から甘味と旨味が一気にほとぼしる。旨味はフヌイユの出汁のものだろうか。汁鮑と蛤は塩気が強めで、ビールに合う。

「伊勢海老もいけますよ」

声につられて劔さんの方を見ると、ナイフとフォークで丸まったその身を切り分けていた。肉汁が緑色のソースと交じり合ってナイフの先から垂れる。私も口に運ぶ。

「あ、本当だ。美味しいですね」

「まさか列車の中のフルコースがこんなにハイレベルだったなんて……正直、この味は僕の想像以上でした。……そもそも豪華なコース料理の経験自体があまりありませんけどね」

「でもこれ、まだ前菜ですよ？ これからメインとか来るのに」

「ええ。これは楽しみです」

劔さんは楽しげな笑みを浮かべる。

前菜の皿が空いて少ししてから、最初の食器が下げられた。列車はひたすらに黄昏時の海沿いを駆ける。

「失礼致します。こちら、スープになります」

次の料理が来た。白いポタージュが穏やかに湯気を立てている。

「ホワイトアスパラガスのヴルーテでございます。ヴルーテとは、バターと小麦粉のルーで濃度をつけたスープのことです。この時期が旬のホワイトアスパラを使用しました。茶実豚のベーコンと共にお召し上がり下さい」

器を覗き込むと確かに、カリカリに焼かれたベーコンが浮いている。眼鏡が湯気で僅かに曇る。

「見た感じ、こつてりしてますね」

「……確水さん。アスパラって、こんなに風味が強いもんでしたっけ？」

先に飲み始めた劔さんが私に尋ねる。私も一口飲む。なるほど、かなり風味豊かだ。

「丁寧に濾されているからじゃないですか？ アスパラって筋が多いものもあつたりするので、ここまで滑らかにするのは手間がかかるはずです。滑らかな食感にすれば風味も感じやすくなるでしょうし」

職場でも当然、ここまで手をかけた料理なんて出さない。居酒屋にこのような料理は無縁だ。アスパラなんて肉巻きにして焼いてしまう。

「これは釜田さんも驚くでしょうね……」

「失礼致します。こちら、付け合わせのパンになります。フランスパンとロールパンからお選び頂きます。おかわりの際はクルーにお申し付け下さい」

クルーが籠を持って来た。中にはパンがぎっしり詰まっている。

「フランスパンをお願いできますか？」

「かしこまりました」

クルーは手際良く劔さんの小皿にフランスパンを置く。「バターはこちらになります。お客様はいかがなさいませ

すか？」

「あ……じゃあ、ロールパンで」

「かしこまりました」

トングが黒っぽいロールパンを掴み、小皿に向かう。

「黒糖が練りこんでありますので、そのままでも美味しくお召し上がり頂けます」

「どうも」

そりゃ黒っぽいわけだ。

「こちら、お下げしますね。失礼致します」

いつの間にか空になっていたヴルーテの器が下げられる。案外少量だったような気がするが、夢中で飲み干しただけかもしれない。付け合わせのパンもいける。いずれにせよ美味しかった。

他のテーブルから一斉にどよめきが漏れた。

「確水さん、ほら、あれ」

「え？」

劔さんが窓の外を指す。

「わあ……」

夕陽が完全にその姿を私達に晒していた。

海が。

空が。

雲が。

そして、私達が。

全てが黄金色に包まれる。

* * *

夕焼けに見とれて、劔さんの声に気付かなかった。

「へっ？ ……あ、ごめんなさい、どうしました？」

「あの、シャンパンでも飲みませんか？」

「シャンパン……ええ、いいですよ。飲みましょう」

タイミング良く次の料理が運ばれてきた。

「失礼致します。次のお料理でございます」

クルーがそつと皿を置く。前の二皿よりも大ぶりだ。

「メバルのポワレ、タイム風味のそら豆と木の芽添えでございます。メバルはこの時期に旬を迎え、今回はポワレに仕上げました」

「へえ、メバルですか」

身が肉厚で美味しそうだ。

「すみません、シャンパンを二つ、グラスで」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

クルーは足早に厨房に消え、程なくして戻って来た。

「シャンパンでございます。フランスのポーモン・デ・クレイエールをご用意しました」

穏やかに泡の浮かぶシャンパンが、夕陽に照らされてより一層金色になる。乾杯をもう一度。

メバルにナイフを入れ、一口の大きさに切り分ける。口に運ぶと、穏やかな旨味と一緒にあつさりとしたそら豆の香りが広がった。

「……あんまり、タイムって感じもしませんね」

「ですね……まあ、ハーブの主張が激しすぎるのもアレ

ですし、これくらいでいいんじゃないんですか？」

私の言葉に剣さんは首を傾げた。

「皮もサクサクしてて美味しいですね」

「ええ」

付け合わせの木の芽もほんのりとえぐ味が出ている。

ボリユームのある見た目とは裏腹に、全体的にあつさりとまとまった一皿だった。

二人きりのテーブルに心地良い沈黙が訪れる。

この心地良さを破りたくなくて、車窓を眺める。さつきまで茜空に浮かんでいたはずの太陽はすでに沈み始めている。耳に届くのは等間隔に響くレールの音、他の客

のおしゃべり、食器の触れ合う音、それくらい。贅沢にぼんやりとしていた。

「……むしろ、この夕焼けがメインディッシュかもしれないですね。こんなにきれいで、飽きもせず眺めていられるなんて」

剣さんが沈黙を破る。これはこれで別の心地良さだ。

「そうかもしれませんね……本当にきれい」

「確水さんが喜んでくれたのなら何よりですよ」

私は剣さんを見た。

「失礼致します」

ディナーも佳境だ。肉料理が運ばれてきた。

「黒毛和牛のステーキ、ポンムアンナとタラの芽のキャラメリゼでございます。最高級の国産フィレ肉を使用しております。冷めないうちにお召し上がり下さい。付け

合わせは『幻のじゃがいも』とも呼ばれる「インカのめざめ」をアンナ風に仕上げました。栗のような食感をお楽しみ下さい。お客様、食後はコーヒーか紅茶かをお選び頂きます。いかがなさいますか？」

「僕はコーヒーで。確水さんは？」

「紅茶をストレートでお願いします」

「かしこまりました。デザートと一緒にお持ち致します

よろしいですか？」

「そう……ですね、どうします？」

「それで良いんじゃないですか？」

「一緒をお願いします」

「かしこまりました」

皿にはソースを破ったステーキがでんと鎮座している。

「あ、すみません。赤ワインを……この、ブルゴーニュ・

ピノ・ノワールを頂けますか？」

せつかくの美味しそうな肉料理だ。ここは美味しいワ

インを一緒に合わせたい。

「あ、僕もお願いします」

「ハーフボトルもございしますが、グラスをお二つでよろしいでしょうか？」

「……どうします？ グラスでよくないですか？」

「そうですね、ええ、グラスを二つで」

「かしこまりました」

すぐに赤ワインが運ばれてきた。グラスを合わせる。

「何だか乾杯してばかりですね」

私は笑って、ステーキにナイフを入れる。

「まあ、いいじゃないですか」

剣さんも切り分ける。肉汁が溢れ、赤紫のソースに水玉の紋様を描く。

「休ませるなり何なりしてじっくり焼き上げたんでしょうね。中までじっくり火が通っています」

柔らかな肉だ。ナイフもフォークもすつと入る。口に運ぶ。コクが濃厚だ。

「あ、うわ、これ凄いです」

「ええ、美味しいですね」

ポンムアンナにもフォークを伸ばす。芋と少しの塩の

味だけがして、濃厚なステーキと良い塩梅に対照的だ。

タラの芽の爽やかな苦味も良い。

「料理はもちろん美味しいですけど、こうやって誰かと

食べるのもっと美味しいですね」

「剣さん、私なんかと一緒に美味しいですか？」

「何を言うんですか、もちろんですよ」

剣さんは笑みを絶やすことなく皿をきれいにしていく。

彼のデザートが運ばれてくる頃には、陽は完全に没していた。残された空と雲と海は、段々と暗くなっていく。

「黄昏時、か……」

私はぼつりと呟いた。

「失礼致します。こちら、食後のデザートになります」

クルーが来た。運ばれてきたデザートは皿と……カクテルグラスに似た器に盛られている。

「アールグレイのアイスクリームとジュレでございます。オレンジクリームとキヤラメルソースを添えました」

皿にはアイスとビスケット、円を描くようにソースが盛られている。器の方には一口サイズの茶色いゼリーが幾つか盛られている。ミントの葉の緑が鮮やかだ。

「……あの、これ、どうやって食べれば？」

「私も少し面食らっている。」

「食べ方は自由です。口直しにそれぞれ頂くもよし、合わせて調和を楽しむもよし、ごゆっくりお楽しみ下さい。紅茶のお客様は……？」

そつと手を挙げる。

「ダーズリンでございます。熱いのでお気を付け下さい。」

こちら、ホットコーヒーになります。スマトラ島北部、アチェ州のアチェ・マンデリンを深煎りしたものです」

「どうも」

私達はめいめいに自分の飲み物を受け取る。紅茶党の私の目にも、剣さんのコーヒーは美味しそうだった。

「口直しに良い感じですね。少し甘めですけど」

「まあ、飲み物と合わせたらちょうどですよ」

剣さんはコーヒーを啜った。

程よく紅茶の風味が出ていたデザートを食べ終え、少し冷めた紅茶を飲む。

「確氷さん……少し、いいですか？」

剣さんが私に声をかけた。

「ええ、……どうかしましたか？」

剣さんの垂れ目は、優しくも真剣な光を放って私を見

据えていた。少し力んでいるような表情で、顔が赤い。

「……僕達、お付き合いしませんか？」

* * *

「……え？」

私は一瞬、何を言われたのか分からなかった。

「確氷さんご縁ができて、三年くらいになります……

……その、ずっとあなたのことが

……えっ。

……うそ。

「あなたが好きです。確氷さんさえ良かったら、僕とお

付き合い合して下さい」

頭を下げられる。

「……」

突然のことに私は完全にパニックになっていた。

頬が赤く、かっとな熱くなる。

鼓動が響く。

好き？

好き？

好き……？

私のことを……？？？

……駄目。

頬の熱が一気に冷めていった。

こんな、薄汚れた女なんて……。

私なんて……。

誰にも愛される資格なんてない。

私に幸せは似合わない。

顔から血の気が引く。

……。

……。

……。

「ごめんなさい、剣さん。」

私は、あなたとはお付き合いできません。

言わなくちゃ。

そう、言わなくちゃ。

口をこじ開ける。

暖まった心と裏腹に。

「剣さん……」

口がまた閉じようとする。

暖まった心が口を閉ざそうとする。

「私……」

言え。

「私……！」

早く言え！ 駄目だった……！

「その……！」

……。

「その……少し、考えさせて下さい……」

剣さんは少しほっとしたような表情をした。

「ええ。待っています」

クルーが伝票を持って近付いてきた。

「失礼致します。お客様、ディナーはこれにて終了となります。そろそろお会計の方をよろしいでしょうか？」

「お願いします。どうも御馳走様でした」

「ありがとうございます」

黄昏時を迎えたディナーは予想外の告白で終わった。

私は逃げを選んでしまった。

* * *

告白か……。

私はレジからカップル客を見送った。

告白なんて甘つちよろい、私はディナーの時にプロポーズをして、恋人として乗って夫婦として降りたお客様

の案内をしたこともある。なんて、内心で謎の張り合いをしてみる。

でも、告白された女性客の方は何だか浮かない顔だ。どうしたんだろう。

第四章

19時39分。トワイライトエクスプレスは新津駅を発車した。本州最後の停車駅で、ここから翌朝の洞爺まで乗客の乗り降りできない。列車自体は乗務員交代や列車交換でちまちま停車していくだろう。

ディナータイムを終えて部屋に戻ってきた剣との会話を反芻する。

* * *

「ただいま戻りました」

「おう、ご苦労さん」

剣は向かいのソファに腰を下ろした。

「で？ どうだ？ 脈はありそうか？」

「……とりあえず、返事は保留されました。良くも悪くもだいぶ動揺していましたね」

拍子抜けした俺は大きく息を吐いた。

「……そうかあ」

「ええ。彼女の答えを待とうと思います」

「まあ……それがいいだろうな。下手にせつつくところくな事にならない」

スピーカーから二回目のディナーの案内が流れた。

「飯、どうだった？」

「とても良かったですよ。ワインも美味しかったです」

「そりや楽しみだ。じゃ、行ってくる」

* * *

「お客様？ あの、お客様？」

「へ？ ……ああ、すまねえ。ぼけっとしてた。白ワインで、ウイリアムフェーブル・シャブリをグラスで頼む」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

クルーが厨房に消え、俺はさつき届いたばかりのメバルのポワレに手を伸ばす。フランスではセバストと呼ばれるよく似た魚がブイヤベースにして食べられることもある。シャンパンも良いが、ここはフランスの白ワインで合わせたい。

旅先で飯が美味しく食べられるのは本当に幸せなことだ。白ワインが運ばれてきた。口に運ぶと旨辛い。

* * *

パンフレットの車内案内を読んでいた。

『お客様により快適な旅をお楽しみいただくために。B

個室はシンプルな中にも居心地の良さを求めました。お

部屋はシングルとツインの2タイプ。それぞれにエキストラ

ベッドにもなるソファをご用意いたしております。

シングルはお二人までご利用になれるほか、ツインには

間仕切りをとりはずして4名様までお使いいただけるお部屋もございます。家族旅行やグループ旅行はもちろん、

旅なれたお客様にも満足していただける客室です』

気を紛らわすために読んでいた客室だったが、読むというより眺める方が正確だ。目線が文章の上で空回り

するばかりで、内容が全く頭に入っていない。

剣さんの告白の言葉が、ずつとぐるぐる頭を駆け巡っていた。

私はどうすればいい？

あなたが好きです……。

ねえ？

あなたが好きです……。

どうしよう……。

あなたが好きです……。

そう言われて、返す言葉を私は持ち合わせていない。

あの人が好かれるのは嬉しい。

でも……。

できない。

やっぱり、できない。

私にはできない。

私は、あの人とお付き合いなんてできない。

「そんな資格、無いもの……私になんて……」

列車は歩みを止めない。淡い日没の面影は既に夜空に

溶けて消えてしまった。

暗い窓ガラスには、部屋の灯りと私の顔が映っている。

泣きそうな私の顔が。

* * *

いつの間にか、机に突っ伏して眠ってしまったようだ。

背中や首が痛い。

スマホがブーブーと振動する。開いてみると、釜田さん

からメッセージが来ている。

『剣とサロンカーにいる。一緒に飲まねえか？』

向かいます、とだけ返信して部屋を後にする。伸びをする

るとぼきりと腰骨が鳴った。

今、列車はどこを走っているのだろうか？ 窓の外を見

ても夜の帷が延々と続くだけで、全く分からない。走行音、振動は確かに響いているのだが、本当に走っているのか、それとも止まっているのか、もしかしたら全て私の

幻覚なのか、……ふと、怖くなった。

食堂車の厨房からは相変わらず料理人が忙しく立ち回

る音が聞こえる。でも、コースディナーは既に終わったような雰囲気だ。剣さんがさつき言っていたパブタイムの時間なのかもしれない。

サロンカーの中は賑わっていて、いい匂いが鼻をくすぐった。奥のソファに釜田さんと剣さんが座っていた。

「お、来たか」

「どうも……」

剣さんと目が合う。頬に血が差すのが分かった。

思わず目を逸らす。

「ん？ どうした？」

釜田さんが面白そうに私と剣さんを見比べる。

「何か飲みますか、確氷さん？」

「そう、ですね……それは？」

私は剣さんの掌中にあるウイスキーの小瓶を指差した。

「これですか？ マツカランの12年ものですよ。飲みますか？」

「……ええ、少し」

私は剣さんの横に座る。そこに私用と思われるグラスが置いてあるからだ。剣さんが注いでくれたマツカランを一口に飲み干す。

「良い飲みっぷりだな。後で倒れんなよ……先につまみを色々頼んでおいた。スモークサーモンにポテトフライ、カマンベールチーズ」

「ソーセージを忘れていますよ、釜田さん」

「随分色々頼みましたね。剣さんと私はともかく、釜田さんはさつきディナーを終えたばかりではないですか？」

「この先こんな贅沢な列車に乗れることなんてねえだろうから、食べるうちに食つとくのさ。旅先で物を美味しく食べるってのは、一番大事なことでせよ」

私は釜田さんの食い意地に呆れてしまった。でも周囲を見ると、おつまみのみならずどつかりした一品料理を食べている客も散見される。ステーキピラフやパスタ……ディナーの予約ができなかった乗客の為のものだろう。見ると、ピラフの上にステーキがでんと鎮座している。

「唐揚げやピクルスもありますけど、注文しますか？」

「ん……とりあえず、頼んだものが来てから考えます」

他愛もない話に花を咲かせているうちに、料理がテーブルに所狭しと並べられた。追加の料理はいらなさをうだ。私は酒を頼むことにした。

「これをお願いします」

「山崎の12年でございませぬ？ 飲み方はいかがなさいませぬか？」

「ロックで」

「かしこまりました」

「お、山崎ですか。この列車も山崎の工場の目の前を通つたんですよ」

「え、そうなんですか？」

「ええ。新大阪と京都の間で」

「いや、とつくに過ぎてるじゃないですか」

私は吹き出した。だいぶ酔いが回っているようだ。やっぱり剣さんといると楽しいし穏やかな気持ちになれるのだが、それは私の手には届かないものだ。

「浮かない顔をしていますか……大丈夫ですか？」

「え、ええ。……あれ、何の映画ですかね？」

私は話題を変えようと備え付けのテレビを指差した。

「ありや、『おくりびと』だな。観たことねえか？」

「いや、私は無いですね」

「……妙なチョイスもあつたものだ。」

「さつき通過した余目つてとこがロケ地なんですよ」

「へえ……」

沿線にゆかりのある映画を流しているのだろうか？ いつの間にか列車は小さな駅に停車している。

「ここは……女鹿駅ですね。ここを出たら秋田県ですよ」

「どうして止まっているんですか？」

「多分、対向のあけぼのって列車が通過するのを待っているんじゃないでしょうか？ この辺は線路が一本しかありませんから」

「あけぼの？」

「青森と上野を結ぶ寝台特急ですよ」

程なくして、反対側の線路を青い列車が勢いよく駆け抜けて行った。すぐにこっちの列車も動き出す。

「遅いですね……」

注文した山崎がまだ来ない。

「注文が通っていないのかもしれないですね。パブタイムつて、ディナーの予約に落ちた人が夕食にしたりするので、何かと忙しかったりするのかもしれない」

「次にクルーが来たら聞いてみたらどうだ？」

「そうですね……」

だが、「次」が来ることは無かった。

トワイライトエクスプレスの車内に悲鳴が響いた。

* * *

一瞬凍り付いた車内の空気は剣さんが破った。

「5号車の方だ！」

そのまま悲鳴がした方に走っていく。私と釜田さんも慌てて後を追った。

デッキを抜けると、通路の奥で女性客が腰を抜かして震えていた。2号室のドアが開け放たれ、その中にながちりと目線が固定されている。

「大丈夫ですか！？」

劔さんは二人に駆け寄り、そして部屋の中を見た。そのまま息を呑み、凍り付く。

私も近寄ろうとするのを劔さんが止めようとした。

「来るな、碓氷さん！」

でも、その叫びが私の耳に届いたとき。私は既に部屋の前に来ていた。

その部屋の中には。

どす黒い血染み。

蔓延する血の臭い。

そして、首から上と両手が無い死体。

記憶がフラッシュバックし、現実と連結される。

私はあらん限りの悲鳴を放ち、倒れた。

* * *

象潟と書いて「きさかた」と読む。秋田県南部に位置する小さな町だ。列車はそこに臨時停車してから再び走り出した。象潟から乗り込んだ老警官が規制線を張り、事件現場の5号車2号室を封鎖した。

「えー、秋田駅に着いたら捜査一課の刑事が来ます。そこで遺体を下ろしますので、はい」

「列車はどうするんですか？」

「あなた方が車掌さんですか。秋田駅での運転打ち切りも在り得ますねえ、これは。殺人ですからね」

深緑色の制服に身を包んだ二人の男は顔を見合わせた。

「でも、もうこんな時間です。秋田駅で連休となると150人以上のお客様のために今から宿を確保しなければなりません。繁忙期ですしとても不可能です」

老警官は困った顔をした。

「そんなこと私に言われてもねえ……」

「おいおい、大丈夫かよ。俺は不安になった。」

「変なことになりましたね……」

「ああ……碓氷はいいのか？」

「気を失ってしまったので、ロイヤルの方におぶつて帰

つて寝かせました。今、クルーの大和さんって人が介抱

してくれています。僕のような男が横にいるよりも、女

性同士の方が何かとやりやすいでしょうし」

「そうか……それならとりあえず安心だな」

劔は不安そうに1号車の方を見た。

「心配か？」

「ええ、そりゃもちろんですよ。……でも、今は彼女が

目を覚ますのを待つしかないでしょうね」

「ああ」

俺は残っていたマツカランを飲み干した。気付け薬の

ようなものだ。劔と碓氷に続いて俺も死体をモロに見て

しまい、あまり気分が良くなかった。

「しかし意外だな、碓氷が倒れるなんて。あんな死体を

見たんじゃショックだろうし戻すくらいならわかるが……

倒れるような女じゃねえような気がするんだがな」

「そう思いますか？」

劔の口調は妙に沈んでいる。

「まあ、人が死ぬってのは辛いわな。……にしても、殺

人か。物騒だな」

「多分、僕達は取り調べを受けますよ」

「え？」

「事件現場は2号室。僕と釜田さんが泊まっている部屋の

隣です。何らかの事情聴取は受けるでしょう」

「……マジかよ」

「ええ」

面倒なことになった。痛くもない腹を探られるのは嫌

いだ。

ふと、劔の方を見る。妙に鋭い目つきをしている。

「どうした？」

「いや……色々と気になって」

* * *

がぼりと跳ね起きる。視界がぼやけて何も見えない。

慌てて眼鏡を探すと、誰かが差しだしてくれた。

「……ん？」

「きゃっ!？」

私は短い悲鳴を上げ、布団を胸元までずり上げた。

「だ、誰……?」

「怖がらなくて大丈夫ですよ」

優しい女の声だ。

「とりあえず、眼鏡をどうぞ」

「あ、ど、どうも……」

とりあえず眼鏡を受け取る。視界がはつきりした。

「あなたは……?」

「こんばんは。ホールクルーの大和と申します。あなた

のお連れ様に頼まれてまして介抱しておりました」

「お連れ様……劔さんのことですか？」

「ええ。劔様と名乗る男性の方でした。随分と碓氷様の

ことを心配しておられましたよ。こちらまでおぶつて来

られた後、『女性が介抱していた方が彼女も安心するだろ

う』とおっしゃられて……」

「そうですか……あの、さっきのアレは……?」

「あ……アレですか」

大和さんは言いにくそうに目を逸らした。

「……端的に申し上げます。殺人事件です」

やっぱり。

やっぱり、そうか。

人が死んだ。

言葉にするとそれだけのことなのに、その裏には恐怖

悲しみ、絶望、後悔、怒り……あらゆる負の感情が集積している。私はリフレインするその事実にも再び打ちのめされていた。

「ご気分が優れないのでしたら、横になられた方が……」

「いえ……大丈夫、です……」

私は弱々しく言った。

「何か温かいお飲物でもご用意しましょうか？」

「ええ……お願いできますか？」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

大和さんは部屋を出た。私はスマホを取り、剣さんと釜田さんにメッセージを送った。ぶるぶると手が震えて、文字を打つのに苦労した。

『部屋に来てくれませんか？』

独りぼっちでは無性に不安だった。誰かにそばにいてほしかった。

『すぐ行きます』

剣さんから返信が来た。

血。

ふと、思い出される血。

死体。

血。

暗い部屋。

私は恐怖で身をすくめた。剣さんが来るまでの時間とてつもなく長く感じられた。

ノックの音に飛び上がった。

「確氷さん？ 剣です」

私はふらふらとベッドから這い出て、引き戸を開けた。

開け放たれた引き戸の前には、心配そうな顔をした剣さんが立っていた。

「大丈夫です……か……？」

私は堪え切れずに、その場にへたり込んで泣き出してしまった。剣さんはその場でおろおろしていたが、じきにハンカチを取り出して涙を拭ってくれた。

「怖かったんですね……ええ、もう大丈夫ですよ」

怖い？

それだけじゃない。

誰もいなかったのだ。

私の涙を拭いてくれる人が。

私は一人だった。

私はさびしかった。

そして、私にはそれがお似合いだ。

なのに、私は剣さんの手を拒めなかった。

心の温もりを拒めなかった。

何もかもぐしゃぐしゃだ。

体も。心も。

傷が疼く。

過去が蘇る。

いたぶられる。

罵られる。

犯される。

嫌だ。

嫌だ……！

嫌だ嫌だいやだこわいこわいこわい！！

「来ないで！！」

「おわっ！」

私は剣さんを突き飛ばした。剣さんは尻餅をついた。

「来ないで……来ないで……」

「確氷さん……」

抱きしめて欲しかった。

慰めて欲しかった。

心を許せる相手が欲しかった。必死に蓋をしていた悲しみが、ぶちまかれた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……！！」

誰もその悲しみを受け止めてくれない。

私は孤独にぶるぶる震える。

全部私のせいだ。私が悪いんだ。

剣さんは何も言えず、静かに見守ることしかできない。

ブレーキが軋んで、列車は一揺れして止まった。

トワイライトエクスプレスは秋田駅に到着した。

遺体は秋田駅で下ろされた。長いホームは警察関係者で賑わっていた。

「警部、こちらです」

小柄で剛毛の男が近寄って来た。陰気なねずみ色のコートを着ている。遺体のカバーをめくり、中を見る。

「司法解剖してみないと分かりませんが、この通り、ひどい有様です」

「ああ、ご苦労。写真を送ってくれていましたな。首から上と両手首が無い男性の死体か。やれやれ、面倒なことになりました」

「まず身元確認にてござりそうです。乗客や乗務員が知っているといのですが」

警部らしき男は象潟から乗って来た老警官を労い、欠伸をした。列車は遅れて秋田駅に到着したため、とうに0時を回っていた。

「他殺でしょうかねえ？」

「まあ、誰かがやったことは間違いないありません。切り落とされた残りの部分はどこです？ 頭部と両手」

「事件現場の5号車2号室にはありませんでした」

「5号車2号室……まずは現場を見てみましょうか。車

掌さん、案内を頼めますか？」

「どうぞ、矢野警部。こちらです」

草津車掌が矢野と呼ばれた男を案内する。私も立ち話を立ち聞きしたくて、そっと2号室寄りのデッキに移動した。

「ここです」

草津車掌が黄色い規制線テープの向こう側を指した。

「うーむ……床が血まみれですな。犯人はここで遺体の解体をしたと考えていいでしょう」

立ち聞きだけではどうにも様子が掴めない。私は少し躊躇したが、意を決してデッキから通路に出た。警察関係者でこつた返す人込みの向こうからそっと部屋を覗く。背が低いこともあって見えにくいのが、かといって全く見えないわけでもない。

矢野警部はまずは死者に黙祷し、すぐに仕事を始めた。

「現場の保存はしていますか？」

「ええ、私が乗り込んで規制線を張ってからは誰も現場に立ち入っていませんし、私も含めて何も触っていませんです、はい」

「じゃあ、あなたが乗り込む前に誰か何かをいじった可能性はあるんですね？」

「否定できませんなあ」

老警官はしよぼしよぼと言った。

「そーいや、乗客の誰かが現場に触らないように言っていましたね。警察が来るまで入るなって。三吉車掌がそこからここに立って現場に人が来ないように見張っていたようです」

「三吉車掌……?」

「僕です。草津車掌が言った通りです」

茸頭の車掌が手を挙げた。

「とりあえず、適切な指示を出した乗客にはあとでお礼を言わないといけませんな」

矢野警部はそっと室内に入ってしまった。

「部屋は二段寝台個室、窓は上下に二箇所、嵌め殺しで損傷は特に無し……」

「警部、これを見て下さい！」

「どうしました?」

鑑識の腕章を付けた男が警部を呼んだ。

「これです。この梯子の最上段に、何か繊維が付いています。この深緑色のやつです」

「繊維……それがどうかしましたか? 誰かが梯子を上って、その時に服の繊維が付着したとかでは?」

「それだけではありません。何かがこすれたような跡があるんです。この梯子は金属製ですから、それに摩擦の傷を付けたらかなりの力がこの梯子の最上部に加わったことになります」

部屋の梯子は人が上り下りすることを目的にしているため、堅牢な造りをしている。壁際に置いてあるのではなく、窓際に移動させられてがっちり固定されている。何か重い物をひっかけても何ら問題は無いはずだ。ぶら下げたものが列車の揺れに合わせてぶらぶらして壁にぶつかるかもしれないが。

「詳細な調査を頼みます」

鑑識の人にそう言い、矢野警部はまた室内をくまなく見直し始めた。

「矢野警部、山形県警から電話です!」

若い警官が呼んだ。少し出っ歯だ。

「何、山形? どうしたのです?」

「切り落とされた遺体の残り、凶器らしきものの残骸が発見されたそうです!」

「何ですって? 犬塚刑事、代わりなさい」

犬塚と呼ばれた若い刑事がスマホを渡す。矢野警部は他の関係者も聞き取れるようにスピーカー設定をした。

「お電話代わりました、秋田県警の矢野と申します。今回の事件を担当することになりました」

『山形県警の池本です。列車内で発見された遺体の残り」と犯行に使用されたと思われる凶器らしきものが発見されました』

「詳しい状況をお聞かせ下さい」

『場所は羽越本線吹浦駅と女鹿駅の間、やや女鹿駅寄りの地点です。発見したのは上野行きの寝台特急あけぼの号の運転士です。線路上に何か落ちていたのを発見して、非常ブレーキをかけたものの跳ね飛ばしたために線路に降りて確認したら、人体の一部らしいものだったために通報してきました』

「ふくら? めが?」

『それぞれ山形県と秋田県の県境付近に位置する駅です』

「なるほど。トワイライトエクスプレスの事件と無関係な人身事故ではないんですね?」

「ええ、明らかに胴体や腕、脚といったパーツが存在しません。トワイライトエクスプレスの車内で発見された遺体の残りと考えていいでしょう』

「発見された死体の状況は?」

『木っ端微塵です。ここまでひどいと司法解剖はおろか、それ以前の検査すら困難です。DNAくらいなら……。あけぼの号の運転士によると、列車が一本轢いただけはここまでバラバラになることは無いとのことです』

「あけぼのが現場を通過する前に複数の列車に轢断されたってことですか? でも、あけぼのがちゃんと気付いたのに他の列車が気付かないわけがないでしょう? あ

けぼの前に現場を通過した列車は何ですか？」

『女鹿駅で列車交換をした矢野警部のとこの列車だそう
です』

「それって……」

矢野警部は忌々しげな顔をした。

「このトワイライトエクスプレスが轢いたということに
なりません。死体の残骸が床下機器にこびりついている
かもしれないので調べさせます。後は運転士にも聞き込
みを。犬塚刑事、機関車に行ってください」

犬塚刑事は頷いて先頭へと向かった。矢野警部はその
まま駅員や他の警察関係者にも指示を飛ばす。やがて、
反射材付きのベストを着込んだ男たちが線路に降り、わ
らわらと床下を調べ始めた。

「凶器も発見されたそうですか？」

『凶器と呼ぶるかどうかはまだ不確定ですが、事件に関
連性がありそうなものは発見されました。これも列車に
粉碎されて詳しい検査は困難です。原型を想像するに、
バスタオルのような細長い布と、大量の血液が付着した
らしい衣服の残骸らしきもの、それに鋸のような刃物だ
ったと思われまます』

「鋸ですか、何者かがそれを使って頭部と両手を切断し
たと考えるのが良さそうですね。それを線路に捨てた……
でも、何のために……？」

犬塚刑事が小走りに戻って来た。

「矢野警部、運転士の方から確認が取れました。吹浦く
女鹿間を走行中、特に異常は無かったそうです」

「そうですね。……じゃあ、どうやって木っ端微塵にし
た？ 池本警部、遺体の写真を送ってもらえますか？」

『少々お待ち下さい。凶器の残骸の写真もそちらに送り
ましよう』

「お願いします」

矢野警部はコートの内ポケットからタブレットを取り
出した。写真が届いたらしく、捜査関係者が群がる。

「これはひどい……こうもバラバラですと、顔面の確認
はおろか、指紋照合も不可能ですね。鑑識にDNA鑑定
を頼めますか？ 凶器？ ……もバラバラですな」

ふと、向こうのホームから列車の音が聞こえた。もう
一本のトワイライトエクスプレスだ。本来はこの先の大
久保駅で列車交換をするはずが、私達がここで足止めを
食らっている間に出発したようだ。遅れがどんどん拡大
していく。

『既にこちらの鑑識に回しています。結果が判明次第お
伝えしましょう』

「助かります。では、一旦ここで」

警部は電話を切った。

「警部！ 9号車の方に来て下さい！」

線路から警官が呼んだ。

「どうしました？」

警部は列車に乗り、立ち聞きをしていた私の横を通り
過ぎた。三吉車掌と草津車掌が後を追う。私も行く。

「これです。この穴です」

警察関係者が9号車と電源車の間にある貫通幌の辺り
に集まっている。

「刃物で穴を開けたようです。ここは列車の端っこです
から人目にもつきにくいですし、9号車の後ろには最後
尾の1号車まで8両も客車が連なっています。この幌に
穴を開けて、そこから切り落とした死体の一部を放り出
せば死体は9号車から1号車に轢断されて木っ端微塵で
す。機関車は轢断していませんから、運転士が気付くは
ずありません」

警部はしゃがみ込んで穴を観察し始めた。他の警官が
写真を撮る。ストロボが光る。

「穴にわずかながら血が付いていますな。頭部と両手を
切り落とした鋸でそのまま穴を開けたのでしょうか。ここ
の布も切り取って、鑑識に回して下さい」

すぐさま他の警官が布を切り取り、容器にしまっ

「駅員にも一緒に確認してもらいましたが、9号車から
1号車にかけての床下かけて肉片や血の跡が確認されま
した。目視での確認ですし、詳細は車両基地のような所
で確認しないと分かりませんが」

「できますか？」

犬塚刑事の間に駅員は首を横に振った。

「無理です。この車両はJR西日本のものです。ここは
JR東日本管内ですから、車庫に回送させることは厳し
いです。ましてや床下を覗くという大がかりな検査は到
底不可能です。少なくとも、JR西日本管内になる新潟
県や石川県辺りまで列車を移動させる必要があります」

「そうですね……面倒ですね」

警部は立ち上がった。

「とりあえず発車させましょう。現在起きている乗客と
全乗務員に事情聴取を行います」

めんどくさいことになった。

三吉車掌が先にこつちに引き返してきた。

「えらいことになってしまいましたね、大和さん。お客
様のケアに努めて下さい。僕は捜査の方につきっきりに
なってしまおうと思いますので」

私は頷いた。他のクルーを一度招集しないといけない。

* * *

結局、トワイライトエクスプレスは小一時間程遅れて
秋田駅を発車した。時刻は午前1時。煌々と水銀灯に照

らされた駅の構内がゆつくりと小さくなっていき、やがてカーブで見えなくなった。

自分が住んでいる街をこうやって素通りしていくのは何だか不思議な気分だ。このまま列車を降りて家に帰ってしまいたい気分が駆られた。

私は両手で包み込むようにマグカップを持っていた。

大和さんがホットミルクを持ってきてくれていた。中身はどうに空になり、カップは冷えている。

剣さんが静かにソファに座っている。

「落ち着きましたか？」

「ええ……さつきはすいませんでした」

「いいんですよ」

剣さんは穏やかに答えてくれた。

「あんな死体を見てしまったら、誰だつてパニックになりますよ」

「その割に落ち着いているな、剣？」

釜田さんは剣さんに言い、ため息を返された。

「そりゃ殺人事件に巻き込まれたのは初めてですが、マグロなら何度かありますからね」

「マグロ？」

「人身事故のことですよ」

私に解説する剣さんの声は重々しかった。

窓の外にうるむような光の流れが見えた。小さな駅を勢いよく通過する。

「だいぶ飛ばしているな」

「遅れていますしね……」

「あーあ、それにしてもとんだ旅行になっちゃったなあ。前の女房に出くわしちゃった頃が懐かしく思えるぜ。殺人事件が起ころなんて、どんな巡り合わせだよ」

「起こってしまったものは仕方ありません。僕達は何も

していませんし、堂々と構えていきましょう」

誰かが部屋をノックした。

「はい」

引き戸を開けると、大和さんが立っていた。

「失礼します。剣様と釜田様はこちらにいらっしゃいますか？」

二人は揃って立ち上がった。

「申し上げにくいのですが、警察の方がお二人にお話を伺いたいと……」

大和さんは、後ろに立っている男の方をちらりと見た。

「……」

私はダイナープレヤデスで遅い賄い飯を食べていた。

* * *

普段なら和やかな談笑が絶えないが、今日は重苦しく妙に張り詰めた沈黙に支配されている。お客様が列車内で殺害されるという前代未聞の事件が起きたのだから仕方ない。黒条さんが作ってくれた天津飯が美味しいのがせめてもの救いだ。それでもみんなの箸の進み具合は遅い。

最初にこの沈黙に耐えられなくなったのは黒条さんだった。

「大和さん、今回で乗務は最後ですよね？ 結婚したらまた新婚旅行に乗りに来て下さいよ」

「そうですね。ばりばり働かせますからね」

朝霧君が軽口をかぶせる。大久保さんが少し笑って質問を続けた。

「お相手はどんな人なんですか？」

「えーとねえ……小田原の方で金融関係の会社をやっている実業家の人。小さな会社らしいけど」

「ちゃんと知らないんですか？」

「まあ、詳しくは知らないなあ……金融系の会社らしいんだけど、私はそういうのからつきダメだから。会社

に入る誘いも受けてるんだけどね」

「凄いい、それって玉の輿じゃないですか。でも浮気されないように気を付けて下さいね。男つてのは本当に……」

中村君が冗談めかして忠告する。

「何て名前なんですか？」

「赤倉翔一さんって人です。向こうからアタックしてきた、元気で明るい人なんですよ」

「おっと、結婚する前からのろけ話ですか？」

川越さんとのやり取りを今度は朝霧君が茶化す。

「じゃあ、結婚したら小田原の方に嫁ぐんですか？」

「そうなるかなあ……なあに？ 黒条さん、なかなか良い人に巡り合わなくて焦ってたりする？」

「やだあ、そんなんじゃないですよ」

黒条さんはころころと笑った。

表面上はみんな和やかな歓談を楽しんでいるようだが、実際は事件のことが気になっているのはありと分かっていた。ここはひとつシメておこう。

私はおもむろに口を開いた。

「皆さん」

他の五人が一斉に私を見る。

「事件は残念ですが、それがサービスの質を落とすという理由にはなりません。トワイライトエクスプレスが運転を再開した以上、私達の業務も通常通り行います。事件のことは気になるでしょうけど、そこはこらえて下さい。お客様の中にはショックを受けた方もいらつしやいます。ケアの方にも可能な限り努めて下さい」

私の言葉は沈黙に消えたが、全てのクルーにしつかりと共有された。

隅のテーブルでは警察による聞き込みがスタートしていた。その内容に聞き耳を立てているのも、沈黙の理由

客期にきつぷを取れたこと自体が奇跡なんだよ。むしろどうやって必然にするんだ？」

釜田さんの至極「もつともな反論に警部と刑事は黙り込んだ。釜田さんはそのまま話を続ける。

「女房の方が他に男を作って、それで別れた。子供がいたらまた話は別だったかもしれないがな。俺はそのまま教官も辞めて引越した先で居酒屋を始めたから、お互いに連絡先も知らねえ。本当に偶然だ」

「浮気されたと言いましたが、その元妻の名前は？」

「……白雪春江だ。旧姓だから、今もその姓かどうかは知らねえが」

釜田さんは吐き捨てるように言った。矢野警部は大塚刑事に目配せした。大塚刑事はスマホを片手にデツキへと消えた。現在の姓を調べるつもりなのだろう。

「今回列車内で白雪さんは誰か男の人と一緒にしたか？」

「あいつと出くわしたのは列車が京都を出てしばらくしてから……ランチタイムが始まる前のことだった。その時一回しか会ってねえが、確かに男と一緒にだった。部屋の中にいて姿は見てねえが、声は間違いない男だった」

「ふむ。まあ、後で聞き込みをすれば分かるでしょう。聞いたことのある声でしたか？」

「いや、知らん。少し話しているのをちらつと聞いたくらいで、今となつてはどんな声かも自信が持てねえ」

「なるほど、そうですか？」

「ところで伺いますが、刃物類の扱いには慣れていきますか？」

「俺と確氷は居酒屋で調理するくらいだから、包丁とか

食器類の刃物には慣れてますが」

「鋸はどうですか？」

「鋸？ そんなもの何年も触っていませんよ」

釜田さんの顔が段々不機嫌になってきた。

「まさか俺達を疑っているんですか？」

「一応の確認です」

矢野警部はさらりと言い、それが余計に釜田さんを苛立たせた。

「まあまあ釜田さん、少し落ち着いて下さい。……警部さん、僕は職業柄多少の心得があります」

「え？」

鋸さんが釜田さんをなだめて説明を始めた。

「僕が乗務する秋田新幹線は山間部を通るんです。たまに倒木があつたりするので、万一に備えて鋸やチェーンソーの扱い方を一応は心得ています。ただ、僕自身は倒木の撤去作業に当たるような事態に直面したことはありませんから、2年近く鋸は使っていませんね。ついでに申し上げますと、僕らは今朝……いや、もう日付が変わったから昨日の朝か。4日の朝に飛行機で秋田から大阪に出て、そこから真っ直ぐこの列車に乗りました。飛行機には鋸なんて当然持ち込めませんし、伊丹空港から大阪駅までの間に金物屋みたいなところに寄る時間もありますんでした。鋸を持ち込みようがありません」

「……あの、鋸がどうかしたんですか？」

確氷さんが口を開いた。警部は逡巡して、答える。

「……発見された遺体には頭部と両手がありませんでした。切断された頭部と両手、それに切断に使用されたと思われる鋸らしき刃物の残骸が発見されました」

「どこですか？」

鋸さんが鋭い声で尋ねた。

「吹浦駅と女鹿駅の間です。この列車の対向のあけぼのという特急が轢断、運転士が発見して通報しました」

「頭部、と言いましたが正確には頭だけですか？ それとも首の付け根から上ですか？」

「切断されていたのは首の付け根から上です」

「そうですか……」

また鋸さんのペースに乗せられた警部は腕組みをした。「あのですね、鋸さん。私が質問する立場なんですよ？」

「これは失敬。では質問の続きをどうぞ」

鋸さんはじつと警部の顔を見た。食えない男だ。

「遺体が発見されたのは列車が女鹿駅を出た直後、22時40分頃だとされています。皆さんはその時、何を？」

「何って……サロンカーでだべっていましたよ。酒を飲んでつまみを食って」

釜田さんが答えた。警部が続きを促す。

「女鹿駅を出て少しした後にもすごい悲鳴が聞こえて、こいつが悲鳴のしたほうに駆け出して行って、俺も確氷と後を追ったら……あの有様だったってわけです」

「つまり、皆さんは死体発見直後の現場にいたわけですか？ 何か変わったことに気付きましたか？」

「いや、それが……」

鋸さんが確氷さんの方を見る。今度は確氷さんが話し始めた。

「実は、その場で私、あまりに怖くって倒れてしまったんです。だから私は現場のことなんてほとんど覚えていませんでしたし、多分鋸さんや釜田さんも私の方に気を取られてしまったでしょう。何かに気付く余裕は無かったですと思います」

「倒れてしまったんですか。あんなグロテスクな死体を見てしまったらそれはショックだったでしょう」

デッキから戻って来た犬塚刑事が椅子に座りながら優しく声をかけた。

「剣さんが私の部屋まで運んでくれて、後はクルーの大和さんって人が看病してくれたみたいですよ……あまりはつきりした記憶はありませんけど」

「とにかく、碓氷さんは特に何も気付かなかったんですな？ あなた方はどうですか？」

矢野警部は男二人に水を向ける。

「いや……特にねえ、よなあ？」

「無いですね。だれも現場に入らないように車掌に言い聞かせるのとかで忙しかったです」

「はあ、そうですか。事件現場に入らないように言ってくれた乗客というのはあなただったのですね」

矢野警部は二人の答えに気のない返事をした。

「後、他に何か変わったことはありませんでしたか？」

犬塚刑事が締めくくりに移る。

「……そういうや、2号室から変な物音を聞いたな」

「ああ、そういうえば釜田さん言っていましたね、昼寝を邪魔されたって」

「変な音？」

犬塚刑事が興味ありげに聞いた。

「ああ。金沢駅に着く前くらいだったから……何時くらいだ？」

「金沢駅到着が15時37分ですから、大体3時半くらいじゃないですか？」

「剣さんが補足する。……この人、時刻をそらで言っただけだぞ。」

「それくらいか。2号車の乗客が、壁をどんどん叩いてやかましかったんだ。おかげで昼寝してたのに目が覚めちゃまった」

「どんどんって、等間隔のリズムで……つまり、ノックするような感じで叩く音でしたか？」

「いや、どん、どすん、どんどん、みたいな感じでそんなリズムみたいな感じでもなかったな。それに、何か重たいものがぶつかるような感じだった」

「重たいもの……ですか？」

「被害者と犯人が取っ組み合いでもしたんでしょうか？」

「いや、叫び声みたいなのは何も聞こえなかったぞ」

「ふうむ……」

警部は少し黙って考えていたが、やがて立ち上がった。

「とりあえず質問は以上です。また何かあったら追加の質問とかをするかもしれません。ご協力ありがとうございます」

「また何かありましたらどうぞ」

三人は立ち上がり、サロンカーの方に歩いて行った。

犬塚刑事が話し始める。

「白雪について戸籍を調べました。現在は独身ですね。」

釜田さんと離婚した後も結婚歴、離婚歴がいくつかあります。戸籍には無いだけで結婚には至らなかった男も恐らく何人かいるでしょう」

「なかなか忙しい人生ですね」

「それと、被害者の部屋にいて、現在行方が分かっている人の身元が特定できました。同室の人から得た情報を基に調べたものです」

犬塚刑事がタブレットの画面を切り替えた。

「被害者名は熊野寛太、現在は神奈川県横浜市に住む46歳の男性です。血液型はA型。岩手県に住んでいまし

たが、震災の津波被害に伴い神奈川県に避難。過去にトラックドライバーをしていましたが交通事故を起こし、その後運送会社を退職。現在は職業不詳です。横浜市

に生活保護申請をした記録がありました。却下されています。事故の記録が警察のデータベースに残っていたので身元の特定がすぐにできました。これを見て下さい。事故の記録です」

タブレットを矢野警部の方にスライドさせる。

「2009年、岩手県内で大型トラックが軽乗用車と衝突、軽乗用車の父子が死亡……主な原因は軽乗用車の信号無視……死亡した父親を書類送検、運送会社側に罰金刑ですか」

「この事故のトラック運転手が熊野でした。人間関係を洗わないといけませんね。この事故が動機に関わっているかもしれませんし」

「ええ。ですがそれは後回しです。まずは同じ部屋に泊まっていた人に聞き込みをかけないと。まあ、ゆくゆくは全乗客に聞き込みは行いますが。人手が足りないので、北海道警に協力を要請するつもりです」

スマホのバイブ音が響いた。矢野警部が電話に出る。

犬塚刑事にも聞こえるようにスピーカー設定をする。

「はい。矢野です」

『「こんにちは、鑑識の安部です。司法解剖を始めました。とりあえず初見で判明したことを報告します』

少し眠そうな女性の声だ。

「お願いします」

『血液型はA型、身長は推定150cm後半、体重は推定70kg台。やや肥満体ですね。小太りというイメージしやすいかと思えます』

「ええ」

『次に死因。窒息死でした。遺体の状況から首吊りと考えられます』

「首吊り？」

矢野警部の声が少し大きくなった。

『遺体の下半身に血液が溜まっています。通常の首つり死体にはよく見られる状況です。死亡して血流が止まった後、重力によって全身の血液が下半身に下降して溜まる現象があるんです。ただ、窒息させるのにどのような凶器が使用されたのか、自殺か他殺かは判別できませんでした。首が無いので索条跡の確認ができません』

「そうですか……首吊り……」

「索条跡？」

『首吊り死体……縊死死体で首に残る紐の跡のことです。他殺の場合は紐を解こうとしてもがいて、首に手で掻きむしった跡が残ったりするんです』

大塚刑事に安部監察医が説明する。

「たぶん、梯子に縄をひっかけてそこで首を吊ったんでしょうな。そうすれば梯子に傷が付く程の力がかかってもおかしくありません。体重が70kg台なら尚更です」

矢野警部の発言をタイプする大塚刑事。そのうち臆靴炎になりそうな勢いだ。

『切り取られた部分からは生体反応が検出されませんでした。死後に何者かが切り落としたのでしよう。傷口を見た限りではだいたいぶ乱暴に切り落とされたようです。鋸みたいなもので力任せに切断したんでしょうね』

「鋸ですか。こちらの捜査でも凶器に鋸が使われた可能性が浮上しています」

『一致しますね。死亡推定時刻は14時から16時頃、特に死体に細工をした跡は見られませんでしたので信憑性は高いです。詳細に解剖を進めたらもっと絞り込めるかもしれません』

「14時から16時の間……」

大塚刑事は列車のパンフレットを開いた。

「敦賀発車が13時48分、高岡到着が16時14分ですから、その間に犯行が行われたことになりますね」

「切断された時間帯は絞り込めませんか？」

『それは何とも……山形県警の鑑識さんから情報が来たら何かわかるかもしれません』

「遅くとも、この列車が女鹿駅に着いた22時33分には切断されていますね」

「そうですね。とにかく、これで乗客乗務員のアリバイを調べていけばいいでしょう。さっきの三人も朝になったら呼び出して確認しなければいけませんな」

『DNA鑑定を始めているので、身元が判明し次第またお伝えします』

「はい。頼みます。では」

矢野警部は電話を切った。私はなるだけ話を聞いていたくてわざとノロノロと掃除をしていたのだが、いよいよ掃除機もかけ終えてしまった。いつまでもここに残っているわけにはいかない。しぶしぶ立ち上がって、隣の車両に掃除機をかけたに向かった。

「とにかく、他の人にも聞き込みをしましょう。今の状況ではどのみち手詰まりです。もっと情報が欲しい」

また電話が鳴った。やっぱり気になる。デッキで立ち聞きするか。

「はい、矢野です」

『どうも、山形県警の池本です。暫定的な鑑識の結果が出たのでお伝えします』

「えらく早かったですな、助かります」

『遺体は男性のもの、血液型はA型です。それ以外はまだ何とも……DNA鑑定に回しています』

「こちらの鑑識も遺体はA型だと出ています。断言はできませんが、同一人物の可能性が高まりましたね」

『そうですか。次に凶器ですね。えーと、まずタオルらしきもの。調べてみたら、トワイライトエクスプレスの車内で販売されているスポーツタオルらしいということが判明しました。皮膚組織などが付着しているかどうかは目下調査中です。次に衣服。女物の衣服で、A型の血液がべったりと付いています。いずれも轢断されて、列車の機械油や線路の汚れなどで酷い有様ですから詳細な調査には時間がかかります。徹夜でやらせますけど』

「凶器らしきものは？」

『やっぱり鋸のようですね。だいぶ年季が入っているようです。残骸を見た限りではどう見ても新品ではありません。取っ手の部分から指紋が出るかどうかは望み薄ですね。犯人は手袋をしていたでしょうし、そもそも取っ手も木っ端微塵になっています』

「はあ……それは色々と難航しそうですね」

『まあ頑張りますよ。また何か判明したら連絡します』

「ええ、お願いします。では失礼」

矢野警部は電話を切った。大塚刑事は立ち上がって厨房の方を見た。戻って来た私と目が合う。

「……時間も遅いですし、大半の乗客は眠っていると思います。先に乗務員の皆さんから聞きこみましょうか」

矢野警部は私を見る。手招きされた。

* *

トワイライトエクスプレスは遅延を回復すべく、真夜中の奥羽本線を驀進している。

明日の準備や車内点検、それに加えて事件に関する本社への連絡などで乗務員は普段よりも多忙だった。そのために乗務員への聞き込みはあまり人手を取らないように、少人数ずつ順番に行われることになった。トップバツターは私と草津車掌だ。

草津車掌は中堅の車掌だ。私も何度か同じ列車に乗務したことはあるが、あまり面識はない。事件のせいかな景気な顔をしている。こんな顔だったっけ？

先に口を開いたのは草津車掌だった。

「警部さん。本社から連絡があるのですが、先にお伝えしてもよろしいでしょうか？」

「本社というと、JR西日本のことですかね？」

矢野警部は少し落ち窪んだ目を草津車掌に向けた。

「ええ。本来ならば私と三吉、JR西日本に所属している車掌は次に停車する青森で下車し、JR北海道の車掌に運行を引き継ぎます。そして翌日のトワイライトエクスプレスで大阪に戻るスケジュールになっています。ですが本社の『警察の捜査に全面協力するように』という指示に基づいて、青森では下車しないで警察の許可が出るまで列車に乗っていることになりました。また、この列車は札幌に着いたら折り返しのトワイライトエクスプレスとして大阪に引き返すのが通常です。ですが今回は折り返しの大阪行きトワイライトエクスプレスは運休、所属基地の網干総合車両所宮原支所に回送させて、そこで警察に改めて捜査してもらうことになりました」

「車両の実況見分についてはまだ我々も聞いていませんが……まあ、じきに連絡が入るでしょう。とにかく、我々警察の捜査が終了するまであなた方は列車を離れないということですか？ 車掌は良いとして、こちらの……えーと、そういうえは、まだ名前を窺っていませんでしたな」

「大和です。この列車のホールクルー、つまり他のクルーを束ねる責任者の役割を担っています」

「なるほど。大和さんら他のクルーの皆さんはどうするんですか？」

「クルーは終点の札幌まで引き続きお客様のお世話をし

ます。その後折り返して大阪まで乗務するのが通常ですが、今回は折り返し列車が運休扱いになるので仕事はありません。警察の捜査に車掌と共に協力します」

「それは助かりますな。ご協力、感謝します」

矢野警部は犬塚刑事と目配せした。揃って警察手帳を出して私達に見せる。

「では、あまり時間もないので始めます。申し遅れましたが、私は秋田県警部の矢野、彼は部下刑事の犬塚です。早速質問ですが、まずはお二人のお名前と仕事を教えて下さい」

私は草津車掌の顔を見た。ここは立場が上の車掌から先に始めるべきだろう。

「車掌の草津暁男です。この列車に乗務するようになってから10年くらいになりますかね」

「中堅つてところですか？」

「ええ。そうですね」

不景気な顔をそのままに答える。警部も同じくらい不景気な顔を私に向ける。

「大和さんは先程伺いました。お二人の職務内容を詳しく教えて下さい」

「私の仕事は検札、列車のドア扱い、車内巡回、観光案内、掃除など多岐にわたります。客室の設備案内も私の役割です」

「設備案内？」

「ええ。この列車はお客様の様々なニーズにお応えするために多種多様な客室を取り揃えております。普通のホテルでしたら客室案内などはほしきないでしょうが、ここは列車の中。通常のホテルとは比べられないくらい狭い空間に様々な設備を押し込めています。お客様にも多少分かりにくく、ご不便をおかけすることがあります。その

ため、客室内の設備の説明を行うんです」

「一室ずつですか？」

「ええ。当然です。手間と時間がかかるのは車掌を二人体制にすることで対応しています。本日乗務しているのは三吉車掌……まだこの列車に乗務して間もない新米です」

「ふむ。それは後で本人から改めて聞きましょう。大和さん、あなたの業務内容は？」

「私は車内巡回とお客様のお世話が主な仕事になります。食堂車の営業のご案内、ウェルカムドリンクや食事提供のサービス、車内販売、清掃などですね。車掌さんが列車の運行の安全を主に担うのに対して、私のようなクルーはお客様のサービスを主に担う存在です」

「クルーと言うんですね」

「ええ。ですが、クルーと言っても二種類に分かれます。ホールクルーと厨房クルーです。ホールクルーはマネージャーの私が全体の動きを把握しつつ、チームワークを円滑に進める役割。セカンドの大久保さんはA個室、つまりスイートとロイヤルのお客様の接客。これは私も担当します。サードの中村君はB個室のお客様の接客と車内販売が主な担当です。しかし、大勢のお客様にサービスを提供するためには臨機応変に動くことが求められます。必ずしも本来の役割しかこなさないということではありませんし、その全てを私が把握しているものでもありません。厨房クルーは食堂車での調理を一手に引き受けています。料理長の川越さん、セカンドの黒条さん、サードの朝霧君の三人で構成されています。この三人は基本、仕事ではほとんど厨房の外に出ません」

「え？ 食事といっても、ずっと厨房に缶詰めにされるくらいにまでハードなものなんですか？」

犬塚刑事の質問に解説する。

「食事と一言で言っても、ランチ、ウェルカムドリンク、フルコースディナー、コースを申し込まれなかったお客様への特製弁当、パブタイム、明日朝のモーニング、さらに折り返し便の仕込みまでこなす必要がある過酷な職場です。冷凍物など出しません。お客様の首や両手を切り落とすのはおろか、殺害する時間すらありません。それはホールクルーも同様です」

「何もあなた方乗務員の中に犯人がいると決まったわけではありませんよ」

「私達の中にあるわけじゃないでしょう。私達にとってこのトワイライトエクスプレスはまさに誇りそのものです。その名を汚すような真似は絶対にしません。ましてや犯罪なんて論外です」

「意気込みはよくわかりますが説得力には欠けますな。あなた方の中に犯人がいないと決まったわけでもありませんので」

矢野警部は素っ気なく言った。私は結構カチンときたが、ぐっと堪える。

「今回の事件で被害されたのは5号車2号室の乗客、熊野寛太です。この乗客に見覚えはありますか？」

犬塚刑事がタブレットを私達に見せる。少し腫れぼったい目をした下膨れの顔の男だ。

「あります！ このお客様をお見掛けしました！」

私は思わず声を張り上げた。

「いつ？ どこで？」

「ランチタイムに食堂車でお見掛けしました。女性客の方と一緒に、レジに寄ってからサロンカーの方に歩いていきました」

「何を食べていましたか？」

「……いや、申し訳ありません、私にはそこまでは分かりません」

「オムライスを食べていたと思いますよ」

草津車掌が口を開いた。

「オムライス？」

「ええ。ダイナーブレヤデスのランチタイム営業における看板料理です。確かお連れ様と一緒にオムライスを食べていたと思います」

「そうですか。犬塚刑事、鑑識の安部さんに連絡を。ちなみに、何時くらいのことでしたか？」

「……13時半くらいでしょうか？」

「ええ、それくらい……ですかね？」

私と草津車掌は顔を見合わせた。

「何番テーブルでしたか？」

「すみません、二人用のテーブルだったとしか……」

「私ものはつきりとは……」

「ふむ……まあ、いいです。伝票やレジの記録を調べたら判明するでしょう。お二人ともそれが熊野氏を見た最後ですか？」

私達はどちらからともなく頷いた。

「他に熊野氏、または5号車2号室について気になることは何かありませんか？」

犬塚刑事の質問に私は少し考えこんだ。

「あつ……そういえば、夕方くらいに2号室から変な音がしました。どすん、どすんって感じの音で、何か重い物が壁を叩くような音でした」

「夕方くらい……もう少し具体的に時間を絞り込むことはできませんか？」

「金沢駅に着く前だったかなあ……ええ、それくらいだと思います」

「ほう……」

矢野警部の目が輝いた。

「聞こえたのはその音だけでしたか？」

「うーん……他には何も変な音は聞こえませんでしたね。今言った音も、17時過ぎには聞こえませんでした」

「そうですか。いやどうも、参考になります」

犬塚刑事はさらさらとメモを取る。

「草津さん、この列車には車掌室が二つありますよね？」

草津さんはどちらの車掌室にいますか？」

「今回は9号車の方になりました」

「そうですか。犯人は9号車と電源車の間の貫通幌に穴を開けて、そこから凶器と切断された頭部と両手を棄てたと考えられています。時間は女鹿駅に着く前、大体2時半前後です。その時はその車掌室にいましたか？」

「……いえ、その時は車内巡回で不在でしたね」

「何か不審物を持った乗客か乗務員を見ませんでしたか？ 犯人はさすがに凶器や血まみれの遺体の一部をむき出しで持ち運ぶことはほしきでしょうから、一見では分からないかもしれませんが」

「……」

草津車掌はしばらく黙って考えていたが、やがて首を横に振った。

「申し訳ありませんが、何も思い当たるものはありませんね」

それじゃ一体何のための車内巡回だったの!? 警察コンビも同じことを思ったのか、揃って天を仰いでいる。

「……9号車の車掌室にいたということは、9号車から1号車に向かって順番に検札と部屋の設備説明をしていたということですか？」

矢野警部は疲れた顔で話題を変えた。

「そうです。確か5号車の辺りまで自分が担当しました。三吉車掌は1号車の方から9号車に向かって検札をしていきます。お互いにかち合うところまでが担当です」

「なるほど。後で三吉車掌にも確認してみます。にしても、草津車掌の担当した部屋が随分多いですね」

「B個室はA個室よりも設備がシンプルなので説明にもそこまで時間がかからないんです。だから必然的に担当する部屋数は多くなります」

「具体的に何号室まで担当しましたか？」

「そんなことまでいちいち覚えてられませんよ」

草津車掌はさすがにうんざりした表情をしてきた。結局、ここから先は私も草津車掌も列車内での行動を時系列順に事細かに尋ねられた。覚えてる限りで答えたところ、あなた方には犯行は難しいですねと言われた。当然だ。ただでさえこの列車での仕事は忙しいのだから、殺人を起こす暇なんて無い。

「そうそう、もうひとつ質問がありました。この列車では車内販売の土産品でバスタオルのようなものを取り扱っていたりしませんか？」

「スポーツタオルならありますけど……」

「実物を見せてもらうことって可能ですか？ それら凶器に使われた可能性があるんです」

「ええ。少々お待ち下さい」

私は急いで電源車の倉庫に向かった。そこにまだ在庫があるはずだ。お目当てのものを見つけて、急いで食堂車に引き返す。

「こちらになります」

私は透明なビニール袋に包まれた商品を見せた。

「開封してもいいですか？」

「はい、どうぞ」

後の備品チェックが面倒になりそうだ。仕方ない。警部は袋のボタンを外し、ガサゴソと中身を取り出して広げた。

「かなり大きめですね。深緑色ですか……具体的な大きさは分かりますか？」

「縦39 cm、横120 cmです」

「そういうえば、鑑識さんが梯子で深緑色の繊維を見つけ たって言っていましたね」

警察コンビがさっきの事件現場での発見を思い返す。

タオルはトワイライトエクスプレスのトレードカラー、深緑色を基調にエンブレムの刺繍が大きく施されている。矢野警部は何を思ったか、縦に束ねて首に巻いてみた。

「……首が多少太い人を相手にした場合でも、絞殺に使うには十分な長さがありそうですね。これが凶器に使用されたらとみてほぼ間違いないでしょう。調査に回したいので、貰えませんか、これ？」

貰うって、そんなみみっちい……捜査のためならそれくらいくれてやる。私と草津車掌は呆れつつ承諾した。

「あと、この列車に監視カメラはありませんか？ あるのでしたら映像を確認したいのですが」

「申し訳ありませんが、この列車は監視カメラを搭載していないんです。だいぶ古い車両なので」

犬塚刑事の質問に草津車掌は素気なく返した。警部も刑事もさすがに落胆の色を隠せない。

「そうですね……その他、何か言い忘れたことなどはありませんか？ 何かあればまた後でも言ってくれたら」

「あつ」

私はもう一つ思い出した。

「食堂車での熊野様ともう一人の会話が……少し気になるんです」

「ほう。どんな会話でしたか？」

「えーと……女の人の方が『本当にやるの？』って言って、熊野様が『ああ』って、それだけです。何だか雰囲気を変えた気がしたので……あの、中身無いですよ、すみません」

「いえ、何かしらの参考にはなるかもしれません。その他、何かありますか？」

犬塚刑事の締め質問に私達は首を横に振り、ひとまず解放された。席を立つとちようど、大久保さんが誰かを連れて入って来た。彼女は横にすっかり憔悴しきった女性客を連れていた。

「警部さん、同室の乗客だった浅間様をお連れしました。聞き込みに応じるそうです」

* *

警察コンビは聞き込みを再開した。二人は女性客と対峙している。女性客は老け込んでいるが、昔はたいそうな美人だったことを想像させる見た目をしている。私の聞き込みは終わったものの、窓拭きやテーブルクロスの変更など普段は車庫で行うような掃除を言い訳に残っていた。聞き込みへの野次馬根性丸出した。

「だいぶ落ち着きましたか？ 浅間さん」

浅間、と呼ばれた女は静かに頷いた。

「私は秋田県警の矢野、彼は部下の犬塚です。浅間早苗さん、熊野寛太氏と同じ部屋の方ですね？」

「ええ……はい」

「まず、熊野氏との関係をお聞かせ願います」

矢野警部は丁寧な、でも無難を言わさぬ口調で言った。

「熊野さんは私の同棲相手でした」

少ししつとりとした声で答え始めた。

「私は家族を交通事故で亡くして独り身でしたが、しば

らく後に熊野さんと出会いました。彼とはとてもよく気が合い、生活は苦しかったですけどどうかやわっていています。震災のせいで岩手から神奈川に避難してから生活は一層苦しくなりましたけど……お恥ずかしながら、借金などもしましたし」

「失礼なことをお聞きするようですが少しよろしいですか？ 生活的に困窮していたのなら、どうやってこの列車に乗る費用を工面したんですか？ 大阪に出るにも、この列車に乗るにも、北海道から神奈川の方に戻るにも、いずれも結構な金額が必要となります」

「宝くじに当たったんです。100万円」

「宝くじ……そうですか」

「そうですか、の部分に少し不信感が滲む」

「借金の返済には充てなかったんですか？」

「借金そのものは既に完済していますよ」

「浅間さん、単刀直入に申し上げます。あなたは今回発生した事件の被害者と同室で、しかもかなり深い中でした。はっきり言って、我々からするとあなたは一番怪しまざるを得ないポジションに立っています」

「浅間さんは怒るところか、疲れ切ったため息をついた。それは仕方ないでしょうね。ですが警部さん、今から私が話すことを聞いたならその考えも少し変わるかもしれない」

「矢野警部はその言葉の意味を測りかねているようだったが、やがて質問を再開した。」

「それはどういう意味ですか？」

「浅間さんは顔を少し上げた。私は熊野さんと同じ部屋、2号室にいました。ですが、

隣の部屋の1号室に私と熊野さんの共通の知り合いが泊まっていたんです。はっきり言って、あまり会いたくない相手でした」

「1号室の乗客……」

「犬塚刑事が手元のタブレットを操作した。」

「ひよつとして、白雪春江って人ですか？」

「浅間さんは頷いた。さつきよりもおけ込み具合がマシになったように見えるが、気のせいだろうか。」

「白雪さんにはまだ聞き込みができていないのですが、浅間さんと熊野さんに共通の知り合いで、しかもあまり会いたくない相手という認識でいいですか？」

「ええ」

「お聞きしますが、どのような関係ですか？」

「……借金相手です」

「浅間さんは少し躊躇ってから答えた。」

「借金相手……でも、借金は完済したってさつき言っていましたよね？」

「確かに完済しました。ですが……払いすぎです」

「払いすぎ？」

「ええ。よく、過払いとか高利とかの話がありますが、借金をした相手が悪かったんです。白雪からはだいぶむしり取られました」

「むしり取られたって……そういうのは弁護士などに相談してですね、返還を求めるなり訴訟を起こすなりすればいいじゃないですか」

「明日の暮らしにも困るような日々だったんです。そんな余裕も無く、泣き寝入りするしかありませんでした。裁判に持ち込んでも、勝訴するとは限りませんし」

「ですが、その過払いというのはご自身で調べたんですか？ 弁護士などに調査を依頼したというのではなく？」

「はじめはとにかく返済することで手一杯だったんですが、やがて熊野の借金がまだあるって聞かされて……震災による土地整理などが関係しているとかわれて、書類なども見せられて反論もできず、結局はどうにか支払いました。でも熊野さんからはそんな話を聞いたこともなく、本人に聞いてみても心当たりが無いようで……でも書類はある。書類が偽物じゃないのかって思い至った時には既に白雪は姿をくらましていました」

「震災により避難した人を狙った詐欺のようだ。」

「私も必死に彼女がどこに行ったか調べたんですが、そのうち諦めました。もついいや、つてなつてしまつて」

「いくらくらい騙し取られたんですか？」

「……約、200万です」

「に、200万!？」

「はい……」

「それは恨むだろう。」

「何で警察に知らせなかったんですか!」

「何で……私や熊野さんみたいな貧乏人の話を聞いただけでも、警察は信じてくれるんですか？」

「矢野警部と犬塚刑事は黙り込んでしまった。」

「……熊野氏は14時から16時の間に死亡し、その後には頭部と両手を切断されました。切断された時間帯は死亡後から22時30分辺りの間。その間、あなたはどこで何をしていましたか？」

「うーん……基本的にミニロビーにいましたね。19時半からのディナーに出たのと、その後にパブタイムでお酒を飲んだりしたくらいです」

「ミニロビー？」

「ええ。サロンカーは人が多くてあまりゆっくりできなかったんです。ミニロビーは7号車にあるんですが、自

販機や雑誌、ソファもテーブルもあるので快適でした。人通りも少なくてゆっくりでしたし」

「人通りが少ないってことは目撃者も少ないってことですよね？」

「まあ……そうなるでしょうね」

浅間さんはしぶしぶといった感じで認めた。一瞬、踏切を通過する。車内を警報音と赤い光が横切るのもほんの瞬間だ。

「しかし、さすがにずっとミニロビーにいたわけじゃないでしょう？」

「……熊野さんと口論になってしまって、部屋に戻りたくなくなっちゃったんです。だから部屋には戻りませんでした。さすがに頭も冷えて、シャワーを浴びようとして部屋に着替えを取りに行ったら……熊野さんが……」

浅間さんの顔が蒼白になった。

「口論の原因は？」

「些細なことです。熊野さんに出会う前、私が家族を亡くした交通事故について聞かれて、それがしつこくて段々腹が立ってきて……怒って部屋を出たんです。今思えば、部屋を出るべきではありませんでした。熊野さんが一人になってしまったので、犯人も犯行がやりやすかったんでしょう」

「部屋の鍵は？」

「カードキーのことですよ？ 持っていました。今も手元にあります」

浅間さんは私には見慣れた深緑色のカードキーを財布から取り出して見せた。

「誰かに貸したりしましたか？」

「いや、全然」

「熊野氏の遺体を発見した時、部屋の鍵は開いていまし

たか？」

「いえ、閉まっています」

「ということは、誰かが鍵を開けたってことですか。内側からなのか外側からなのかは分かりませんが」

「……警部、それって」

大塚刑事が少し興奮して言った。

「密室……」

密室。基本的には、どこからも犯人が出入りできない状況を指す。ミステリでもカーター・デクスンなどに代表されるが、まさか生きてて実際に密室に直面するとはねえ……。ん？ でも、B個室ツインの1号室と2号室って確か……。

矢野警部は列車のパンフレットに目を落とした。

「……ではないかもしれませんが、これ」

「大和さん。一つ質問していいですか？」

矢野警部が私を呼んだ。

「何でしょうか？」

「あの、このパンフレットのここですけれど……」

矢野警部はパンフレットのB個室の案内書きを指差した。研修時代に散々読まされた。こう書いてあるはずだ。

『ツインには間仕切りを取り外して4名様までお使いいただけるお部屋もございます』と。

「この設備を備えている部屋ってどの部屋ですか？」

「B個室ツインは5く7号車の各車両に設置されています。そのうち、この間仕切りことスライディングウォールを搭載している部屋は各車両の1号室と2号室になります」

矢野警部は少し考えた。そして顔を上げる。

「密室じゃない……」

「密室じゃない？ じゃあ犯人はどこから出入りしたんですか？ 窓でも開くんですか？」

大塚刑事は話をよく呑み込めていないようだ。

「さっき現場検証で見たでしょう。窓は締め殺しで開かず、内側から叩き割られたわけでもない。窓からの出入りは不可能です。これを見て下さい、このパンフレットにあった部屋の説明文です」

大塚警部もパンフレットの説明文に目を通す。

「今、大和さんが説明してくれた『間仕切りを取り外せる部屋』は、今回の事件の1号室と2号室が該当するんですよ」

つまり、1号室と2号室は壁が開いて隣の客室に出られるのだ。矢野警部が図を書いて示す(次ページ図参照)。

「ほら、ここはこうやって壁を開放して通り抜けができるようになってるんですよ。これなら2号室の戸に鍵がかかっているようがかかっているまいが関係ありません」

「……なんだ、分かっちゃえば拍子抜けしますね」

大塚刑事は脱力気味だ。そのまましばらくの間、黙って図を凝視する。

「でも、犯人が1号室から2号室に入ったとしても……1号室の人にばれないように侵入するのは大変ですよ？ 1号室に人がいると必ずその人の目につきまますし、1号室が留守だとしたらそもそも戸に鍵がかかっている1号室に入れませんか。ましてやそこから2号室に侵入するなんて……やっぱりどっちも密室じゃないですか」

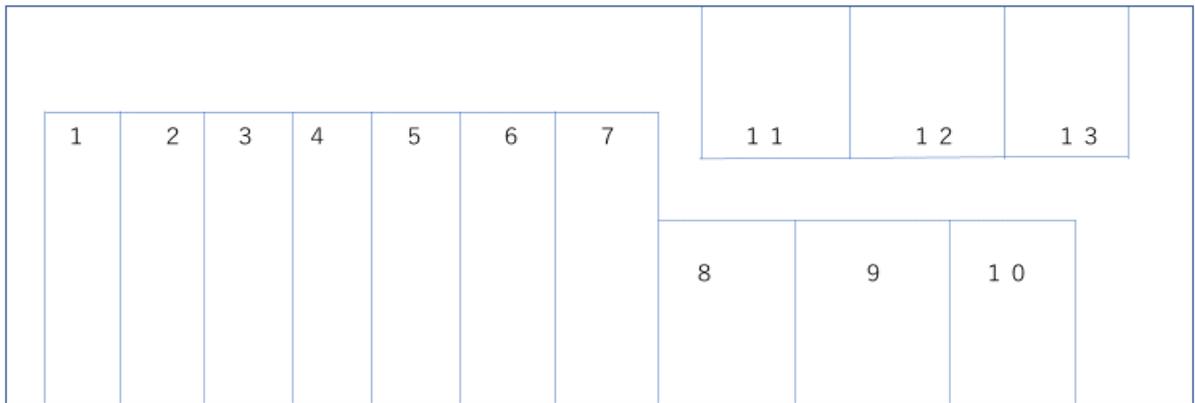
浅間さんはそんな二人のやり取りを見て、言った。

「1号室の人……白雪さんならそんなこと関係ありませんよ。彼女なら2号室に入れますよ……誰の目につくともなく」

5号車 車内図

← 6号車・札幌方面

大阪方面・4号車→



間仕切り (スライディングウォール)

1号室：白雪の部屋 2号室：浅間・熊野の部屋 3号室：剣・釜田の部屋

矢野警部と犬塚刑事はその発言を聞いて、互いに顔を
見合わせた。なぜだろう、浅間さんが僅かに暗い笑みを
浮かべたような気がした。

「ん？ じゃあ、1号室の人……白雪には犯行が可能だ
ったってことですか？ 浅間さんの証言が全て真実なら、
熊野氏はずっと部屋で一人でした。そこに白雪が部屋に
来て殺害、遺体を切断して処理。熊野氏は白雪を恨んで
いたのは明白、……そもそも変じゃないですか？ 偶然
憎い人が同じ列車で、偶然隣の部屋で、しかも列車内で
は偶然殺人事件が起きて……」

犬塚刑事の言葉を二人は黙って聞いているが、明らか
に興奮が滲み出てきていた。

「戸に鍵がかけられていたのは初めから熊野氏が鍵をか
けたか、あるいは白雪が鍵を開ける音で浅間さんが部屋
に戻って来たのを知るため、それと少しでも死体の発見
を遅らせるため……動機もありそうですし、犯行も不可
能ではありません。むしろ壁から入ってしまえばわざわざ
通路に出ることも無いので、誰か他の乗客乗務員に2
号室に入るところを見られる可能性もない。アライバさ
え確認できれば……」

「……いずれにせよ、白雪が事件に関わっている可能性
はありそうですね。後で聞き込みをやりましょう」

事件が二人の中で大きく動き出したようだ。

「質問を再開します。お昼は何を食べましたか？」

「えーっと……ちよっと待って下さいね」

過去に食べたものが何だったのか、案外覚えていない
ものだ。浅間さんが思い出すのに苦労しているのを見か
ねて、犬塚刑事が助け舟を出した。

「ひよっとして、オムライスではありませんでしたか？」

「え？ ええ、そうでした。オムライスでした。でも、

どうしてそれを？」

「他の方からの証言がありまして」
さっきの草津車掌のことだろう。

「もう一つよろしいですか？ あなたと熊野さんの食
堂車での会話が少し気になりました」

「会話……何を話したっけ？」

「あなたが『本当にやるの？』って熊野氏に聞き、熊野
氏が『ああ』って答えていたそうですね。何をやるつも
りだったのですか？」

浅間さんは少し言葉に詰まったように見えたが、その
返答は拍子抜けするものだった。

「北海道が季節外れの雪らしいので、熊野さんがスキー
をやりたいって言い出したんです。私はウィンタースポ
ーツの経験が皆無なので、『本当にやるの？』って聞いた
んです。……今になって思えば、あの時に『うん』って
言っておけるべきだったんでしょかね」

浅間さんは悲しそうに目を伏せるが、矢野警部は無表
情にメモをとるだけだ。これで質問も大体済んだのか、
やがて浅間さんは解放された。タイミングよくまた電話
が鳴る。

「もしもし、矢野です」

『鑑識の安部です。DNA鑑定の結果が出ました。熊野
寛太という男です。あと、連結幌に付着していた血液は
A型で、遺体と一致しました』

「そうですね。列車に乗っていた男と同一人物のようで
すね。山形の方からも同様の結果が出ると思うのですが」
『これで別の人となれば驚きですよ。胃の内容物ですが、
オムライスか何かのようなものだったと思われれます』

「こちらでも熊野が生前にオムライスを食べていたとい
う情報が入っています」

『……残るは山形からの報告だけです』

「まあ、よっぽどのが無い限りは熊野の遺体の残りと考えていいでしょう。ご苦勞様でした、ご協力感謝します」

『いえ。失礼します』

矢野警部が電話を切るや否やまた電話が鳴った。

『山形県警の池本です。DNA鑑定の結果、身元の特定ができました。熊野寛太という男です』

「そうですか、こちらと完全に一致しましたな」

『ああ、本当ですか。それは良かった、もしもこれで頭部だけ別人の死体と違って話になったらどうしようかと思いましたが。とにかく身元確認はできましたので、凶器などについて調査に進展があればまた連絡します』

「了解です。ご協力、感謝します」

『捜査の進展をお祈りします』

電話が切られ、程なくして他の乗務員への聞き込みが再開された。

* * *

その後、乗客が寝静まっている間に他の乗務員にも聞き取りが行われた。トワイライトエクスプレスは延々その間も走り続け、青森駅に着いた時には遅れを40分くらいに縮めていた。

大阪から客車をエスコートしてきた機関車とはここでお別れ。ここからは青函トンネル専用の機関車に付け替えられる。JR北海道の車掌が二人、ここから乗務することになる。今回は特例で三吉車掌と草津車掌も札幌まで乗車することになっていることは伝達済みだ。

小さく客車に振動が走った。今までとは反対側、1号

車の方に機関車が連結された。夜間に鋭い警笛が響く。

いよいよ北海道は目前だ。列車は今までとは反対側の方

向に走り出した。

警察の二人組が全ての乗務員から聞き込みを終えた時には、青函トンネルへの突入を目前に控えていた。私達は翌朝に備え、しばしの仮眠を食ふことにした。結論から言ってしまうえば、乗務員にはとても熊野氏を殺すことなど不可能だった。仮に殺せたとしても死体を解体する時間が無かつたうえ、そもそもどの乗務員も熊野氏とは面識が無く、殺害の動機が無いことが明らかになった。疲れた。

こうやって狭い寝台で仮眠を取るのもこれが最後だ。

次に北海道に行くことになるのはいつになるだろう。この列車に乗務しても、別に札幌で降りたりはしないのだけど。札幌に着いたら折り返し便が出発するまで寝るだけだ。

嫌でも感慨に浸らざるを得ない。

「何か、とんでもない最後になっちゃったなあ……」

私の呟きに答えるのは他のクルーの寝息だけだ。

それにしても、翔一君にとんでもないお土産話ができってしまった。彼はさぞかし驚くだろう。不謹慎だけど、話しをするのが少しだけ楽しんだ。

とりとめもないことを考えていると、いつの間にか深い眠りに落ちていく。

青函トンネルへの突入を知らせる警笛は、夜の静寂を破れても私達の眠りは破れない。

第五章

こどうろう？ 私は少しぼんやりとした意識で考える。

カーテンの隙間から覗く外は暗いが、等間隔に蛍光灯のような光がうるんで通り過ぎる。隙間から暗い部屋を一瞬、ストロボのように照らし出す。カーテンを開けてみると、列車はトンネルの中をひた走っている。

もしかしたら青函トンネルかもしれない。そう思い至ったのは、嵌め殺しの窓の四隅がだんだん曇ってきたのを見てからだ。海底トンネルゆえ、湿度が高いのだろう。

一度目が覚めてしまうと、そこらなかなか寝付けなかった。いくらベッドの上をゴロゴロしても、どうやら眠気はトンネルの闇に溶けて消えてしまったようだ。

他のみんなはどうしているのだろうか？ 劔さんはここぞとばかりにサロンカー辺りで青函トンネルを目に焼き付けているだろう。釜田さんは分からないが、自販機で買ったししゃもをお供に寝酒でもしているかもしれない。クルーの皆さんはさすがに眠っているだろう……いや、警察からの聞き込みがまだ終わっていないのだろうか。警察の二人は情報を集めたり、手持ちのデータで犯人を特定しようとして躍起になっているだろう。……そうだ、釜田さんの元妻、確か白雪さんとか言った女の人はどうなんでしょう。確か事件現場の隣、1号室の人だ。警察も彼女から話を聞きたいはずだ。考えれば考えるほど頭が冴えてきた。とても眠るどころの話ではない。

私はそこらしばらくの間、頭の中を空っぽにして寝ようと努力した。徒勞に終わった。諦めて起き上がり、部屋の灯りをつけた。蛍光灯に照らされてあんなに明るく見えたトンネルの内壁は一瞬にしてただの暗闇になった。暗い窓がキャンバスになって私の部屋を映し出す。

眼鏡をかけるとぼやけていた視界がはつきりする。

眠れないくせに欠伸が出る。どうしてだろう。

私は立ち上がって着替える。面倒だからそのまま起きていることにした。サロンカーにでも行ってみよう。

* * *

腕時計を見ると朝の4時だった。窓は相変わらず曇り、相変わらず暗闇に塗り潰されている。たまに思い出したように蛍光灯の灯りが過ぎる。流れ星みたいだ。

サロンカーには案の定、剣さんがいた。私に気付くと少し驚いたような表情をした。

「こんばんは。眠れないんですか？」

「ちよつと目が覚めちゃって」

……頬が熱くなる。そうだ、事件に振り回されてそれどころではなかった。

私はこの人に告白されたんだ。

剣さんの方をそつと見る。この人の垂れ目は相変わらず優しそうな目をしている。

「……座りませんか？ 面白いものが見えますよ」

面白いもの？ 何だろう。剣さんの左隣に座る。

「ほら」

剣さんは窓の外を指差した。

白い蛍光灯がぼつり、ぼつりと灯っていただけの内壁に変化が起きた。青いランプと緑のランプが揃って勢いよく黒いキャンバスに現れる。突然のカラー色彩に私は少し目を見開いた。

「青函トンネルの最深地点ですよ」

剣さんは穏やかな声で言った。光の帯はあつという間にキャンバスから消えた。残された闇がさつきよりも濃く見える。

「世界一長いトンネルですよ。53.85km……本当に

凄いとんネルです」

具体的に50kmがどれくらいなのかは実感が湧かないが、今実感しているところだ。

「秋田からだ大体大曲や仁賀保あたりまでの距離に匹敵します。東京からだと高尾あたりまでの距離ですかね、多分。直線距離では分かりませんですけど」

なるほど、それは凄い。海の下だからなおさら凄い。具体的な地名を言われて十分に実感が湧いた。

そこからは話すこともなく、ただゆつくりと闇を眺める。どこかに消えたはずの眠気が段々と戻って来た。

* * *

碓氷さんはいつしか寝息を立て始めた。僕の肩を枕にするこの人が愛おしい。

列車は闇を抜けて、朝焼けの光の海へ。

* * *

トワイライトエクスプレスが北海道に突入する頃には既に仕事が始まっている。厨房組はモーニングの調理を始めている。私もいそいそと準備に出る。

五稜郭駅構内で再び機関車を付け替える。朝の静かな駅に鋭く警笛が響き、客車に軽く振動が走る。連結

普段、この駅ではドアは開かない。お客様の乗降も当然できない。しかし今日は少し様子が違っていた。

「北海道警の皆様ですか。ご協力、感謝します」

デッキから矢野警部の声が聞こえる。ドアが開き、大勢の警官が入って来る。一緒に車内に入って来た空気はキンと張り詰めたように冷えている。

「何分、乗客の全員に聞き込みを行うには人手が少なすぎましてな」

どうやら、乗客全員に聞き込みをするつもりらしい。厄介なことになったが仕方ないだろう。クレームが殺到

しないことを願うばかりだ。

腕時計を見ると、朝の5時12分。どうにか遅れを回復した。真横を上野から走ってきた寝台特急カシオペアが駆け抜けて行く。少ししてドアが閉まり、後を追うようにトワイライトエクスプレスは走り始めた。

食堂車に向かい、モーニングの支度を始める。厨房組は料理だけで手一杯のため、食器を並べたりするのはホールクルーの役目だ。

隅っこのテーブルで警察コンビが頭を寄せ合って何やら話している。昨夜からずっとこのテーブルにいるのだろうか？ いずれにせよ、一旦ここから移動してもらわないといけない。二人には事情を説明してサロンカーに移動してもらった。

「先輩、遅くなりました」

「おはようございます」

遅れて大久保さんと中村君が手伝いにやってきた。

「おはよう。眠れた？」

「いえ……正直、あまり」

大久保さんが欠伸をこらえながら答える。無理もないだろう、昨夜にあんな事件があったし、警察から聞き込みまで受けたのだから。

「さっきの五稜郭駅から警察の人が大勢乗ってきましたけど、何か動きがあったんですか？ 犯人が見つかったとか」

「そうじゃないみたい……全乗客に聞き込みをするみたい。秋田から乗り込んだ矢野警部と犬塚刑事二人だけでは手に負えないでしょうから、そのぶんの増員じゃないかな？」

「うっわ……正気ですか、警察は？」

中村君の言葉に同感だ。

ふと、内ポケットのスマホが振動した。仕事中に私用電話なんて論外だ。無視していたが、しつこくスマホは震え続ける。

「二人ともごめん、ちょっと外すね」

私はデッキに移り、しかめっ面をしながらスマホを取り出した。翔一君だろうか。仕事中に電話するなんてあれほど釘を刺したのに。

でも、翔一君からの電話では無かった。

「警察から……？」

こればかりはさすがに無視できない。私は電話に出た。

* * *

列車の揺れで目が覚めた。

「んっ……んー……？」

何だか右側の頬だけやたらとぼかぼかしている。

……私の右側？

「あ、起きましたか？」

右隣から剣さんの声が聞こえて、私は跳ね起きた。

「おはようございます」

剣さんは心なしか普段よりこにこしている。いつの間にか剣さんの肩にもたれて眠ってしまったようだ。片方だけ赤くなっていった私の頬が両方とも赤くなった。

「……お、おはようございます」

私はぎこちなく挨拶を返した。

列車は朝もやの中を走っている。朝もやの奥には山に囲まれた湖が見える。線路が白い。よく晴れてはいるが雪が積もっている。

「もう北海道に入っていますよ。今は大沼の辺りを走っています。目の前が大沼。ほら、あれが駒ヶ岳ですよ」

剣さんの声を聴くとさらに顔が赤らんだ。別の席から別の誰かの声が聞こえた。

「……とりあえず、まずは白雪から聞き込みを再開しましょう。聞き込みの内容も、我々の管轄であるトワイライトエクスプレスの事件が優先です」

犬塚刑事が矢野警部と打ち合わせをしている。二人ともあまり寝ていないのか、目の下にくまができています。

「食堂車でモーニングの準備を始めたのでこっちに追い出されたみたいなんです。ちょっと静かにして下さいね。ここだとあの二人の会話がよく聞こえるので」

剣さんがそと耳打ちした。

「それにしても、何で他の事件の聞き込みまで引き受けなければいけないんですかね……」

「仕方ありませんな、被害者の関係者がこの列車に乗っているんですから。強盗殺人ですか……」

「でも、小田原の事件なのにこの列車に乗っている時点で殺害なんて不可能でしょう」

「とりあえず、詳しいことは白雪さんに聞くだけ聞いてみましょう。犯行があまりにシンプルなので、手がかりが少なくない。取られたのも金品でなくて書類のようですし、シンプルに割に独自性はあるんですけどね」

白雪さん……釜田さんの元妻のことだろうか？

「ナイフで胸を一突きですものね。神奈川県警の話だと即死でしたっけ？」

「そうらしいですな。死亡推定時刻が午後5時頃、何等かの細工を施された痕跡もなさそうなので、そのまま鶏呑みにしていでしょう。……婚約者の名前が？ えーと……えっ？」

矢野警部が驚きの声を上げ、資料を犬塚刑事に回した。

小田原？ 別の事件？ 私は剣さんの顔を見た。困惑している。スマホでニュースサイトを開くと、トップニュースでそれらしきものが出てきた。『昨夜、小田原市で男

性の刺殺体が発見された。被害者は赤倉翔一氏(32歳)と思われる。現場はJR小田原駅付近の赤倉氏の自宅。現場は荒らされており、警察は強盗殺人事件として捜査している』

「剣さん、これ」

私はそとと剣さん呼び、スマホを見せた。剣さんはスマホと警察コンビを交互に見比べた。

「まさか……」

その時だった。デッキから大声が聞こえた。……大声

というか、泣き声だ。

食堂車に繋がるデッキから姿を現したのは、戸惑い、泣きじゃくる大和さんだった。彼女は私達には目もくれず、そのまま矢野警部と犬塚刑事の方に向かって行く。

「婚約者……大和叶……ですって!?!」

犬塚刑事は目の前で泣き崩れる、赤倉翔一の婚約者をまじまじと見つめた。

* * *

別れは唐突だったりする。でも、そんなことを普段から考えたりはしない。そんなことないって、さよならなんて当分先だって、そう信じたから。

だから人は、別れを目の前に後悔する。嘘だつて、どんなに嘘だつて言い聞かせようとしてもそれは死体のように冷たい現実の前には何の役にも立たない。

どうして、もっとあの人と一緒に居ようとしなかったのだろう。

どうして、もっとあの人の時間を大切にできなかったのだろう。

どうして、もっとあの人を笑顔にしようとしなかったのだろう。

どうして、もっとあの人を笑顔にしようとしなかったのだろう。

のだろう。

どうして、もつとあの人と分かり合おうとしなかったのだろう。

どうして、もつとあの人の温もりを感じ取ろうとしなかったのだろう。

どうして、もつとあの人の心に私を刻み付けておかなかったのだろう。

どうして。

どうして……。

どうして……あの人は私を置いて先に逝ってしまったのだろう……。

* * *

結局、なし崩し的に大和さんへの聞き込みがスタートした。彼女はとりあえず泣き止むまでそう時間はかからなかったが、すっかり憔悴していた。メイクが涙で酷い有様だ。

「えー、まずは、お悔みを申し上げます」

矢野警部があまり感情のこもっていない声で挨拶をする。大和さんは僅かにしやくりあげてお辞儀をした。

「お辛いとは思いますが、……お亡くなりになられた赤倉氏のためにも、ひとつここは捜査に協力して下さい」

「……捜査するのはあなたの方秋田県警ではなく、神奈川県警ではありませんか？」

大和さんの声は冷たく、不信任感を滲ませていた。

「今から行く質問は全て神奈川県警からメールで送られたものです。あなたがここから直接神奈川県警に行って捜査に協力するのは確かにベストですが、いかんせん時間がかかりすぎます。その間にも犯人は逃亡を続けていきます。少しでも早く犯人を捕まえるためにも、今すぐ協

力してくれたらとても助かるのです。あなたの「回答は、我々が責任を持って神奈川県警にお伝えします」

大和さんは少し黙り込み、そして弱々しく頷いた。

「赤倉さんは小田原の方に住んでいるとのことですが、ご職業は何をなさっていたんですか？」

犬塚刑事が最初の質問を放った。

「……実はよく知らないんです。金融業をやっているって話は聞いたことがありますけど」

「ここだけの話、あまり人には言えないような職業だったりしませんか？」

「そんなこと！……そんなことない、と思います」

あまり自信無さげだ。

「そうですね……赤倉氏の交友関係についてお尋ねします。誰かから恨まれたりしていたかどうか、心当たりはありませんか？」

「翔一く、いえ、赤倉さんはあまり仕事の話をしていない人でしたから……仕事付き合いについては分かりません。プライベートでは……どうなんだろう。特に誰かとトラブルがあったような話は聞きませんけど」

「失礼ですが、大和さんと赤倉さんの馴れ初めは……？」

「色々ご縁がありまして……偶然が重なったとしても言

いましょうか」

矢野警部は難しい顔をしていた。

「失礼ですが、浮気などの兆候はありませんでしたか？」

「私と会う前に付き合っていた女とは縁を切った、みたいなことは言っていました。詳しくは話しながらなかったので詳細は分かりません」

「……大和さん、少しいいですか？」

矢野警部はおもむろに口を開いた。

「はい？」

「その……少し申し上げにくいのですが」
タブレットを大和さんに見せる。

「警察も既に赤倉氏の過去を洗い始めていますが、大和さん。あなたは赤倉氏の会社が小規模な金融業、正確には貸付業をしており、しかもかなりの負債を抱えていることを「存じでしたか？」

「負債……ですって？」

大和さんははつきりと動揺していた。

「どうやら「存じ無かつたようすな。実態はまだ調査中ですが、彼が運営する会社は長期に渡る不採算に苦しめられていたようです。神奈川県警の調べで判明しました。ひよつとして、大和さんは赤倉氏から彼の会社に入ることを提案されたりはしませんでしたか？」

「え……ええ、何度か。結婚したら小田原の方に嫁ぐ予定でしたし、そこで働くなら歓迎するとは言われました」

「ということは、まだ具体的な動きにまでは至っていませんね？」

犬塚刑事が念を押した。

「……どういう意味ですか？」

「たまにあることなんです。もし赤倉氏の会社にあなたが入ったら、小さな会社ですし、あなたをそれ相応のポジションに置くことは不可能ではありません。でも、会社は火の車。赤倉氏はあなたと結婚して、会社にあなたを入れたら準備完了。あとは会社の名義をあなたのものにして、自分はさっさと会社から手を引き、そしてあなたと離婚する。あなたの手元に残るのは負債。赤倉氏は無傷でゼロからやり直せます。もちろんこれを実行するには法律の壁を超えないといけません……かつて実際にやってのけた例もあります」

大和さんは顔面蒼白になっている。

「このようなことを言うのも酷ですが、赤倉氏が殺害されたことであなたはある意味助かったのかもしれない。もちろん、赤倉氏があなたにこのようなことをしようと思っていたのかどうかは定かではありませんが。過去のことをあまり話しながらなかったり、会社に引き入れる誘いをかけていたり、共通点は見られます」

大塚刑事はあくまで淡々と説明した。

「そんな……嘘だ……」

「残念ながら本当です」

矢野警部の言葉が追い打ちとなって、とうとう大和さんは椅子の上から崩れ落ちてしまった。

「じゃあ私は……何を、誰を信じていたの……?」

裏切られた女は、もはや涙さえも流せずに荒い息をしていた。

「しかし……まさかでしたね」

次の大塚刑事の言葉は聞き捨てならぬものだった。

「まさか白雪さんが赤倉氏の元妻だったとは……」

* * *

『皆様、おはようございます。食堂車、ダイナープレヤデスから第一回目のモーニングのご案内を致します。6時からのモーニングをご予約のお客様は3号車の食堂車・ダイナープレヤデスまでお越し下さいませ……』
私と剣さんは案内放送を聞いて立ち上がった。もうそんな時間か。食堂車に向かうとすぐに席に案内された。

「おはようさん」

釜田さんがのっそりと現れ、そのまま席についた。

「眠れましたか?」

「ああ、まあそれなりに。お前らは?」

「僕はあまり……どうしても事件のことが気になってしまつて。確氷さんは良く寝ていましたよ」

「ちよつ……剣さん!」

私は顔を赤くした。釜田さんは少し府に落ちない顔をしていたが、やがてニヤニヤ笑いだした。

「失礼します。こちら、モーニングセットでございます」

運ばれてきたのは和洋折衷のワンプレート料理だ。

「お飲物はいかがなさいますか?」

「僕はコーヒートをブラックで」

「俺もだ」

「ん……レモンティーをお願いします」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

クルーは厨房に去っていった。

「……で? 剣、事件の方はどうなってる?」

釜田さんはお粥にスプーンを伸ばしながら聞いた。

「どうせお前のことだ、何かしら考えはあるんだろう?」

「うーん……まだ何とも。警察もまだ熊野と一緒に部屋

だった浅間つて人と、白雪にまだ聞き込みをしていない

んです。まずはその二人の話を聞いてからですね。もし

かしたら僕が知らない間に聞き込みを済ませているかもしれ

ませんが、そうなつては万事休すですね。警察が一般

人の僕に捜査情報を漏らすはずもないので」

噂をすれば警察コンビだ。昨夜よりも随分と人数が増

えているから、恐らく青森や五稜郭あたりで応援増員が

乗り込んだのだろう。各テーブルを回つて聞き込みを開

始している。乗客の行動を押さえてアライバイの有無など

を炙り出すのだろうか。すぐに私達のテーブルにも来た。

やっぱアライバイの調査だ。別ににもやましいものは

無いため、素直に答えるだけだ。釜田さんが昼寝をして

いたくたかりをしつこめに聞かれたが、やがて調査を終え

て去っていった。

「そうか……そういや、浅間つてのは知らねえがあいつ

は昨日の昼にここで見かけたつきり見てねえな」

あいつ、というのは白雪さんのことだろう。

「ま、下手に顔を合わせたくもねえしな。好都合だ。:

確氷、食わねえのか? 冷めるぞ」

私はクロワッサンに手を伸ばした。剣さんは結構なべ

ースで目玉焼きとベーコンを平らげている。

「失礼します。ホットコーヒーとレモンティーでござい

ます」

頼んだ飲み物が運ばれてきた。

「そういえば、大和さんがいませんね」

私の言葉に剣さんは周りを見回した。

「あんなに憔悴していたら、お客様の前に出ることも困

難でしょう。乗務員用のスペースで休んでいるのかもしれ

れませんね」

剣さんは食べる勢いを落とさずに解説する。私はゆつ

くりとミニトーストをかじった。車窓には朝の海が陽光

できらめいている。

「内浦湾ですよ。この辺はイカが美味しいんです」

剣さんはサラダを食べ終え、ブラックコーヒーを飲み

干した。

「先に行つていますね。ごちそうさまでした」

剣さんはまだ朝食の途中の私達を置いて、さつさとサ

ロンカーの方に行つてしまった。

「……私、あんなにせかせかしている剣さんを初めて見

ました」

「事件のことが気になつてしょうがねえんだろ。あいつ、

優しいそうなた見た目をしててなかなか頭が切れるからな。

食えねえ男だよ」

釜田さんの声は心なしか面白そうだ。

「……剣のこと、どうすんだ?」

私は全身の血が沸騰したかと思つた。

「釜田さん……どうしてそれを!？」

「分かるなつていう方が無茶だろ。お前は劔の方をずーっとチラチラ見てるし、劔も劔であそこまで頬が緩んでるなんてな。何も無かつた方が不自然だ」

私は押し黙つた。凶星で顔が真っ赤だ。

「劔のこと、どう思つてる?」

私は答へに困り、ぼそぼそとオレンジを口に運んだ。

「まあ、これは老婆心から言わせてもらうが、恋やら愛やらだけじゃやつていけねえぜ」

「え?」

釜田さんはコーヒを啜つた。

「誰かを好きになるだけなら、愛するなり恋するなりだけで上等だ。幸せにするならそれだけでいい。だがな、人には好きになるその先があるだろ? 生きていかなくちやいけねえ。互いに幸せにし続けなくちやいけねえ。その領域は愛だけでは乗り越えられねえ。こんなことを俺が言うのも変だが、お互いに信じねえとな」

「信じる?」

「ああ。お互いに信じねえと何事も任せられねえし、とても協力的なんできやしねえ。……俺はあいつを信用できなくなつた。だから別れた」

信じる……。釜田さんの言葉が何かの呪いのように私の頭の中をぐるぐる回つた。

「俺みたいな野次馬がしやしやり出る幕じゃねえのは分かつてるが、劔を選ぶのはそんなに悪くない選択だと思う。俺が劔に太鼓判を押せるのも、俺が劔を信じてるからだ。でもな……自分の目は、時として嘘をつく。俺だつて騙されたしな。よく見極めろ」

釜田さんは自嘲気味に言うが、その言葉は半分も私に

届いていなかった。

信じる……。

信じる……。

誰かを信じる……。

その前に、私は。

私は私を信じられない。

私は劔さんを幸せにできるなんて。

そんなの信じられない。

私に。

私みたいなクズに。

列車は朝の海沿いを快調に飛ばす。

* * *

朝食を終えた俺は部屋に戻ろうかとも思つた。しかしどうにも事件の方が気になる。好奇心に負けてサロンカーに向かったが、劔と碓氷がいるだけで警察関係者はいない。モーニングが入れ替わつたから、新たに入つて来た乗客に聞き込みをしているのだろうか。

劔が俺の方を見た。

「釜田さん……少し、いいですか?」

「おう、どうした?」

俺はよつこらせ、と劔の横に腰を下ろした。

「白雪さんの件で少し聞きたいことがあるんです」

俺は眉根に皺を寄せた。あまり気持ちのいいものではない。

「……何が聞きたい?」

「いくつかあります。まず釜田さん、この列車で偶然出会つた知り合ひは白雪さんだけですか?」

「ああ」

「白雪さんがどこで何をしているかも、別れた後は全く知らないんですよ?」

「ああ。知りたくもねえ」

「そうですね……」

劔は口を閉じ、何やら考え始めた。

「結婚していた時、白雪さんの仕事は順調だったんですか?」

「……どうだかな、あまり仕事の話はしねえ女だったからなあ。別に悪い話は聞かなかつたが。ただ、白雪のやつてる仕事に誘われたことは何度かある。けつこう食いがられたな」

「しつこかつたんですか?」

「まあ、それなりにな。昔の話だ」

俺は一つ大欠伸をした。

「小さなことだし、入つたらそれなりに高いポジションにつけるとは言われた。俺の当時の教官稼業よりも稼げるつてもな。ただ……見ての通り、俺は脱サラして居酒屋をやるような男だ。そんなのには微塵も興味は無かつた。……そういうや、浮気を知つたのはあまり食い下がらなくなつた後のことだったな」

「離婚について白雪は反対しなかつたんですか?」

碓氷が劔の巨体の奥から質問を挟んだ。

「最初こそ渋つたが、案外すんなりと事は進んだな。俺が素行調査を頼んで、その証拠を突き付けたのもあるが。手切れ金とか訴訟とか、そんなめんどうくせえことをしなかつたのもあつたかもしれねえ」

「裁判を起こしたら勝てたかもしれませぬね」

「そんな暇があつたらとにかくさつさと離れたかつたんだよ。浮気されたつてのが結構こたえたんだ。どうせならこの際脱サラしてどこか新しい土地でやり直そうと思つてな」

「そうして開いたのが今の居酒屋だったんですね……そ

ういや、離婚前はどこに住んでいたんですか？」

『小田原だ』

『小田原！？』

剣が驚きの声を上げた。そんなに変な事言ったか？

『小田原がどうかしたのか？』

剣は俺の質問には何も答えない。動揺を隠しきれないまま、じつと考え込んでいる。

『剣の奴、一体どうしたんだ？』

『さあ……？』

碓氷も首を捻っている。

車内放送が流れる。

『まもなく洞爺 洞爺です。ホームが雪で滑りやすくなつておりますのでお気をつけ下さい。洞爺の次は東室蘭に停車致します』

* * *

洞爺駅では新聞の朝刊が積み込まれる。ホームにいる係員から束を丸ごと受け取り、倉庫にしまう。新聞は重いわ、ホームは雪が凍って滑りやすいわ、停車時間は短いわで、地味な割に大変な仕事だ。

半ば無理矢理心持ちを落ち着かせ、メイクを直した私は新聞を受け取りにホームに出た。祝日の朝早い時間ということもあり、ホームは閑散としている。まばらな客の中に新聞の束を持った係員はすぐに見つかった。

『こちら、朝刊です』

『はいはい、どうもー』

係員から朝刊の束を受け取った。列車に置いてけぼりを食らわれないように小走りで乗り込む。程なくしてドアが閉まり、列車は再び走り出した。

朝刊の一面見出しが目に入る。

『小田原 男性の刺殺体』

心がばきりと音を立てて折れた。せめて仕事の間だけは目を背けていようとした事実。いや、今はもはや悲しみだけではない。不信も少しずつ混じる比率が高くなってきている。

ふと、私の心にむくむくと不安が湧いてきた。

嫁ぎ先が亡くなった。

職場は退職が決まり、後任も決まっている。

私はこれからどうしたらいいの？

通路で新聞の束を抱えて立ち尽くしていると、誰かが歩いてきた。

『あの……大和さん、でしたよね？』

呼び止められる。眼鏡をかけた細身の女性客だ。

『あなたは……』

『昨晚、あなたに介抱してもらいました。碓氷です』

昨晚……だいぶ記憶が曖昧だが、そんなことをしたような気もする。ああ、そうだった。ロイヤルのお客様だ。

『昨晚はどうもありがとうございました』

『ああ、いえいえ。とんでもございません。体調の方はいかがですか？』

『お陰様で。……あなたも、災難でしたね』

碓氷さんは少し新聞の見出しに目を落とした。

『ええ……』

『そんなに気を落とさないで下さい……つて、そう言う方が無理ですか』

『……いえ、私は大丈夫ですよ。全然』

返事が一拍遅れた。碓氷さんは心配そうに私を見た。

* * *

俺はサロンカーでぼんやりとしていた。剣は何やら真剣な顔をして、さつきからずつと時刻表をめぐっている。碓氷はどこに行ったのか知らない。クルーを探しに行く

とか言っていたが、何の用事だろうか。

洞爺駅を出た直後。頭上のスピーカーからチャイムが鳴ったが、放送がなかなかスタートしない。

『何だ？』

俺は上を見る。スピーカーは沈黙したままだ。

『7時半からのモーニングの案内じゃないですかね？』

『それにしちゃあ少し早くねえか？』

果たして、放送の本身はモーニングの案内などではなかった。

『お客様にご案内致します。突然ではありますが、警察の要請に基づいて、只今より全てのお客様の所持品と客室検査を行うことになりました。ご迷惑をおかけ致しますが、ご理解とご協力をお願い致します』

俺は驚いて思わず立ち上がった。見られて困るようなものは何も無いが、あまり気分の良い話ではない。

『いよいよですか。遅かれ早かれやるとは思っていましたけど』

『こいつは大事だぞ……剣、部屋に戻るか？』

『いえ、釜田さん。客室での搜索対応は任せました』

『任せましたつて……お前はどうすんだよ？』

剣はそつと俺の後ろを見た。その目つきは普段からは考えられないほど厳しい。

俺はそつと振り返った。

矢野警部と犬塚刑事に挟まれて、白雪が聞き込みを受けようとしている。俺は絶句した。

『……部屋に戻る』

『頼みます』

俺は足早にサロンカーを後にする。途中、通路で碓氷にすれ違った。

『釜田さん、どうしたんですか？』

「サロンカーに行ってみな。そうすりゃ分かる」
碓氷は不思議そうな顔をしていたが、すぐにサロンカーに消えた。

* *
サロンカーの戸が開き、中へ。入るや否や、私は釜田さんの言葉に合点がいった。

劔さんの横にまたまた腰を下ろす。劔さんはなぜか時刻表を開いているが、その視線はじつと後ろの席にいる三人に注がれていた。

「劔さん、あの人って……」
「ええ」

劔さんは私の方は優しい目を見た。

「白雪さんですね」

矢野警部と犬塚刑事はじつと白雪と対峙している。白雪さんは腕を組んで警察コンビを見返している。

「白雪春江さんですね？ 秋田県警の矢野です。こちらは部下の犬塚です。いくつか質問をよろしいですか？」

白雪さんは冷淡に言った。
「ええ、どうぞ」

この人が釜田さんの元妻か……そういえば、こうやって近くでまじまじと見るのは初めてだ。

釜田さんは『白粉のバケモン』なんて言っていたが、あまりそんな風には見えない。むしろ化粧つ気はあまりなく、元々が色白なだけだ。近くで見ると年齢相応の小皺などそれなりの老いは感じさせるが、かなりの美人だ。体格は……思いの外小柄だ。

「警察が車内を捜索するなんて、一体どういふつもりですか？ 何かあったんですか？」

白雪さんは険しい声で聞くが、私は驚いた。まさかこの人、何も知らないの？

「ご存じ無いのですか？」
矢野警部も驚いたようだ。

「この列車の中で殺人事件が起きたってことを？」
今度は白雪さんが驚く番だった。

「殺人事件!？」
咄然として、何も言葉が出ないようだ。

「殺人事件って……一体、何かあったんですか？」

「本当にご存じないのですか？」

「……何なんですか、その言い方は。何も知らないから聞いているんでしょう？」

動揺しているのは矢野警部と犬塚刑事も同じだ。困惑した表情をして白雪さんを見ている。

「……5号車2号室の乗客、つまりあなたの部屋の隣ですね。熊野寛太氏がそこで死体となって発見されました。死因は首吊りによる窒息死、しかも死体の頭部と両手が切り落とされた状態で発見されました。頭部と両手は発見、回収されましたがまだ真相解明にはほど遠い状態です。現在、全ての乗客から聞き込みを行っています。あなたへの聞き込みはその事件について。それとも一つ、

神奈川県警からの協力要請に基づき、昨日小田原で殺害された赤倉翔一氏についての聞き込みを行います」

矢野警部の目は険しく、獲物を目の前にした猛獣のような輝きを放っている。

「熊野氏も、赤倉氏も、あなたはよくご存じのはずだ」

白雪さんは困惑した表情のままだったが、その目は警部と対照的に冷え切っている。

「まずは熊野氏がこの列車内で殺害された事件から始めましょう。あなたの列車内での行動を時系列順に教えてください」

白雪は少し考え、やがて答え始めた。

「大阪から乗って、検札を済ませて、食堂車でご飯を食べ……」

「すみません、ただ正確な時間も思い出して頂けると助かるのですが」
「面倒ですね」
「人が殺されたんですよ？」
白雪さんは冷たい口調で、しかし素直に話し直した。
「検札が部屋に来たのは京都を出た後だったと思います。ちゃんとした時刻までは覚えていませんが、食堂車の案内がある前だったのは覚えていません」
「車掌の顔は覚えてますか？」
犬塚刑事がタブレットを差し出した。二人の車掌の顔写真が映っているのだろう、見比べるように両目が揺れ動く。
「……確かこつちの人でした」
「草津車掌ですか。……ふむ、続けて下さい」
「食堂車で食事を済ませたんですが、気分があまり優れなかったので部屋に戻りました。部屋でしばらくぼんやりしていたら気分が良くなってきたので、部屋の外を歩いたりもしましたが、基本はずっと部屋に閉じこもっていました」
「気分が優れないと言いましたが、今は大丈夫ですか？」
「ええ。一晩寝て起きたらすっきりしました。少し列車に酔ってしまったようです」
「そうですか……昼食は何を？」
「……ちよつと待って下さい」
頭に手を当てて考え込む。
「……ビーフシチューだったと思います」
犬塚刑事がメモを取った。
「一度部屋に戻って、そこから歩いたのは何時くらい

でしたか？」

「……ちゃんと覚えていません」

「大体でもいいんです」

「……夕方くらいでした」

随分曖昧だ。

「夕方……何か窓の外に見えませんでしたか？ 海とか、山とか、どこかの駅とか？」

「海が見えましたね。」

「海が見える夕方くらいとなれば……17時過ぎくらいからの時間帯になりますね」

私が剣さんとディナーを食べる直前の頃だ。夕焼けが

きれいだだった。

「他の時間帯は部屋の中にいたんですか？」

「夕食の時以外はそうですね」

「夕食はディナーコースか何かを？」

白雪さんは首を横に振った。

「ディナーは予約が取れなかったので食べていません」

「パブタイムに済ませました」

「パブタイム？」

矢野警部が手元のパンフレットをめくる。

「ディナー時間帯の後に軽食を提供する時間があるんです。と言つても、軽食だけでなく腹持ちのする一品料理も出ます」

「それはまた豪勢な……何を食べたんですか？」

白雪さんは少し考える。

「……ステーキピラフと、ピクルスだったと思います」

後はビールを少し」

そういうえば、昨夜のパブタイムのメニューにはそんな感じの一品料理もあった。

「場所は？」

「食堂車です」

少なくとも、このサロンカーでないことは確かだ。釜

田さんが気付かないはずがない。あの人なら問答無用で

場所を移動するだろう。

「時間は？」

「……9時過ぎくらいでした、確か。そこから部屋に戻

つてさつさと寝ました」

「そこから先、自室からは出ていないわけですね？」

犬塚刑事が念を押す。

「昼食と夕食、それに先程話してもらった夕方以外はず

つと部屋にいた、と言いましたね？ それを証明できる

人はいませんか？」

「あいにく一人旅でして……」

「お一人？ あなたの部屋は二人用個室のほうですが、

なぜ一人用の個室ではないのですか？ この列車にはシ

ングルツインという、一人用個室も完備されています」

「一緒に乗る予定だった人が急な仕事で乗れなくなつて

しまったんです。仕方ないので私一人だけで乗りました」

犬塚刑事は乗車予定の相手の名前と住所を控えたが、

その男は現在ウイーンにいるらしい。とても事件には関

係がなさそうだ。

「お一人ということ、基本的に誰もあなたの行動を証

言できないということですね？」

白雪さんは少し渋い顔で頷いた。

「部屋の中に居て、何か変わったことはありませんでし

たか？ 窓の外になにか怪しい物が見えたとか、変な物

音がした、とか」

犬塚刑事からの質問に沈黙考する。

「うつらうつらしていたりもしたので……あんまりはっ

きりとは分かりません。特に無かったと思います」

「部屋の車窓から何か見えましたか？」

「……変わったものは何も。名所なら立山とか海が見え

たくらいですね。写真はありませんけれど」

「どうやら本当に何も見ていないようだ。」

白雪さん。ここからはあなたのプライベートにも踏み

込んだ質問となります。あなたは数回の結婚歴と離婚歴

があるようですが、釜田という男を覚えていますか？」

犬塚刑事がどきりとする質問を放った。

「釜田……ああ、あの。ええ」

「この列車にその釜田さんが乗っています」

白雪さんは肩をすくめた。

「京都を出てしばらくしてから会いましたよ。偶然」

釜田さんと同じことを言っている。

「挨拶くらいしようかと思っただけど、どうやら今も嫌わ

れているみたいね……結局、何も会話をせずに終わしま

した。それっきり姿を見ていません」

そりや、釜田さんもあんなに会うのを避けていたのだ

から。姿を見ていなくても当然だ。

「熊野氏、それと熊野氏の同棲相手の浅間氏との関係に

ついて伺います。浅間氏はあなたにだいたい怒っています

たよ。あなたに200万円を騙し取られたと」

「熊野……浅間……ああ、あの二人ですか。岩手から避

難してきた」

身に覚えがあるようだ。

「ですが……私があの人を騙した？ 人聞きが悪いで

すね。私は何も法律に触れるような真似はしていません」

「合法？ あなたの真似は脱法では？」

「司法に訴えられたわけでもありません。その証拠に、

私はあの二人から告訴されたわけでもなく、警察などの

公的機関から捜査を受けたわけでもありません。私の行

いが合法だったからです」

「あの二人の生活は困窮していますよ」

「私は自分の仕事をしただけです」

警察相手に一歩も引いていない。

「それに、あの二人と関わった時の事業は既に他の人に譲りました」

「赤倉翔一氏ですか？ 確か赤倉氏に事業を手渡した時既に事業は苦しかったとか。赤倉氏はそれを承知だったんですか？」

「事実は知らせましたよ」

「でも、赤倉氏が業務を引き継いだ直後にあなたが業務から手を引き、さらに離婚までするとは思わなかったでしょうね」

大塚刑事の目には僅かに嫌悪感が浮かんでいる。

「何かいけませんか？」

白雪さんもここまでくるともはや開き直りだ。だが、法に触れたことが証明できない以上、警察は何も手出しができない。罪を犯しても、その罪を証明できない限りは裁くこともできない。そういうものだ。

「赤倉氏はあなたから受け継いだ企業をそのまま維持していました。あなたが在籍していた頃の負債も引き継いだまま。どうやら、あなたと全く同じやり方で他の人に押し付けようと画策していたようですが」

他の人……大和さんのことだろう。赤倉さんとかいう人はかつて自分が受けた行いを、そのままそっくり他の人にやろうとしていたようだ。身をもってお手本を体験させられたのなら、実行に移すのもたやすいだろう。ましてやそれが違法と立証されないのなら尚更だ。

「別れた男には興味ありません」

「そうですか？」

矢野警部と白雪さんが互いに睨み合う。張り詰めた沈黙を一時、踏切の警報音が彩る。

先に口を開いたのは白雪さんだった。

「仮に私に赤倉を殺す理由があったとして、どうやって殺したんですか？」

「赤倉氏はナイフのようなもので刺殺されました。心臓を一突き、即死だったと考えられています。現場には何者かと争ったような痕跡もありました」

「あなた、頭悪いでしょう？」

白雪さんが挑発する。

「私は別に凶器とかの話はしていませんよ。どうやって殺したのかっていうのは、アリバイがある私がどうやって赤倉を殺害したのか、という意味です。私はずっとこの列車に乗っていました。大阪から札幌まで、ひたすら日本海沿いを走るこのトワイライトエクスプレスに。一体どうやって小田原に行つて赤倉を殺すんですか？ できるものならむしろ教えて欲しいですね」

「……赤倉氏の交友関係について伺います。誰か、赤倉氏に恨みを持っていた人に心当たりはありませんか？」

「さあ？ もうあの人は夫でも何でもないのです。結婚していた頃も特に心当たりはありません」

白雪さんの冷淡な回答に、とうとう二人とも沈黙してしまつた。

「まだ質問はありますか？ 無いのならこの辺で切り上げて下さい。そろそろ朝食の時間ですから」

白雪さんは返事が無いのをいいことに、そのまま立ち上がつて食堂車に行つてしまつた。

矢野警部は大きくため息を吐き、大塚刑事は机に突っ伏してしまつた。

「……一体これ、神奈川県警さんの方にどうやって説明

するんですか？ 結局収穫はほとんどゼロですよ」

「私に聞かないで下さい、大塚刑事」

矢野警部は忌々しそうに白雪さんが消えた食堂車の方を見た。

『まもなく登別、登別です。登別の次は苦小牧に停まります。雪でホームが滑りやすくなつておりますので、お降りの際はお足元に注意下さい』

時刻は8時11分。薄く雪化粧をしたホームに列車は身を横たえる。

……ん？

「あつ、やばっ！」

私はがばりと立ち上がった。

「どうしたんですか？」

「モーニングサービス忘れてた！」

今頃、朝刊と紅茶を片手に私の部屋の前で待ちぼうけを食らっている人がいるかもしれない。私は慌てて自室に戻ろうとした、が。

「確氷さん」

剣さんが私を呼び止めた。

「はい？」

「……その、僕も一緒に行つていいですか？」

* * *

私が部屋に戻るや否や、剣さんは机を借りた。さつきからずっと手に持っている時刻表を開いて、電気スタンドを点けた。

「確氷さん。この便箋、使いますか？」

剣さんが見せたのは、隅っこに列車のマークが描かれたオリジナルの便箋だった。

「引き出しの中にあつたんです。使わないのなら貰つていいますか？」

私が頷くと、剣さんは時刻表と首つ引きで便箋に何か書き始めた。でも時刻表にはそこまで用が無かったのか、すぐに閉じてしまった。

誰かが部屋の戸をノックした。開けるとワゴンを押したクルーが立っている。

「おはようございます。モーニングサービスのお飲物と朝刊でございます」

「どうやらまだ来ていなかったようだ。内心胸をなでおろす。今朝の紅茶はダージリンのようだ。いい匂いが鼻をくすぐる。」

「あの、すみません」

飲物と朝刊を置いて帰ろうとしたクルーを剣さんが呼び止めた。

「何でございましょうか？」

「ホールマネージャーの大和さんと呼んで頂けませんか？ 少々お話ししたいことがあります」

大和さんと呼ぶと……今度は何をする気なのだろう。

「ご用件がございましたらお伝えしますが」

「直接お話ししたいんです」

剣さんがここまでごり押しするのも初めて見た。今回の旅で、あまり知らない剣さんの一面を色々と垣間見ることができた。クルーは渋っていたが、やがて根負けして呼んできてくれることになった。

「剣さん……」

何をする気なんでしょうか、って聞こうとして思いとどまった。何だか、聞くのが怖かったからだ。

全てを見透かされそうな気がして。

* * *

ダイナープレヤデスでのモーニングもいよいよ終盤

私は忙しく立ち回っていた。そうでもないと思えと色々考

えてしまうからだ。忘れていないと心が辛いからだ。

「大和さん」

「あ、大久保さん。どうしたの？」

「お客様が呼びびです」

「私を？」

私は目をぱちくりさせた。

「何で……？」

「さあ……大和さんとお話したいそうです。他のクルーでは駄目だそうで」

「我儘なお客様ね。どの部屋？」

「1号車5号室の方です」

……そこは確か、私が介抱した女性客の部屋だ。

「分かった。少し行ってくるから、ここをお願いします」

「はい」

私は急ぎ足で部屋に向かった。ノックをすると、すぐに確水さんが開けてくれた。

「突然お呼びして申し訳ありません」

確水さんの背後から穏やかな声が聞こえた。

「お話を伺いたいんです」

この人は……確か、剣さんって言ったっけ。

「大和さん。刑事さん達が話していたことを全てそのまま教えてくれませんか？」

剣さんはあくまで穏やかに、でも有無を言わせない真剣な目で私を見据えた。

あ、これ、逆らえないやつだ。そう確信した私はそつと戸を閉め、促されるがままにソファに座った。そして、そのままた話を始めた。

私は通路を歩いていた。前には大和さんと剣さんがいる。サロン・デュ・ノールには不安そうな顔をしたクルーがいた。

「大久保さん」

「あ、大和さん。大変ですよ！」

「どうしたの？」

「熊野様の事件ですけれど、警察の人が車内捜索でえらいものを見つけたみたいなんです」

「ええ？ えらいもの？」

「その5号車に行ってみて下さい」

「う、うん。あ、矢野警部と大塚刑事は？」

「5号車です」

私はそのまま隣の車両へ移る。誰かが大声で言い争っている声が聞こえてきた。

「だから、私はこんなもの知りませんってば！」

「じゃあこの靴下は何なんだ！ この血痕は！ 熊野の遺体を解体した時に付着したことに気付かなかったんだろっ！」

「知らないって言っているでしょう！ 馬鹿馬鹿しい言いがかりです！」

見ると、矢野警部と白雪さんが激しく怒鳴っている。

ぱつと見、白雪さんの方が劣勢だ。

「しらばっくれんな！ お前の部屋は壁を抜けて隣の2号室に入りできるようになってる！ 浅間がいない頃合いを見計らって部屋に入って熊野を殺したんだろっ！」

う！ 違うか！

「私は殺してなんていません！」

釜田さんがこつちに近寄って来た。

「釜田さん、これって……」

「警察が白雪の部屋を捜索したら、血の付いた靴下が見つかったんだ。警察は熊野の死体をばらした時に付いて、それに気付かず白雪が処分し忘れたんだろうって言っている。あいつ、とうとう殺りやがったな」

「血痕が付着しているのは靴下だけなんですか？」

「ああ。あの野郎、衣服もまるまる一式無くなっているなんて言っているが、どこまで本当だろうかね」

「剣さんは黙って考え始めたが、すぐに顔を上げた。」

「矢野警部、犬塚刑事」

「剣さんは二人を呼んだ。矢野警部は険しい顔をそのままに首だけ剣さんの方に向けた。」

「えーと……あなたは、剣さんでしたな。何か？」

「剣さんは落ち着いた声でとんでもないことを言った。」

「犯人が分かりました。関係者を集めて下さい」

その言葉の意味を理解するのに、その場の全員が少し時間を要した。剣さんは追い打ちをかけるように言う。

「謎解きです」

* * *

トワイライトエクスプレスは苦小牧駅を発ち、札幌へとラストスパートをかけ始めた。片道2時間。あれだけ長かったはずの鉄道の旅は、気が付くと残り1時間くらいしか残されていない。

窓の外は雪原。牧場なのだろうか、列車が巻き上げる雪煙の中を一頭のポニーが並走する。

みんな声を出すこともできずにじっと剣さんを見ている。ある者は不安そうに、またある者は訝しげに。所は5号車1号室、白雪の部屋だ。響くのはレールの音だけ。

「剣さん」

最初に沈黙を破ったのは矢野警部だった。

「謎が解けた、ということはおそらく犯人とトリックに目星がついたということですか？」

「剣さんは黙って頷いたが、それでも矢野警部は胡散臭そうな表情を崩さない。犬塚刑事の目は冷たい。」

「大丈夫……なんですかね？」

「さあ……？」

大和さんと三吉車掌が心配そうに小声で話す。草津車掌も不安そうだ。浅間さんの顔は青く、逆に白雪さんの顔は赤い。さっきまで矢野警部と言いつ争っていた余韻だろうか。

私は自分でも不思議なほど平然としていた。どこから湧いてくるのか知らないが、剣さんなら大丈夫という確信を得ていた。

釜田さんは静かに剣さんを見守っているが、その細い目はちらりちらりと白雪さんの方を見ようとして、やっぱり見ないでいる。

「皆さん」

「剣さんがとうとう口を開いた。私達の間に緊張が走る。」

「今回の事件について、僕なりに考えたところ、一つの結論に至りました。皆さんのお時間を少々頂いて、自分の推理をお話しようと思います」

「剣さんは周りを見回す。私とも目が合う。その目からは……いつだったか、『かま田』で霧島さんが持つて来た事件のことを話す時と同じ。冷静で、普段湛えている優しさが薄れている。」

「始めましょうか」

* * *

「さて。今回の事件では二つの遺体が登場します。このトワイライトエクスプレス、5号車2号室で発見された熊野寛太氏の遺体。そして小田原で発見された赤倉翔一

氏の遺体。その両方の事件についてお話しします。まずは熊野氏の方から順を追って話すことにします。熊野氏と浅間さんはこの列車の5号車2号室に宿泊予定だった乗客です。隣の1号室には過去にいざこざがあった白雪さん、3号室には僕と釜田さんがいます。浅間さんと熊野氏は食堂車・ダイナープレヤデスでランチを済ませた後に部屋に戻りましたが、そこで口論になります。浅間さんは部屋を出て、主に7号車のミニサロンにいたそうです」

「え、ええ」

「で、そこからダイナーを済ませるまで部屋には戻らなかった。戻ってきたら、変わり果てた姿で熊野氏が発見された。頭部と両手を切り落とされた遺体で発見されました。誰が、何のためにこのような真似をしたのか？そこから話は始まります。話を分かりやすくするために、先に結論から言ってしまうでしょう」

「剣さんは一拍置いて、言う。」

「熊野氏を殺害したのはあなたです、白雪さん」

「周囲からどよめきが起こった。」

「ほら見る、やっぱやお前じゃないか！」

「な……嘘、そんなことしてません！」

「矢野警部が怒鳴る。否定する白雪さんの声は虚しい。」

「このパンフレットを見て下さい」

「剣さんは白雪さんの叫びを無視して、トワイライトエクスプレスのパンフレットを手を取った。」

「この項目、B個室の案内の説明書です。『ツインは間仕切りを取り外して4名様までお使いいただけるお部屋もございます』とありますね？白雪さんが熊野氏を殺害したのなら、どうやって2号室に入ったのでしょうか？2号室のドアには鍵がかかっています。開けるため

には専用のカードキーが必要となります。白雪さんがそのカードキーを持っているとは考えにくい。浅間さんと熊野氏と敵対している以上、その二人しか持っていないカードキーを入手できるわけがないからです。ならばどこから部屋に入ったのか？ 皆さん、こちらの壁にご注目下さい」

剣さんは壁に手をかけ、そのまま力を込めた。すると壁が折戸のようにすると開いて、隣の2号室とくっついて一つの四人用個室になった。

「乗務員の皆さんは当然ご存じでしょうし、警部さんもご存じのようです。さっきこうやって部屋に入ったんだらうと白雪さんに詰め寄っていました。ですが改めて説明しましょう。この二人用のB個室ツインは5号車、6号車、7号車に設置されています。その各車両の1号室と2号室の壁はスライディングウォールとなっています。つまり、こうやって開いて一つの四人用個室になります。これなら戸に鍵がかかっているというまいと無関係です。白雪さんはこの仕組みを使って2号室に侵入し、熊野氏を殺害した……」

剣さんは一息つき、さらに一言付け加えた。

「そう思わせたかったんですよ、浅間さん？」

* * *

一同の視線が浅間さんに集中する。

「そう、熊野氏を殺害したのは白雪さんではありません。全て、浅間さんが熊野氏と仕組んだ畏だったんです」

「な……」

浅間さんが口をばくばくさせるも、何も言葉が出てこない。反対に白雪さんはほっとしたような怪訝なような、何とも微妙な表情だ。

「……人が悪いですね。驚かせないで下さいよ」

白雪さんの吹きは無視される。

「畏つてことは……白雪さんに熊野氏殺害の罪をかぶせようとしたってことですか？」

「そうです」

犬塚刑事の間に即答する。

「まず、動機というか理由から説明しましょう。浅間さん、あなたは熊野氏と岩手県で出会い、震災の影響で神奈川に広域避難を余儀なくされた。生活はさぞ苦しかったでしょう。そんな最中、白雪に200万円を騙し取られてしまう」

「騙してなんか……」

「うるせえんだよ黙いな！」

白雪さんの反論を釜田さんが粉々にする。

「故郷を追われ、金を騙し取られ、とても生活再建どころではなかったでしょう。あなたがたがどれだけ白雪さんを恨んだか、想像には難くありません。しかし訴えるにも資金が必要ですし、そもそも勝訴して金を取り返せるかどうか怪しい。それ以前に白雪さんは姿をくらましてしまった。泣き寝入りして生活に困窮するしかなかったのでしょう。景気も良いわけではなく、お先真つ暗。そんな時、白雪さんがトワイライトエクスプレスに乗るといふ情報を知ります。さすがにどこからこの情報を得たのかは僕にも分かりませんが、とにかくこれは白雪さんと接触、ないしは何らかの復讐をする絶好の機会。接触するだけでは何も収穫はなさそうですから、あなた方は復讐する方を選びました」

浅間さんは大きくため息をついた。

「この女がこの列車に乗ると知る直前、私と熊野は心中する腹積もりだったんです。もう生きていても何にもならないし……生活は苦しくなる一方ですし、もはや将来

に何のあてもありませんし、岩手に戻れる見込みも薄い。……でも、この人がこの列車に乗ると知った時、久々に希望が見えた気がしたんです。どうせなら、死ぬ前にこの女に一泡吹かせてやろうって。本当は殺してやるつもりだったんです。でも、ただ殺すだけではつまらない。どうせなら散々に苦しめまくってじわじわと鬨り殺したかったんです。でも……その方法を思いつかなかったんですよ、何にも」

剣さんは黙って浅間さんの自白に耳を傾けている。

「この列車のことも色々調べて、どうにかむごたらしく殺す方法を考えたんですが、時間もスペースも脳みそもそして誰かさんのせいでお金にも限りがありました。はつきり言つて、不可能だったんです。私と熊野の二人でこの女に散々責め苦しめさせて殺すなんて芸当は、でも、考え直したんです。白雪を殺すことが本当に復讐になるのかって」

浅間さんは狂気じみた笑みを浮かべた。

「死んだらもう大切な人には会えないし、何も楽しいこともできない。でも、逆に考えてみて下さい。死んだらもう辛いこともない、苦しみもない。だったら殺すよりも生かしておいて、二度と立ち直れないようなダメージを抱え込ませて、延々と苦しめ続けるのもありなんじゃないかって、そう思ったんですよ」

「あなたも熊野氏も、今が苦しいから死んで楽になろうとしましたもんね。そのように発想がなくなってもおかしくはないでしょう。だから、生かしておいてどれだけのダメージを与えるかを考えた結果、白雪さんをおの腕に嵌めて濡れ衣を着せ、刑務所にぶち込むことを考えたんですね」

浅間さんは頷き、悲しげな笑みを浮かべた。

「見破られてしまいましたけどね……どうして分かったんですか？　これが熊野と私が命と人生を引き換えに白雪に仕組んだ異だつて」

「いくつか理由はあります。仮に白雪さんが熊野氏を殺害した場合に、矛盾する点がいくつかあったんです。まず、浅間さんをミニサロンで見かけたという証言が得られるかどうか、それもまず怪しいです。まあこれは、警察の方が全ての乗客の方に聞き込みを行い、そこから得られたデータを精査してからの判断になるでしょうけれど。しかし既にはっきりしている矛盾もあります。釜田さん、大和さん。金沢駅に着く直前に2号室から変な音がしたって言っていましたよね？　ちよつと再現してみるので、聞いてみて下さい」

「剣さんはそう言うかと、壁とか仕切りを元に戻した。そのまま私達を置いて自分だけ2号室に消えてしまう。すぐに音が聞こえてきた。」

どん。どすん。どんどん。どしん。

壁が開く。剣さんが出てきた。

「どうですか？　こんな感じじゃありませんでしたか？」

「そつくりだ。少し大きすぎるけどな」

「こんな音でした。でももつと小さい音だったはず」

釜田さんと大和さんが揃って肯定する。

「今の音は僕がわざと壁に体当たりした音です。仮に白雪さんがこの壁から2号室に侵入して熊野氏を殺害したとしたら、熊野氏は当然抵抗するはずです。取っ組み合いになって大声も出るでしょうし、壁にぶつかったら今みたいな大きな音が出るでしょう。しかしそんな様子はありませんでした。取っ組み合いは無かったと考えるのが適切でしょう。もう一つ。熊野氏は車内に残された遺体の状況から首吊りと判断されました。首を吊るとした

ら、この二段寝台の上段を支えているロープか、あるいは窓際に固定されたこの金属製の梯子に縄をかけることになり。強度的には梯子の方を選ぶでしょう。ロープよりも金属製の梯子の方が丈夫そうですね。そういうえ、梯子からタオルの繊維らしきものと傷が発見されたといっていましたね？　そのタオルを梯子に引っ掛けて首を吊つたのでしょうか。釜田さん、3号室に実物のタオルがあるので持ってきてくれますか？」

釜田さんは一つ頷いて3号室に向かい、例のタオルを持って来た。列車のマークがでかかと描かれた深緑色のスポーツタオルだ。

「でも、事件現場の2号室では梯子は壁際から窓際に移動させられていました。そうでなければ梯子に縄を掛けることができないからですが、ですが考えてみて下さい。

壁を取り払ったとはいえ狭い室内、梯子を壁から窓際に移動させ、抵抗する相手の首に縄をかけて、その縄を梯子にかけて吊るす。しかも被害者も犯人も大声は出さない……無理でしょう」

私はその図を想像してみた。あまりにも馬鹿馬鹿しすぎてはやコメデイの世界だ。

「さらにこの場合、白雪さんに熊野氏の頭部と両手首を切り落とすメリットが無いんです。白雪さんが熊野氏を殺害したと考えた場合、これらの矛盾点を満足に解決できる答えが無いんです。つまり、熊野氏を死に至らしめたのは白雪さんではなく浅間さんだと考えるのが適切です。熊野氏は白雪さんに熊野氏殺害の罪を着せるために自殺したんです。そう考えたなら、熊野氏の遺体から頭部と両手首が切り落とされた理由も読めます」

浅間さんはもはや消し炭のようになってる。白雪さんの顔は不安そうだ。

「釜田さん、実演をしたいので手伝ってくださいませんか？」

「え？　お、おう」

釜田さんは剣さんに近寄った。

「釜田さん、僕の首を絞める真似をして下さい。そのタオルで」

釜田さんは言われるがままに慎重な手つきでタオルを剣さんの首に巻き、背後から絞める真似をした。

「皆さんはこんな状況になったらどうしますか？　この再現は首吊りではないので不正確ですが、首吊りの場合でもおそらく答えは同じですよ」

「……タオルを解こうともがくでしょうね。首元を掻きむしるようにして」

三吉車掌の答えに剣さんは大きく頷いた。

「ええ。こうやって掻きむしるでしょうね」

そう言い、剣さんは首元を掻きむしる。両手の先っぽをタオルと首の間の隙間に突っ込んで、少しでも気道を確保しようとする。

「釜田さん、タオルを取って下さい」

釜田さんがタオルを取ると、剣さんの首元は掻きむしったところが真っ赤になっていた。

「こうやって赤くなります。そう、首元に跡が残るんですよ。指も見て下さい。爪の間に皮膚組織が詰まっています。汚いですが、要は垢ですね。これがあれば誰だって他殺を疑うでしょう。じゃあ次の質問です。皆さんはこれから首吊り自殺をすると思います。今みたいにもがきますか？」

少しの沈黙の後、みんなめいめいに首を横に振った。

「ええ、誰ももがいたりしません。つまり、自殺の場合

は首元に掻きむしった跡はできないし、爪に皮膚組織も残らない。熊野氏は自殺、でもそれを他殺に見せかけた

い。でも他殺に見せかけるには首元に跡が無いこと、手の爪に皮膚組織が無いことが矛盾している。死んだ後に熊野氏の手を取って首元を掻きむしらせても、首元の跡から生体反応が出ないから偽造工作だとばれてしまう。……ならば証拠を隠滅するしかない。自殺だということばれないようにするべく、頭部と両手首を切り落とすて始末したんです」

なるほど……。

「じゃあ、私が聞いた部屋の音は……」

「首を吊った熊野氏の遺体が列車の振動で揺られて壁にぶつかった音でしょう」

釜田さんと大和さんは、互いに嫌そうな顔を見合わせた。死体の音となれば気持ち悪いだろう。

「切り落とされた頭部と両手の処理も徹底していました。この列車は秋田県に入る直前の駅、女鹿駅で対向の上野行き寝台特急あけぼのと列車交換をします。女鹿駅の辺りは線路が一本しかないのですれ違いではなく列車交換をしなければいけません。トワイライトエクスプレスとあけぼのの列車交換の話はネットにも出ています。熊野氏の頭部と両手首を鋸で切り落とす後、女鹿駅に着く直前で幌に鋸で穴を開けてそこから捨てます。連結幌に穴が開いていたのは9号車と電源車の間でしたね？そこから捨てたら9号車の後ろに繋がる1〜8号車にも轢断され、さらに対向のあけぼのにも轢断されます。頭部と両手首、凶器はより綿密に木っ端微塵にされて、自殺だったということは分かりにくくなります。さっき白雪さんの服が一着無くなっているという話をしていました。が、浅間さんが逆に壁を通り抜けて白雪さんの部屋に入り、白雪さんの服を着て熊野氏の遺体の解体をしたのでしよう。そうすれば白雪さんの服が血まみれになり、白

雪さんを疑う決定的証拠になります。女鹿駅の手前、頭部と両手首の残骸が発見された辺りに衣服の残骸もあつたそうですが、恐らく白雪さんの衣服でしょう」

浅間さんは弱々しく頷いた。

「でも、衣服を全部処分してしまうと今度は車内から熊野氏の血が付いた白雪さんの服が無くなってしまいます。すると警察の目を白雪さんに向けてるタイミングが遅れてしまうかもしれません。女鹿駅の手前で轢断され、ズタズタになった衣服の持ち主を特定するのはたいへんですし、時間がかかりますからね。列車が終点の札幌に着いて、白雪さんがそこからどう行動するかまでは分からない。いや、分かっていたのかもしれませんが、とにかく逃亡の恐れがある。ならば警察には白雪さんを列車の中で捕まえてもらうしかない。そのためにわざと熊野氏の血が付いた白雪さんの靴下だけ残しておいた……違いますか？」

剣さんは浅間さんを冷たい目で見る。もはや浅間さんは何も答えるようとしませんが、剣さんはそれを肯定と受け取った。

「その点も白雪さんが熊野氏を殺害したという仮説に矛盾するんです。白雪さんが熊野氏を殺して解体処理をするなら、白雪さんは逆に浅間さんの服を着てそれを血まみれにして、浅間さんが疑われるように仕向けるでしょう。そもそも、列車の中という容疑者が限られる状況で殺人をすることが非合理的です。誰かに罪を着せる、という目的ならうってつけの状況ですけれどね」

「切符は？ その畏ってこの部屋でないと成立しない畏ですよ？ こんな多客期に列車の切符を押さえるだけでも大変なのにそんなに上手く指定できたんですか？」

犬塚刑事は浅間さんの方を見た。

「……ネットで調べたら、転売屋が偶然にも2号室の切符を売りに出していたんです。ぼつたくりでしたけれどそれを押さえました」

一同は浅間さんの回答に顔をしかめた。

「じゃあ、ダイナープレヤデスでの浅間様と熊野様の会話ってのは……」

「多分『本当にこの計画を実行するのか』という意味じゃないでしょうか？ 熊野氏にとってはダイナープレヤデスでのランチがまさに最後の晩餐になったわけですから、晩餐と言っても昼ですが」

大和さんは複雑な表情で俯き、怒りのこもった横目で浅間さんを見た。

「ですが、浅間さんと熊野氏が命と人生を代償に張ったこの畏は、思わぬところで破綻してしまいました」

剣さんは推理を小休止させ、窓の外を見た。飛行機が一筋の雲を描きながら飛んでいる。

「この辺には新千歳空港がありますからね……」

草津車掌が独り言を言った。

「話を続けましょう」

剣さんは浅間さんから白雪さんに目を移した。

「今度はあなたの番です、白雪さん」

* * *

「先程、白雪さんが熊野氏を殺害したと仮定した際に起きる幾つかの矛盾を明らかにして、熊野氏が死亡したのは浅間さんと仕組んだ畏だったということを説明しました。ですが、そもそもこの畏は初めから失敗していたんです。言い方は悪いですが、熊野氏は無駄死にでしたね」

「失敗だった？」

犬塚刑事がオウム返しに聞いた。

「ええ。だって、畏に嵌めるターゲットの白雪さんがそ

「そもそもこの列車に乗っていなかったんですから」

「……んん？」

「えっと、剣さん、どういうことですか？」

「悪い、剣。全く話が読めんのだが」

「ちゃんと説明しますので安心して下さい、碓氷さんに釜田さん。……どうやら白雪さんは説明されずとも心当たりがあるようです」

一同の視線が白雪さんに集中する。彼女の顔は青くなっていた。さつきまであんなに赤かったのに。

「白雪さん。熊野氏が死亡して、浅間さんがあなたを異に嵌めようとあれこれ細工をしている頃、あなたはどこで何をしていましたか？」

「ど……ど……ずつとこの列車の中に……」

「嘘ですね」

剣さんは冷徹にぼつさりと切り捨てる。

「白雪さん、あなた言いましたね？ 部屋から立山が見えたって」

白雪さんは顔に不安げな翳を浮かべ、何も答えない。

「ええ、言いました。言質は取ってあります」

矢野警部が手元のタブレットを見て確認した。

「部屋というのはこの5号車1号室のことですね？ 残念ですが、この部屋から立山は見えませんか。この部屋は日本海側に面していますからね。立山が見えるのは反対側の車窓です」

「……」

確かに、サロンカーで立山を見た時に、日本海側と真逆の方を見るのに身をよじった覚えがある。白雪さんは無言だ。

「いくつか質問しましょうか。白雪さん、日本海の眺めはどうでしたか？ 今日天気予報で曇りって言ってい

ました。その通りだったと思うんですがどうでしたか？」

そんなはずは無い。快晴とまではいかずとも晴れていて、とてもきれいな夕焼けだった。なのに白雪さんは答えない。剣さんはかまをかけた続ける。

「あれ、答えられませんか？ この列車はトワイライトエクスプレス。日本海に沈む夕陽を最大のセールスポイントにしている列車です。名前のトワイライト、黄昏もそこから名付けられています。日本海はあんなに大きくて長時間にわたってよく見えたのに、あなたは一体何を見ていたんですか？ あなたの目は節穴ですか？ まさか見たけれど忘れたなんて言いませんよね？ 天気予報と裏腹にあんなにきれいな夕焼けだったのに」

珍しい。剣さんがここまで人を挑発するなんて。白雪さんは無言を貫く。

「質問を変えましょうか、白雪さん？ あなたはパイプタイムでステーキピラフを頼んだそうですね？ どんなピラフでしたか？ あんなにガツツリしていた料理なら当然覚えているはずでしょう？」

「……ステーキとピラフのセットだったはずですよ」

「セットねえ……別盛りでしたっけ？」

違う。ピラフの上にステーキが乗せられていた。

「……」
食べた人には簡単な質問のはずだが、白雪さんはあくまでも無言を貫く。

「ステーキピラフは別盛りではありません。ピラフの上にステーキを乗せています」

三吉車掌が補足し、剣さんは肩をすくめた。

「もう一度質問を変えましょう。白雪さん、あなたは部屋にいて特に変な物音は聞かなかったと答えましたね？」
「うつらうつらしていたんです。そんな状態では多少の

物音には気付かないでしょう」

今度はまだともに聞こえる返事をしたが、どう頑張っても虚勢を張っているようにしか見えない。

「へえ……でもおかしいですね、釜田さんは昼寝で爆睡をかましていたにも関わらず、2号室の壁に熊野氏的首吊り遺体がぶつかる音で目が覚めたんですよ？ うつらうつらしていたくらい浅い眠りなら気付かないはずがないと思います？ しかも、2号室は壁を取り外して1号室と繋げられる構造上、1号室側が壁、3号室側が寝台になっています。首吊り遺体が壁にぶつかるのなら釜田さんがいた3号室よりもあなたがいた1号室側の方がもっと大きく音が響くはずなんです。何なら振動も伝わったかもしれません。うつらうつらしていたくらいなら気付くでしょう。本格的に熟睡していたとしても、全く気付かなかったというのは考えにくいです」

もはや白雪さんは何も答えない。いや、答えられない。

「何も見ていないし、何も聞いていない。そりやそうでしょうね。白雪さん、あなたはトワイライトエクスプレスの車内にいなかったんですから。じゃあどこに？ ……小田原で赤倉氏を殺したんじゃないですか？」

大和さんの体がびくりと震えた。

「……馬鹿なことを。私が食堂車でランチを食べていたの、神威さんも見たでしょう？」
「……そうだったな」

釜田さんは汚物を見た時のような呻き声と共に返事をした。白雪さん、私達に気付いていたのか。

「敦賀駅の手前での話ですね？」

剣さんは念を押した。白雪さんはぶつきらぼうに頷く。
「それだけじゃないわ。私は現に今ここにいます。警察の方から聞き込みを受けたのは朝の7時半くらいだったか

しらね? どうでした?」

「……ええ、そうでした」

矢野警部も苦り切った声だ。

「つまり洞爺駅を出た後ですか。洞爺駅の発車は7時18分でしたので、そういうことですね?」

白雪さんはやはりぶつきらぼうに頷く。

「まあ、その間の時間帯であなたの目撃証言が他の乗客から得られるかどうか……無理でしょうね。矢野警部、赤倉氏の死亡推定時刻はおおよそ何時くらいでしたか?」

「ちよっと待って下さいね……」

矢野警部はタブレットの中のお目当てのメモを探す。

「神奈川県警の調べによると、午後5時頃。誤差はプラスマイナス1時間です。時刻をずらすような細工は見られなかったようですから、そのまま鵜呑みにしていいでしょう」

剣さんはその答えを聞いてから、そしてポケットに手を入れた。

「じゃあ皆さん、これを見てもらえますか?」

剣さんが取り出したのは、さっき私の部屋で書いていた便箋だ。みんなで覗き込む(下図参照)。

「これって……」

私は思わず呟きを漏らし、そして白雪さんの方を見る。彼女はガタガタと震えていた。

剣さんはみんながメモの中身を確認したことを見届けて、話を再開させた。

「これなら、白雪さんは敦賀までトワイライトエクスプレスに乗車、そこから小田原に向かい、さらに洞爺からトワイライトエクスプレスに再度乗車できます」
剣さんは白雪さんを睨み、話を続ける。

	白雪	アライトリック	
トワイライトエクスプレス	敦賀	13:48着	
特急しらさぎ60号	敦賀	14:11発	
	米原	14:44着	
ひかり524号	米原	14:55発	
	小田原	16:36着	赤倉翔一氏を殺害
こだま668号	小田原	18:42発	
	品川	19:09着	京急線で羽田空港に移動
全日空81便	羽田空港	20:30発	
	新千歳空港	22:05着	
快速エアポート225号	新千歳空港	22:34発	
	南千歳	22:37着	
急行はまなす	南千歳	22:41発	
	伊達紋別	0:17着	
普通470D	伊達紋別	6:19発	
	洞爺	6:44着	
トワイライトエクスプレス	洞爺	7:18発	

出典：交通新聞社
『JR時刻表2013年5月号』

「何だかおかしいと思っていたんですよ、最初から。白雪さん、あなたのトワイライトエクスプレスの車内での行動はあまりにもアバウトすぎる。この列車は本当に凄いい列車なんですよ? 食事も一流、車窓も申し分ない、その割にあなたの行動にはあまりにも中身がなさすぎる。そりゃそうでしょうね、あなたは敦賀と洞爺間は別の所にいたんですから。下手に『この時間は列車内のこの場所です』なんて偽証もできません。共用スペースでは誰が見ているか分かりませんから、下手に偽証をするとすぐに他の乗客の証言と矛盾してしまいます。だからあなたは『部屋に引込んでいた』という中身の無い旅をしていたと偽るしかなかった。いや、むしろあなたが欲しかったのは『トワイライトエクスプレスに乗っていたから小田原で赤倉氏の殺害は不可能』というアライだった。トワイライトエクスプレスに乗っているアライさえあれば、警察の目も誤魔化せる。だから『トワイライトエクスプレスの車内で何をしてたのか』にまでは気を配らなかつた。夕食をコースディナーではなくパブタイムにしたのは、ディナーの本人確認を避けるためです。その時間に乗っていませんからね。逆にそれが浅間さんにとっては好都合でした。白雪さんが部屋にいる時間帯と熊野氏の死亡推定時刻が大体重なっていたので、警察が白雪さんを疑う材料の一つにもなりました。ですが浅間さん、あなたと熊野氏が張った罠は結局は無駄だったんです。熊野氏が死んだ頃、白雪さんはトワイライトエクスプレスにいなかったのですから」
剣さんは堅い声で続ける。

「白雪さん。あなた、『自分はずっとトワイライトエクスプレスに乗っていたから小田原には行けない』みたいなことを言っていましたよね? ですがこれなら小田原で

2時間以上も時間が取れ、その滞在時間も赤倉氏の死亡推定時刻の午後5時にも一致しますよ？ 調べるのに使った時刻表には京急羽田空港線の時刻が載っていないかったたのでここには明記していませんが、これだけ時間があれば品川から余裕で飛行機に間に合います。昨日は特にダイヤ乱れも起きていませんし、この列車も洞爺に着く時までには遅延を回復してしましたからね。このトリックは実行可能でした。いかがですか？」

剣さんは白雪さんの返事を待たずに続ける。まあ、待ったとしても沈黙しか返ってこないだろう。

「大和さん、クルーの仕事には洞爺駅での朝刊の受け取りがあったはずですよ。今朝の受け取り担当は誰ですか？」

「え、あ、はい、私でした」

急に話を振られた大和さんは驚いた。

「洞爺駅で白雪さんがトワイライトエクスプレスに乗り込む所を見ませんでしたか？」

「……さあ、新聞に気を取られていたのではっきりとは分かりません」

白雪さんの表情が僅かに落ち着く。

「でも、新聞を持ってきてくれた人なら覚えているかもしれない。ホームでずっと列車の到着を待っていたはずですから」

少し落ち着いたはずの白雪さんの表情がまた歪む。矢野警部が犬塚刑事に目配せした。後で聞き込みをかけるのだろう。

剣さんはお構いなしに話を続ける。

「白雪さんの動機についてですが、ここからは僕の想像がだいぶ混ざります。浅間さん、あなた、白雪さんから200万円を騙し取られた時、弁護士などには相談しなかったそうですね？」

「え、ええ……」

「それと大和さん、赤倉氏はゆくゆくはあなたを会社に入れようとして、そのまま火の車の会社を押し付けようとしていたと考えられる、みたいな話を警察から聞きましたよね？」

「……はい」

大和さんはまだそのことを受け入れられないようだ。

「白雪さん、あなたが元夫である赤倉氏にやったことを赤倉氏はそのまま大和さんにやろうとしたみたいなんです。証拠こそまだ出てはいませんが、証拠が無い状態で逆にここまで警察に読まれるとなれば決定的証拠が出てくるのも時間の問題でしょう。赤倉氏は当然、あなたの手法をお手本にしたと考えていいでしょう。その手本を綿密に調べる過程で、あなたが何かしらの違法行為をしたことを嗅ぎ付けて、それをネタにあなたに脅迫か何かをしたのではありませんか？ 僕は会社の制度とかそういう方面には疎いのでよく分かりませんが、赤倉氏の自宅は強盗が入ったかのように荒らされていたそうですね？ その証拠を採し出して隠滅するのがあなたのだらう？ 浅間さんも弁護士などに依頼しなかったため、今までその違法行為が露見することもなかった」

「……翔一君の、妻……だったんですか？ 白雪さん……？」

大和さんの顔に驚愕が浮かぶ。そしてその顔に悔しさが滲む。頬に赤みが差し、目尻に涙粒が浮かぶ。

「あなたが……あなたが翔一君を……っ！」

拳を握りしめるが、やがて力なくその掌を開く。

「大和さん……」

三吉車掌がそっと近寄り、肩を撫でてなだめる。

白雪さんは黙ってそのやり取りを見ていたが、やがて力なく笑い始めた。

「剣さんって言ったかしら……。あなた、まるで全部見ていたよね……ここまで分かっちゃうなんて」

それが答えだった。

「何笑ってんのよ……」

どこからか、低い泣き声が漏れ聞こえた。

「人を殺しておいて……誰かを不幸にしておいて……あなたはどうしてそんなふうになんて笑っていられるのよ！」

怒鳴ってから気付いた。この声、私だ。

「殺された人には、死に別れた人にはもう二度と会えない！ 残された人には悲しみしか残らない！ そんな……そんなひどいことをしておいて、あなた、何でヘラヘラ笑ってられんのかって聞いてんのよ！」

溢れ出した怒りは、しかし、彼女の笑みを壊せない。

「答えなさいよ！」

答えはただの笑い声だけだった。

『まもなく南千歳、南千歳です。新千歳空港へお越しのお客様はこちらでお降り下さい。お降りの際は、お足元に……注意下さい。南千歳をしますと、次は終着駅、札幌……終着駅、札幌でございます』

トワイライトエクスプレスは空港を横目に最後の停車駅、南千歳駅へと入っていった。駅の上をジェット機が飛んでいく。空港にはたぐさんの飛行機が翼を休めている。この女が乗った機体もこの中にいるかもしれない。

「春江」

釜田さんが冷たく元妻の名を呼んだ。笑い声が止む。

「どうだ、陽が昇った後の南千歳駅は？ 新千歳空港は？ 夜と比べてみて違うか？」

白雪さんはその皮肉に、笑顔を苦笑で歪めた。

「ええ……全く別の土地みたい」
僅かな小休止のあと、トワイライトエクスプレスはまた走り始めた。

次は終着駅、札幌だ。

エピソード

自室で荷物をまとめてみると、スピーカーからオルゴールのチャイム。最後の車内放送が流れ始めた。

『お客様にご案内致します。大阪から22時間、1500キロを走りまして、トワイライトエクスプレスはまもなく終着駅、札幌……終着駅、札幌に到着致します。車内にお忘れ物、落とし物などございませんようにお手回りに十分ご注意ください。お出口は右側、4番線の到着になります。お降りの際はお足元にご注意ください。また、当列車内で発生した事件の影響でお客様に多大なご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。申し訳ありませんでした。……長らくのご乗車、誠にありがとうございました。ございました。終着駅、札幌です。皆様のまたのご乗車を、乗務員一同心よりお待ちしております』
いくら道中のご迷惑に巻き込まれまくったとはいえさすがに感慨が湧く。剣が俺に話しかけてきた。

「釜田さん……」

「ん？」

「……白雪さんのことですか」

「……ああ」

どうしても返事が一拍遅れてしまう。今や縁もゆかりも情も無い相手だが、さすがに人を殺したと聞かされた

時にはショックだった。

「この列車の車掌さんで、草津さんって人がいたのを覚えていますか？」

「……そういえばいたような気がするな」

「あの人、多分白雪さんの元夫か、あるいはかつて付き合っていた人だと思えます」

……理解が追い付かない。

「ええ？ 何でまた……」

「釜田さん、言っていましたよね？ 京都駅を出た後に

白雪が誰か男と話していたって」

「俺以外に作った男か何かだろう、みたいなことは言ったが……何でそれが草津とか言う車掌なんだよ」

「他に考えられる人がいないからです。彼女は一人旅でした。男の音がすると思ったら乗務員しか考えられません。僕らの部屋の検札を担当した三吉車掌は1号車の方から順に検札に回ってきました。草津車掌は9号車の方から列車の中間にあたるこの5号車でかち合ってもおかしくはありません。釜田さんが部屋を出たのは検札が来た直後でした。何より、白雪さんは警察からの聞き込みで『草津車掌が検札に来た』と確認されていました」

「でも、俺達の部屋の検札の直後に食事の時間の案内に来たクルーは？ あいつも男だっただろ？ あの乗務員も各部屋を回ってるんじゃないか？」

「男性クルー……中村さんのことですか。たしかにあの人も男性乗務員ですが、B個室での食堂車の案内は手短でした。僕と釜田さんが雑談を終え、釜田さんが部屋を出た時に1号室に居たのが彼だとしたら、あまりにも時間がかかり過ぎています。その上、中村さんは僕達の部屋の案内を済ませた後、1号室の方ではなくて4号室の方に向かいました。中村さんは無関係でしょう」

俺はもう何て言えいいのかさえ分からなかった。胸の奥から笑いがこみあげてくる。笑うしかない。

「車内放送の声にも聞き覚えがあるけど、誰の声か思い出せないみたいなこともちらっと言っていましたよね？

確か俱利伽羅峠の時だったと思いますが。多分それ、草津車掌の案内です。……草津車掌は別に何も悪いことをしていませんし、さっきのみんながいる場では言うのは避けましたが、釜田さんには伝えておこうと思つて。釜田さんが結婚していた頃の浮気相手かどうかもまでは分かりませんけれど」

とうとう俺は笑い出した。剣が変な目で俺を見る。

「……どうしたんですか？」

「いや、その、何だ。世間はつくづく狭いなって思つてな。この列車の中に白雪のあはずれの関係者がどれだけ乗っているんだよ」

俺はひとしきり笑った後、ぽつりと云った。

「……逢魔が時、つてやつだったのかもしれない」

「大禍時ですか」

逢魔が時。変化して大禍時ともいう。トワイライトタイム、すなわち黄昏時という、薄暗く気味悪い時間帯をこう呼んで忌み嫌う風習が古代日本にはあったという。物の怪や妖に出会いそうな時間、著しく不吉な時間とさわれていた……と、何かの本で読んだことがある。

「みんなみんな、逢魔が時の『魔』が仕掛けたのかもしれないですね」

「そうかもなあ……字面だけで話しているから、本当のところは知らんが。まあ、なんにせよ、トワイライトエクスプレスってのは本当に良い列車だよ」

剣は俺の言葉に大きく頷いた。

誰かが部屋をノックした。開けると確氷が立っていた。

「そろそろ行きますか」

剣が碓氷に微笑み、碓氷も静かに頷いた。

「剣」

俺は背後からそっと耳打ちする。

「碓氷と上手くやれよ」

剣はすこし顔を赤くした。列車が薄暗い駅の構内に入ったせいであまりよく見えないのは幸いだろう。

午前9時52分。トワイライトエクスプレスは、定刻通り終着駅、札幌に到着した。

* * *

終わった。

とうとう、私の最後の旅が終わった。

最後にクルー一同はサロン・デュ・ノールに集合する。

私が最後の一人だった。

「大和さん、こつちへ」

川越料理長がスペースを確保しておいてくれた。

「……婚約者さんのこと、残念でしたね」

「……いえ、もういいんですよ」

私は努めて明るく、吹っ切れたように言った。このふりも続けているうちに、いつか本当に吹っ切れる日が来るはずだ。

「これからどうするんですか？」

「どうしようかな……ま、気楽に考える。オフアームもあるにはあるし」

「えっ、もうですか？」

「まあね」

黒糸さんも私の笑顔につられてころりと笑う。……さ

つき貫った名刺、後でよく見ておこう。秋田の居酒屋……どうなんだろう。ま、なるようになるでしょ。

「あつ、あれ」

朝霧君の目線の先を追うと、私が愛した人を殺した女が警察に連れられて、ホームから姿を消すところだった。

「……朝霧君、あくまでもお客様よ」

「……すいません」

「最後まで大和マネージャーは厳しいなあ」

「当たり前でしょ！ あんたたちを置いていくのがどんなに心配か……」

中村君の一言に噛み付く。

「そんなに心配なら、また乗りに来て下さい。待っていますから」

「大久保さん、早くマネージャー昇進試験をパスして、こいつらと新入りをビシバシ鍛えてやってね」

「えっ」

「げっ」

こっぴどく談笑するのも最後になるだろう。

「……本当に何も声を掛けなくてよかったですか？」

「……もう終わった話ですよ。これでいいんです」

デッキの方で三吉車掌と草津車掌が何やら話している。一見、三吉車掌が草津車掌を励ましているように見えるが、どうしたんだろう。

「さ、もうすぐ発車ですよ」

ドアが閉まり、機関車の警笛が響く。トワイライトエクスプレスはゆっくりと車庫へ向かって走り出す。

ホームには、長旅を共にした乗客の皆様。

「乗車、ありがとうございました。」

私達は深々とお辞儀をした。

* * *

5月にも関わらず、札幌駅は寒かった。吐く息が白い。私はトレンチコートの襟元をしつかりと合わせた。

「碓氷さん、先頭で写真撮りましょうよ」

剣さんが少しはしゃいだ声で誘う。私も剣さんの横に並んで歩く。

「剣さん……」

「ん？」

剣さんが私を見た。

「あの……その、お、お付き合いの件ですけど……」

剣さんは少し顔を赤くしたが、私ほどではない。先を促すかのように穏やかな目で私を見つめる。

「その……あんなことを言われたのは初めてで……だから……だから、返事はしばらく待ってもらえませんか？

……自分の心が分からないんです」

「……ええ。待っています」

「あと……それともう一つ。事件についてなんですけれど……」

「え？」

「一つだけ、府に落ちない点があるんです。その、事件のことで」

「……何かありましたか？」

私は少し躊躇ったが、ここで聞いておかないともう聞けなくなるような気がした。一思いに言う。

「浅間さんって、熊野さんと同棲してたんですよね？

ってことは、お互いにそれなりに心を許しあっていたはずですよ。それを……あんな畏を張って、熊野さんが死んだ後に……あんなこと、本当にできるんでしょうか？

……頭部と両手を切り落とすなんてむごたらしいこと」

剣さんは少し驚いたような表情をした。そして……普段はあまり見せない、しんどそうな顔をした。

「このことは確証が持てなかったので黙っているつもりでしたし、今から話すことは何も証拠が無いことです。その前提で話しますが……熊野氏がかつて交通事故で父

子を死亡させたことを警察の方が話していましたよね？」

「ええ……そういえば、そうでしたね」

警察から聞いたというより、警察の話立ち聞きした大和さんから又聞きしたという方が正確だ。

「その事故がどうしたんですか？」

「……浅間さん、家族を亡くして独り身になった後に熊野氏と出会ったって言っていましたよね？」

「……まさか。」

「剣さん、浅間さんの家族が無くなったのは熊野さんの事故によるもので、浅間さんはそれを知っていて熊野さんに近づいたって言いたいんですか？」

「そんな偶然……。」

「偶然、なんですかね……浅間さんは姿をくらました白雪さんの行動も調べて、この列車に乗り込んだと言っていました。……熊野氏の過去を知ることくらい、彼女にとっては実はたやすいことだったのかもしれない」

いくら証拠は無いとはいえ、熊野さんにかつて家族を奪われたのなら……あんな真似もできるのだろうか。どうなんだろう。

「浅間さん、最初から熊野さんに復讐するつもりで近付いたんでしょうか？」

「今となつては分かりませんが……復讐、まではいかなかったんじゃないでしょうか？ 事故つてことで故意ではないわけですし、そもそもあの事故では熊野氏側の法的責任は薄かったはず。復讐するにしても、わざわざ今までタイミントを引き延ばす理由もありません」

どの道今は分からないし、いつ分かる日が来るとも思えない。

「おーい、場所取りしてるから早く来い！」

釜田さんが機関車の前を一部陣取って、私と剣さんを

待っている。私達は歩調を速めた。

先頭に行く機関車が変わっていた。青いディーゼル機関車が二両、僅かに煤煙を上げている。

「ほれ、笑え！」

釜田さんの合図で笑顔を作る。剣さんの横で、すこしはにかんだ笑顔になってしまった。

ホームの奥で警察の一団がぞろぞろと動いていた。あの中に浅間も白雪もいるのだろう。矢野警部と犬塚刑事は電話をかけている。風に乗って話の断片が聞こえてくる。安部さん、池本さんみたいな感じの名前の人にお礼を言っているらしい。

『4番線、ご注意下さい。回送列車が発車します』

アナウンスがホームに鳴り響く。

「どうどうお別れですね」

もうそんな時間？ 大阪駅を発つたのがついさっきのような気がする。思えばあつという間の旅だった。

機関車が甲高い警笛を鳴らす。そしてエンジン音をかなり立てながら、ゆっくりと退場を始めた。

「剣、確氷、見ろよ」

釜田さんがサロンのカーの方を指した。中でクルー一同が深々とお辞儀をして、そして手を振っている。私も手を振り返さずにはいられなかった。

深緑色の優美な列車はホームを離れ、だんだんと小さくなっていく。小さく、そして、遠く。まるで色褪せてしまったことは美しくない。だけど、トワイライトエクスプレスそのものはとても美しい旅だった。そしてトワイライトエクスプレスは、カーブを曲がってその姿を消してしまった。

「……じゃあ、行くか」

「……ええ」

釜田さんが最初に歩き出し、剣さんもいそいそその後が続く。

「確氷さん、行きましようよ」

剣さんに呼ばれ、振り向く。剣さんのその垂れ目はいつものように優しく、穏やかだった。

「おーい、確氷！ 置いていくぞ！」

釜田さんも私を呼ぶ。

「今……」

血の臭いがする後ろめたさが、私の二の腕を掴む。

このまま、行つていいの？

「今行きます！」

私は、今はその手を振り払い、二人の後を追って歩き出した。でも、最後にもう一度だけ振り返る。もう見えるはずの無い列車を想う。終わってしまった、夢のひと時を想う。

素敵な旅がありがとう、トワイライトエクスプレス。

* * *

今は、静かに待とう。

彼女の納得した答えが聞きたいから。

僕は確氷さんの笑顔につられて微笑む。

やっぱり、この人の笑顔が好きだ。

遠くから鋭い警笛が聞こえた。

〈第二話につづく〉

*次回作『命懸けの疾走(仮題)』は三文分誌冬号に掲載予定です。ご期待下さい。